

其れ然らずや。

【大意】人或は曰く、吳と蜀とは唇齒の關係に在るを以て、蜀滅ぶれば吳も亦隨つて亡びざるを得ずと。理或は然らん。然れども蜀は吳の藩援なるも吳の存亡必ずしも蜀に由らざるなり。何となれば吳と蜀とは境を接すれども、其間險狹にして車を行るの路なく、川流急迅にして舟を行難し。故に百萬の銳師、千里の舳艫も一時に之を送るべからず。故に劉備の吳を伐つや、陸遜蜀兵を以て長蛇に喩へたり。其地狭くして首尾相救ふを得ざるを言ひしなり。昔蜀の初めて亡びし時、吳の朝臣晉兵の必ず鋒を轉して吳に來寇せんことを計り、或は曰く、石を積んで江水を遏むべしと。或は曰く、機械を整へて之を禦ぐべしと。大司馬陸公曰く、江水は天地の其氣を通ずる所以なれば、固より人力を以て之を遏むべきにあらす。ただ機械は彼我の共にする所なり。晉人若し其の長ずる所の陸戰を棄て、其の拙なる所の水戰に依り、我が國に來りて舟楫の用を争はば、其の敗れんこと必せり。此れ天我を助くるなり。宜しく峽山の口を守り晉兵を擒にすべしと。步闡の吳に叛くや、晉の大軍吳の要害を守り、以て吳軍の西向するを止め、又巴蜀の水軍江に沿うて東に下る。陸公壘を高うして寇を禦ぐ。是に於て步闡俯伏して誅を待ち、晉兵夜遁る。乃ち更に銳師五千に命じて水軍を禦がしめ、かくて東西ともに捷利を得たり。是れ皆賢人陸公の謀なり。陸公、没するや晉潛に吳を伐たんことを謀り、吳軍是

に於てか驚擾す。ああ太康の時(晉の太康元年、晉吳を滅せり)兵衆未だ昔日魏蜀の軍より盛ならず。而も吳の滅びたるは何ぞや。陸公没して後復た良將なきに由るなり。易に曰く、(五)湯武命を革めて天に順ふと。(六)玄に曰く、亂極らずんば則ち治形れずと。帝王の天時に因るを言ふなり。(七)古人言へるあり。曰く天時は地利に如かずと。易に曰く、王侯險を設けて以て其國を守ると。國を爲むるの險を恃むを言ふなり。又曰く、(八)地利は人和に如かず。(九)徳に在りて險に在らずと。險を守るの人に由るを言ふなり。吳の興るや參にして由ふ。(一〇)孫卿の所謂其參を合する者なり。其の亡ぶるに及んでは、險を恃むのみ。又孫卿の所謂其參を舍つる者なり。夫れ(一一)四州の氓衆なきにあらざるなり。大江の南俊に乏しきにあらざるなり。山川の險守り易きなり。(一二)勁利の器用ひ易きなり。(一三)先政の策循ひ易きなり。功興らずして禍違へる者は何ぞや。之を用ふる所以の者失すればなり。是の故に先王は經國の長規に達し、存亡の至數を審にし、己を謙して以て百姓を安んじ、惠を敦くして以て人和を致し、寛沖にして以て(一四)俊父の謀を

- 【六五】湯武。殷の湯王、周の武王。
- 【六六】玄。楊雄の太玄經。
- 【六七】古人。孟子なり。
- 【六八】地利云云。孟子の語なり。
- 【六九】徳に在り云云。史記に、魏の武侯曰く、美なる山河の固、此れ魏國の實なりと、吳起對へて曰く、徳に在りて險
- 【七〇】孫卿。荀子なり、荀子に、天に其時あり地に其財あり人に其治あり、夫れ是を能く參合すと云ふとあり。
- 【七一】四州。荆揚交廣、皆吳の地なり。
- 【七二】先政。孫權時代の政化。
- 【七三】俊父。賢人なり。
- 【七四】在らずと、とあり。

誘め、慈和にして以て士民の愛を結ぶ。是を以て其の安きときは、則ち黎元之と慶を同うし、其の危きに及んで、則ち兆庶之と患を共にす。安きとき衆と慶を同うすれば、則ち其の危きこと得べからず。危きとき下と患を共にすれば、則ち其難恤ふるに足らず。夫れ然り。故に能く其社稷を保ちて其土宇を固うし、麥秀、殷を悲むの思なく、黍離、周を感むの感なし。

【大意】帝王は天時に因りて興り、地利に據りて守り、人和に依りて立つ者なり。此三者なければ國則ち亡ぶ。吳に衆民あり、賢士あり、要害あり、利器あり。而も滅亡に至れるは何ぞや。人を用ふること宜しきを失ひしが爲なり。人君たる者能く上下相和し君臣疑はざらしめば、永く國家を保ちて滅亡の患なからん。

陸士衡 五等諸侯論

夫れ國を體ち治を營むは先王の慎める所、制を創め基を垂るるは後葉を隆にせんことを思へばなり。然れども經略同じからず、長世術を異にす。五等の制は黃唐より始まり、郡縣の治は秦漢より創まる。得失成敗備に

- 【一】五等。公侯伯子男なり、古は聖王五等を立てて以て天下を治む、漢に至りて封樹古制に依らず、乃ち此論を作る。曹元首の六代論、柳宗元の封建論と參看すべし。
- 【二】後葉。後世子孫なり。

典謨に在り、是を以て其詳得て言ふべきなり。

【大意】先王の制度を定めしは國家の長久を計ればなり。然れども其制度一ならず。封建の制は遠く黃帝より始まり、郡縣の制は近く秦より始まる。其利害得失は史籍を觀て知るを得。

夫れ先王帝業の至重にして天下の至曠なるを知る。曠なれば以て偏制すべからず、重なれば以て獨任すべからず。重に任ずるは力を借るを必とし、曠を制するは人に因るに終る。故に官を設け職を分つは、其任を軽くする所以なり。五長を竝べ建つるは、其制を弘むる所以なり。是に於てか其封疆の典を立て、其親疎の宜しきを財ち、萬國をして相維りて以て盤石の固を成し、宗庶雜居して維城の業を定めしむ。又以て綏世の長御を見、人情の大方を識るあり。其の人の爲にするは己を厚うするに如かず、(一)物を利するは身を圖るに如かざれども、上に安んずるは下を悦ばすに在り、己の爲にするは人を利するに在るを知る。故に易に曰く、説ばしめて以て民を使へば民其勞を忘ると。(二)孫卿曰く、(三)利せずして之を利するは

- 【三】黃唐。黃帝及び堯。
- 【四】典謨。史籍なり。
- 【五】至曠。極めて廣きこと。
- 【六】偏制。獨力にて制馭す。
- 【七】獨任。獨力にて荷ふ。
- 【八】五長。五等諸侯。
- 【九】典。規則なり。
- 【一〇】財。裁と通ず、分つこと。
- 【一一】宗庶。同姓異姓の諸侯。
- 【一二】維城。詩經に、宗子維城なり、城をして壞れしむるなくんば、獨り斯に畏るるなしとあり。
- 【一三】綏世。世を安んずること。
- 【一四】長御。善き制馭法。
- 【一五】大方。大道といふが如し。
- 【一六】物。他人なり。
- 【一七】易。兌卦の辭。
- 【一八】孫卿。荀子なり。
- 【一九】利せず云云。上の利は人に人を與ふること、下の利は己の爲に人を利用すること。

利して後之を利するの利なるに如かずと。是を以て天下に分つに厚樂を以てして己之と愛を同するを得。天下に饗するに豐利を以てして我之と害を共にするを得。利博ければ則ち思篤く、樂遠ければ則ち憂深し。故に諸侯、食土の實を饗け、萬國、世及の祚を受く。夫れ然らば則ち、南面の君各其治を務め、九服の民定主あるを知る。上の子愛是に於てか王たり。下の體信是に於てか結ぶ。世治まれば以て風を敦うするに足り、道衰ふれば以て暴を御ぐに足る。故に彊毅の國も一時の勢を擅にする能はず、雄俊の士も霸王の志を寄する所なし。然る後國の安きは萬邦の治を思ふに由り、主の尊きは、羣后の身を圖るに頼る。譬へば猶ほ、衆目方を營んで則ち天網自ら昶ひ、四體難を辭して、心膂又きを獲るがごとし。蓋し三代の道の直くする所以、四王の業を垂るる所以なり。

【大意】先王は天下の至重至廣にして獨力を以て制馭するに堪へざるを知る。故に五等諸侯を立て其職任を分かち、萬國相連りて王室を固うせしむ。先王又人の情皆己の爲にするに急にして、人の爲にするに緩なれども、人

- 【九】 食土。封土を食むこと。
- 【一〇】 世及。世襲なり。
- 【一一】 南面の君。諸侯をいふ。
- 【一二】 九服。天下なり。
- 【一三】 子愛。天下の民を愛すること己の子の如くす。
- 【一四】 體信。下の上を信すること。
- 【一五】 然る後。一本後字なし。然らばと讀む。
- 【一六】 羣后。諸侯なり。
- 【一七】 衆目。目は網の目、諸侯に喩ふ。方。四方なり。
- 【一八】 天網。王室に喩ふ。昶。通なり。
- 【一九】 四體。手足なり、諸侯に喩ふ。辭。去るなり。
- 【二〇】 心膂。王室に喩ふ。
- 【二一】 三代。夏殷周なり。
- 【二二】 四王。虞夏殷周なり。

君として上に安居するには、先づ人の爲に利し、然る後己を利するの得策なるを知る。故に獨り天下の利を專にせず。諸侯に與ふるに富厚を以てし、以て憂樂を諸侯と共にす。故に諸侯能く四方を安んじて其難を去り、天子の國亦隨つて安きを獲るなり。是れ先王の封建の制を立てし所以なり。夫れ盛衰隆弊は理の固より有る所、教の廢興は其人に繋る。愿法は必ず涼きに期し、明道は時ありて闇し。故に世及の制は、疆禦に弊え、厚下の典は、末折に漏ふ。侵弱の釁、三季より遘り、陵夷の禍七雄に終る。昔者、成湯親しく夏后の鑒を照にし、公且目あたり商人の戒を涉り、文質相濟し、損益物あり。故に五等の禮時に革まらず、封畛の制隆ありて爾る者は、豈に二王の禍を玩んで經世の算に闇きならんや。固より知る百世、懸御すべきにあらず、善制も弊なき能はざるを。而れども侵弱の辱は、祀を殄つに愈

- 【一】 愿法。愿は謹なり。
- 【二】 疆禦。諸侯強くして天子に反抗すること。
- 【三】 末折。末大なれば本必ず折る、諸侯強大にして王室の覆ること。
- 【四】 侵弱。強國弱國を侵伐すること。
- 【五】 三季。季は末なり、夏殷周の末。
- 【六】 陵夷。衰微なり。七雄。戰國の七大國。
- 【七】 成湯。殷の湯王。夏后。夏の王。
- 【八】 公且。周公且なり。商人。子孫の絶ゆること。
- 【九】 封畛。封土なり。
- 【一〇】 二王。夏殷の王。
- 【一一】 懸御。遠き後の世までも治むること。
- 【一二】 祀を殄つ。國家滅亡して子孫の絶ゆること。

り、土崩の困は陵夷より痛し。是を以て始を經むるには其の福多からんことを權り、終を慮るには其の禍を少くせんことを取る。侯伯亂るべきの符なく、郡縣治を致すの具にあらずと謂ふにあらざるなり。故に國憂ふれば其釋位を頼み、主弱ければ其翼戴に憑る。微を受け弊を積み王室遂に卑きに及ぶも、猶ほ名位を保ち祚後嗣に垂れ、皇統幽なれども輟まず、神器否なれども必ず存する者は、豈に置勢之をして然らしむるにあらずや。

【大意】 夫れ盛の衰あるは猶ほ朝の必ず暮るるが如く、固より免れざる所なり。ただ治化の興廢は其人に由るのみ。故に封建世襲の制も三代の末に至りては、諸侯強大にして天子之を制する能はざるに至りしと雖も、此れ制度の罪にあらず。されば殷湯、周公は猶ほ封建の制に依りて敢て之を改廢せず。蓋し諸侯の強大にして制し難きは、辱は則ち辱なりと雖も、郡縣の制を布きて（秦の如く）國家土崩瓦解し、以て世祀を絶つに勝るを知らばなり。封建の制は絶對の善制にして、郡縣の制は治を致すの法にあらずと謂ふにあらざるなり。故に王室衰弱せるも諸侯或は其位を去りて王室を安んぜし者あり。天子弱きも諸侯之を翼戴せし者あり。天子否塞に遭ふも、其統絶えず其政存せしは、豈に封建の効にあらずや。

- 【四七】 侯伯。封建なり。
- 【四八】 釋位。諸侯位を去りて王室を安んずること。
- 【四九】 置勢。諸侯を立てしこと。

降つて亡秦に及び、道を棄てて術に任じ、周の失に懲り、自ら其の得たるを矜る。斧を尋ふること、庇する所に始まり、國を制すること下を弱むるに味し。國慶あれば獨り其利を饗け、主憂ふるも與に害を共にするなし。亡を速き亂を趣すこと必ずしも一道ならずと雖も、顛沛の覺實に孤立に由る。是れ蓋し五等の小怨を思ひて、經國の大徳を忘れ、陵夷の患ふべきを知りて、土崩の痛を爲すに聞ければなり。周の競はざるは、自りて來るあり。國の令主に乏きこと十有餘世。然れども、片言王に勤むれば諸侯必ず應じ、一朝振矜すれば遠國先づ叛す。故に彊晉其の隧を請ふの圖を收め、暴楚其の鼎を觀るの志を頓む。豈に劉項の能く關を闚ひ、勝廣の敢て澤に號ぶならんや。借使秦人周制に因循せば、則ち無道なりと雖も、與に弊を共にするあり。覆滅の禍、豈に曩日に在らんや。

- 【五〇】 庇する所。子弟をいふ、左傳に、公族は公室の枝葉なり、若し之を去らば本庇蔭する所なしとあり。
- 【五一】 顛沛。顛覆なり。
- 【五二】 令主。善主なり。
- 【五三】 片言。一言なり。
- 【五四】 振矜。己の強に誇ること、公羊傳に、葵丘の會に齊の桓公震つて之に矜る、叛く者九國とあり。
- 【五五】 隧。王者の葬法なり、晉侯隧を許さんことを請ふ、周王許さず、事左傳に出づ。
- 【五六】 劉項。漢の高祖劉邦、及び項羽。
- 【五七】 勝廣。陳勝、吳廣、大澤の中に叫び秦を滅すの軍を起す。
- 【五八】 周制。周の封建制。
- 【五九】 曩日。昔日なり、秦滅亡の時をいふ。

【大意】秦に至り道義を棄てて術策を弄し、武力を以て周を奪へるに矜り、子弟を殺して諸侯となさず、専ら下を弱めんことを勉めたり。是を以て天子孤立無援にして、國家の滅亡を速けり。周に明君なきこと十餘世、國漸く衰へたりと雖も、一人立つて王事に勤むる者あれば諸侯皆之に應じ、一人功に矜る者あれば諸侯皆之に叛きしは、全く封建の効と謂はざるべからず。故に若し秦をして封建の制に因らしめば、たとひ暴虐無道なりとも、必ず諸侯の之を輔くる者ありて、土崩瓦解の禍を免れしならん。

- 【六一】 賈生。賈誼なり。
- 【六二】 六臣。燕王臧荼、韓王信、淮陰侯韓信、梁王彭越、淮南王黥布、燕王盧縮。
- 【六三】 七子。吳王濞、膠東王卬、楚王代、趙王遂、濟南王甞光、淄川王賢、膠東王雄渠。
- 【六四】 皇祖。高祖なり。黥徒。黥布嘗て刑を被りて黥せらる、故に黥徒といふ。夷。傷なり、高祖黥布を伐つ、流矢に中りぬ。
- 【六五】 西京。漢の景帝を指す。東帝。吳王濞なり、濞嘗て自ら東帝と稱せり。
- 【六六】 正に過ぐる。秦の枉を矯めて正に過ぐるなり。
- 【六七】 呂氏の難。高祖の崩すや、呂産呂祿等皇位を篡はんとせし事。

漢は秦の枉を矯め大に侯王を啓く。境土踰溢し舊典に違はず。故に 賈生其危きを憂へ、晁錯其亂を痛む。是を以て諸侯其國家の富を阻み、其士民の力に憑り、勢足る者は反疾く、土狹き者は逆遅し。祖黥徒に夷せられ、西京東帝に病めり。是れ蓋し 正に過ぐるの災にして、侯を建つるの累にあらざるなり。然れども 呂氏の難に、朝士外顧し、宋昌漢を策り必ず諸侯を稱せり。中葉に至るに逮び、其

【六八】 六臣其弱綱を犯し、七子其漏網を衝き、皇

失節を忌み、宗子を割削し、名ありて實なし。天下曠然として復た亡秦の軌を襲ぐ。是を以て 五侯威を作して 萬邦を忌まず、新都漢を襲ふこと遺を拾ふよりも易し。光武中興し纂いで皇統を隆にす。而も猶ほ覆車の遺轍に遵ひ、喪家の宿疾を養ふ。僅に數世に及んで 姦宄充斥し、卒に 疆臣朝を專にするあれば、則ち天下風靡し、一夫從横なれば則ち城池自ら夷ぐ。豈に危からずや。周の衰に在りて難王室に興り、命を放にする者 七臣、位を干す者 三子。嗣王其九鼎を委て、凶族其天邑に據り、鉦聲闐宇に震ひ、鋒鏑 絳闕に流る。然も禍幾旬に止り害 覃及せず。天下晏然として治を以て亂を待つ。是を以て宣王 共和に興り、襄惠 晉鄭に振ふ。豈に二漢の

- 【六九】 宗子。諸王なり。
- 【七〇】 五侯。漢の成帝外戚王譚、王立、王根、王逢、王商を封じ列侯となす、之を五侯といふ。
- 【七一】 萬邦。諸侯王なり。
- 【七二】 新都。王莽なり、嘗て新都侯に封ぜられしを以てなり。
- 【七三】 喪家。家を亡すこと。宿疾。舊弊に喩ふ。
- 【七四】 姦宄。充斥。充滿なり。
- 【七五】 疆臣。梁冀なり。
- 【七六】 一夫。董卓なり。從横。亂を起すこと。
- 【七七】 七臣。薦國、邊伯、石速、詹父、子禽、祝跪、蘇子。
- 【七八】 三子。子頰、叔帶、子朝。
- 【七九】 嗣王。惠王、襄王、悼王。九鼎。皇位なり。
- 【八〇】 兇族。三子なり。天邑。王城なり。
- 【八一】 鉦聲。金鼓の聲。闐宇。四方なり。
- 【八二】 絳闕。天子の宮殿。
- 【八三】 覃及。遠く及ぶ。
- 【八四】 共和。史記に、周人相與に畔いて厲王を襲ふ、王奔に於て、周召公相共に政を行ひ、號して共和といふこと十四年、厲王薨に死し、二公乃ち共に宣王を立つとあり。
- 【八五】 晉鄭。襄王出でて鄭に居る、母弟の難を避くるなり。又惠王位に即く、衛燕二國の軍周を伐つ、鄭伯王を輔く。
- 【八六】 華臣。姦臣董卓。

階闐蹙く擾れて四海已に沸き、孽臣

朝に入りて九服夕に亂るるが若くならんや。

【大意】漢は秦の弊に鑑み封建の制を取りしも、封土を興ふること廣大に過ぎたり。是れ賈誼の諸侯の強盛にして國家の危からんことを憂へ、晁錯の諸侯の亂をなさんことを恐れ、景帝に勸めて領土を削らしめし所以にして、六臣七國の反亂せしは封建の罪にあらず、境土を興ふるの過大なればなり。故に呂氏の禍難を起すや、士大夫皆心を代王に寄せ、宋昌諸侯の恃むべきを言へり。亦以て封建の効を知るべし。漢の中葉に及び漸く諸侯の勢を殺ぎ、諸侯の名ありて諸侯の實なし。名は封建といふも實は郡縣に同じ。故に外戚權を擅にし王莽位を篡ふに至りぬ。光武帝漢室を復興せしも、亦漢の覆轍を蹈んで郡縣の制を取り。故に僅に數世を歴て亂臣國家を覆すに至れり。夫れ周の衰へし時、七臣三子の王位を窺ふあり。王者國を棄てて出奔し、叛臣王城に據りしも、禍近畿に止りて遠く四方に及ばず、國家傾覆に至らざりしは、全く封建の効と謂はざるべからず。

- 【八七】 億兆。人民なり。
- 【八八】 曩時。周の時を指す。
- 【八九】 匡合。天下を一匡し、諸侯を九合すること。
- 【九〇】 遠績。諸侯の遠大の功績。

遠くは王莽が篡逆の事を惟ひ、近くは董卓が權を擅にするの際を覽るに、億兆心を悼ましめ愚智痛を同す。然れども周は之を以て存し、漢は之を以て亡ぶ。夫れ何の故ぞや。豈に世曩時の臣に乏しく、士匡合の志なからんや。蓋し遠績時の異なるに屈し、雄心卑勢に挫くるのみ。故に烈士扼腕して終

に寇讎の手に委し、中人節を變じて以て虐國の桀を助く。復た時に以て王室を謀るありと雖も、然れども上奥主にあらず下皆市人。師旅先づ定まれるの班なく、君臣相保つの志なし。是を以て義兵雲合するも劫弑の禍を救ふなく、民望未だ改まらざるに、已に大漢の滅ぶるを見たり。

【九二】 委。死なり。

【九三】 中人。中庸の人。晉書には忠人に作る。

【九四】 桀。暴逆の人。

【九五】 鳩合。鳩は集なり。

【九六】 奥主。深沈の君主。

【九七】 班。次序なり。

【九八】 牧守。地方長官なり。

【九九】 休明。美明なり。

【一〇〇】 長率連屬。諸侯をいふ、率は帥なり、禮記に千里の外方伯を設く、五國以て屬となし、屬に長あり、十國以て連となし、連に帥ありとあり。

【大意】王莽篡逆の時、董卓擅權の際を覽るに、天下の民皆心を痛ましめざるはなし。周は反逆に遇ふも猶ほ能く存し、漢は反逆に遇ひて忽ち亡びしは何ぞや。豈漢の時賢臣の周に比すべき者なきが爲ならんや。蓋し漢の時周と異りて天子を援くるの諸侯なし。雄壯の志あり王室を助けんと欲するも、位賤くして勢卑し。故に烈士も寇讎の手に死し、中才の士は節を變じて逆賊を助く。義兵を興して天子を助くるも、天子は凡庸の才にして人を知るの識なく、軍衆は所謂烏合にして秩序あるなし。是を以て遂に滅亡せるなり。或は以らく諸侯の位を世にする、必ずしも常に全からず。昏主暴君時ありて迹を比す。故に五等多く亂るる所以なり。今の牧守は皆以て方を官にし能を庸ふ。或は之を失すと雖も、其得ること固より多し。故に郡縣は以て治をなし易しと。夫れ徳の休明なる黜陟日に用ひ、長率

連屬威其職を述ぶ。而して淫昏の君は過を容るる所なし。何ぞ其の治まらざるに則らんや。故に先代之を以て興るあり。苟も或は 衰陵すれば百度自ら悻れ、官を鬻ぐの吏貨を以て才を准ずれば、則ち貪殘の萌皆羣后の如し。安にか其の亂れざるに在るや。故に後王之を以て廢するあり。且つ要して之を言ふに、五等の君は己の爲に治を思ひ、郡縣の長は利の爲に物を圖る。何を以てか之を徵する。蓋し (一〇二) 企及進取は (一〇三) 仕子の常志、己を脩め民を安んずるは良士の及ぶ希なる所なり。夫れ進取の情鋭くして安民の譽遅し。是の故に百姓を侵して以て己を利する者は (一〇四) 在位の憚らざる所、實事を損して以て名を養ふ者は官長の (一〇五) 夙夜する所なり。君は (一〇六) 卒歳の圖なく、臣は一時の志を挾む。五等は則ち然らず。國は己の土たり、衆は皆我が民なり、民安ければ己其利を受け、國傷るれば家其病に嬰るを知る。故に前人は以て後に垂れんと欲し、後嗣は其 (一〇七) 堂構を思ふ。上となりて苟且の心なく、羣下膠固の義を知る。其をして竝に賢にして治に居らしめば、則ち功に厚薄あり。兩ながら愚にして亂に處らしめば、則ち過深淺あり。然らば則ち (一〇八) 八代の制を探るに、幾んど一理を以て貫くべし。秦漢の典、殆んど一言を以て蔽ふべし。

- 【一〇二】 衰陵。衰微陵夷なり。
- 【一〇三】 企及進取。名利に奔競する。
- 【一〇四】 仕子。仕官する者。
- 【一〇五】 夙夜。晝夜勉むること。
- 【一〇六】 卒歳。一年を終ること。
- 【一〇七】 堂構。父祖の遺業。
- 【一〇八】 八代。五帝三王。

【大意】 世或は曰く、諸侯其國を世襲すれば、常に安全なるを得ず。時に暗君の踵を接して出づるあり。故に封建の制は多く亂に及ぶ。郡縣の制は則ち然らず。必ず才能を選んで官に任ず。時に或は其選を誤ることなきにあらざれども、選の宜しきを得る場合多し。故に多くは治績を擧ぐと。此言誤れり。夫れ天子休明の徳あり日に能否を黜陟すれば、諸侯其事を慎み之を天子に述ぶ。淫昏の諸侯あれば天子其過を宥さず。故に先代帝王封建を以て興りし者あり。天子若し衰微すれば百度自ら亂れ、官を鬻ぐ者財貨の多少に准じて官を授くるに高下あり。故に貪殘富盛の者は其威諸侯の如し。郡縣の制と雖も何ぞ亂れざらんや。故に後世の帝王此制を以て滅亡を取りし者あり。要するに封建の君は己の爲に治を思ひ、郡縣の長は利の爲に人を治むるなり。夫れ名利に奔競するは官吏の習なり。故に實績を顧みずして専ら虚譽を求め、長久の計を棄てて時好に投せんことを務む。諸侯は則ち然らず。國土人民は我が有なり。故に治安なれば己其利を受け、危亡すれば己其害を被る。又前人は子孫の慶を思ひ、子孫は前人の餘澤を被る。故に上の者苟且の心なく、下の者堅く上に結ぶ。是を以て若し諸侯と牧守とをして、竝に賢にして治世に居らしめば、諸侯は必ず長久にして功多く、牧守は數々易りて功少からん。若し又共に愚にして亂世に居らしめば、諸侯は必ず累世恵を施して過淺く、牧守は人を侵して己を利し、其過必ず深からん。是れ五帝三王の封建の制を立てし所以なり。秦漢の此制を取

らざるは、其過一言にして斷ずべし。

辨命論 竝序

劉孝標

主上嘗て諸名賢と言。管輅に及び、其の奇才ありて位達せざるを歎ず。時に赤墀の下に在りて斯議を豫り聞くものあり。歸りて以て余に告ぐ。余謂へらく士の窮通は命にあらざるなしと。故に謹んで天旨を述べ、因つて其致を言ふと云爾。

臣管輅を觀るに天才英偉、珪璋特秀。實に海内の名傑なり。豈に日者卜祝の流ならんや。而るに位少府丞に止まり、年四十八に終る。天の報施する何ぞ其の寡きや。然らば則ち高才にして貴仕なきと、饗養にして高位に居るとは、古より歎する所なり。獨り公明のみならんや。故に性命の道、窮通の數、天闕紛綸として其辨を知るなし。

- 【一】辨命論。人の死生窮達必ず命あるを論ず。
- 【二】主上。梁の武帝。
- 【三】管輅。字は公明、魏の平原の人、弟辰輅に謂つて曰く、大將軍君を待つこと厚し、冀くは富貴ならんかと、輅長歎して曰く、天我に才明を與へ年壽を與へず、恐らくは四十七八の間女嫁し男娶るを見ずして死せんと、官少府丞に至りて卒す、年四十八。
- 【四】赤墀。天子の殿階の地は丹を以て塗る、之を赤墀又は丹墀といふ。
- 【五】天旨。天子の意。
- 【六】珪璋。玉器の貴重なるもの、人品の高きに喩ふ。
- 【七】日者。時日を占候し吉凶を判断する人、卜祝、卜筮者及び巫祝なり。管輅は天文易占の術に明なり。
- 【八】饗養。食慾甚しきこと。
- 【九】天闕。壅ぎ止むること。紛綸。亂ること。
- 【一〇】其辨。辨は別なり。

仲任は其源を蔽ぎ、子長は其惑を闡き、鶡冠、饗膺必ず以て天に懸りて期あり、鼎貴高門則ち曰く唯人の召く所のままなりとするに至る。講議謹昨し異端斯に起る。蕭遠は其本を論じて其流を暢べす。子玄は其流を語りて、未だ其本を詳にせず。

- 【一】仲任。漢の王充の字。其著論衡に、貧賤富貴壽夭の皆命なるをいへり。
- 【二】子長。漢の司馬遷の字。
- 【三】鶡冠。貧賤の冠なり。饗膺。貧賤の居なり。
- 【四】鼎貴高門。富貴をいふ。
- 【五】講議謹昨。言語喧繁なること。
- 【六】蕭遠。李蕭遠運命論を作り、治亂の天に在るを言ふ。
- 【七】子玄。郭子玄命を致すは己に由るの論を作る。
- 【八】陶鑄。道の萬物を作ること。
- 【九】亭毒。均しく養ふこと、老子の語なり。
- 【一〇】虔劉。殺すこと。

命にして人力にあらすとなす者あり。或は人力にして天命にあらすとなす者あり。其論一ならず。嘗試に之を言はん。曰く夫れ道萬物を生ず。則ち之を道と謂ふ。生じて主なし。之を自然といふ。自然なる者は物其の然るを見て然る所以を知らず。同焉として皆得て得る所以を知らず。鼓動陶鑄するも功となさず。庶類混成するも其力にあらす。之を生ずれども亭毒の心なく、之を死せしむるも豈虔劉

の志ならんや。之を淵泉に墜せども其怒にあら
ず。之を(三)霄漢に升すも其悦にあらす。(三)蕩乎
たり大乎たり、(三)萬寶之を以て化す。確乎たり純
乎たり、一たび作して易へず。化して易らざる、
之を命と謂ふ。命なる者は天よりするの命なり。
(三)冥兆に定りて終然變せず。鬼神も能く預るな
く、聖哲も謀る能はず。(三)山に觸るるの力も以て
抗するなく、(三)日を倒にするの誠も感ずる能は
ず。短ければ則ち之を寸陰に緩うすべからず。長け
れば則ち之を(三)箭漏に急にすべからず。至徳も未
だ踰ゆる能はず。上智も免れざる所なり。是を以て
(三)放助の世にも浩浩として(三)陵に襄り、(三)天乙の
時にも金を焦し石を流し、(三)文公其尾に寔き、(三)
宣尼其糧を絶ち、顔回其(三)叢蘭を敗り、(三)冉耕其

【一】 霄漢。天空なり。
【二】 蕩乎。廣大の貌。
【三】 萬寶。萬物なり。
【四】 冥兆。冥味の始。
【五】 山に觸る。昔共工氏不周
山に觸れしに、天維絶え地柱
折る。
【六】 日を倒にす。魯陽公戈を
以て日を麾く。日之が爲に退
くこと三舍。
【七】 箭漏。箭は水中に竹箬を
置き、水漏れて刻に至れば、
以て其數を知るべきものな
り。
【八】 放助。堯なり、堯の時洪
水九年なり、書經に、蕩蕩と
して山を懷み陵に襄り、浩浩
として天に滔るとあり。
【九】 天乙。殷の湯王、湯の時
大旱七年。

【一〇】 文公。周公且諡して文と
いふ、詩經幽風狼跋篇の序に、
狼跋は周公を美するなりとあ
り、中に狼其胡を跋み、載ち
其尾に寔くとあり、周公の進
退兩難あるをいふ。
【一】 宣尼。孔子なり、孔子陳
に在りて糧を絶つ。
【三】 叢蘭。年壽に喩ふ、文子
に、日月明ならんと欲すれば
浮雲之を蓋ひ、叢蘭茂らんと
欲すれば、秋風之を取ると
あり、顔回の天死せるをい
ふ。
【三】 冉耕。字は伯牛、孔子の
弟子にして惡疾あり。耒首。
詩經の篇の名、韓詩に耒首は
夫惡疾あるを傷むなりとあ
り。

耒首を歌ひ、(三)夷叔淑媛の言に斃れ、(三)子輿臧倉の訴に困めらる。聖賢すら且つ猶ほ此の若し。而も況
んや庸庸たる者をや。

【大意】 臣試に之を論せん。夫れ道萬物を生じ、道は自然に則る。意ありて萬物を作るにあらず。
又意ありて萬物を殺すにあらず。其の生殺皆自
然なり。自然にして改易すべからざる、之を天
命といふ。天命は冥味の始に定まり、鬼神怪力
も之を改むる能はず。壽命短き者は寸陰も之を
延ぶる能はず。長き者は分秒も之を短くすべか
らず。要するに人力の如何ともすべからざる所
なり。故に堯の盛徳にして九年の水あり。湯の
盛徳にして七年の旱あり。周公も進退に艱み、
孔子も糧を絶ち、顔回も天死し、伯牛も惡疾あり、
命には抗すべからず。況んや凡人に於てをや。

【一】 夷叔。伯夷叔齊なり。淑
媛。婦人なり。伯夷叔齊首陽山
に隠れ薇を採りて之を食ふ、
野に婦人あり、曰く子は義と
して周の粟を食はず、薇亦周
の草木なりと、是に於て餓死
す。
【二】 子輿。孟子なり、魯の平
公將に行きて孟子を見んと
す、嬖人臧倉之を沮む。
【三】 伍員。伍子胥也、吳王子胥
の屍を取り之を江中に投ず。
【四】 三閭。屈原なり、忠諫を
以て楚王に仕へ、讒に遇ひて
憂憤し、湘水に投じて死す。
【五】 賈大夫。賈誼漢に仕へ、逐
はれて長沙王の太傅となる。
【六】 馮都尉。馮唐なり、漢の
文帝に仕へて郎となり、白髮
に至るまで陞進するを得ず。

乃ち(三)伍員屍を江流に浮べ、(三)三閭骸を湘渚に沈め、(三)賈大夫志を長沙に沮ひ、(三)馮都尉髮を郎署

に皓くし、君山鴻漸して羽儀を高雲に鍛がれ、敬通鳳起して迅翮を風穴に摧かるるに至りては、此れ豈才足らずして行遺あればならんや。近世沛國の劉瓛あり。瓛の弟璉。竝に一時の秀士なり。瓛は則ち關西の孔子なり。六經に通涉し、循循として善く誘ひ儒行を服膺す。璉は則ち志秋霜より烈に心、崑玉より貞なり。必ず亭亭として高竦し、風塵に雜らず。皆徳を衡門に毓ひ、竝に聲を天地に馳す。而も官侍郎より微なるあり、位執戟に登らず。相次いで殞落し、宗祀饗くるなし。斯兩賢に因りて以て古則を言へば、昔の玉質金相、英髦秀達、皆當年に擯斥せられ奇才を韞んで用ふるなく、草木を候ちて以て共に彫み、糜鹿と與にして同じく死し、膏平原に塗れ骨川谷を填め、堙滅して聞ゆるなき者、豈勝げて道ふべけんや。此れ則ち宰衡と卓犖と、容彭と殤子と、猗頓と黔婁と、陽文と敦治と、咸之を

- 【四一】 君山。後漢の桓譚、字は君山、光武帝に即き議郎に任ず、詔して雲臺に會議せず、旨に逆ひて放たる。鴻漸。鴻の進むが如く陸進すること。羽儀。羽翼なり。
- 【四二】 敬通。後漢の馮衍、字は敬通、明帝抑へて用ひず。
- 【四三】 近世。齊朝なり。沛國。地名。
- 【四四】 崑玉。崑山に産する美玉。貞。堅なり。
- 【四五】 高竦。高く聳ゆること。風塵。俗塵なり。
- 【四六】 衡門。木を横へて門となす、貧賤の居なり。
- 【四七】 殞落。死すること。
- 【四八】 宗祀。子孫の絶えたるをいふ。
- 【四九】 玉質金相。資質のすぐれたること。
- 【五〇】 英髦。俊傑なり。
- 【五一】 宰衡。宰相なり。卓犖。奴僕なり。
- 【五二】 容彭。容成公及び彭祖、共に古の長壽者。殤子。天死者。
- 【五三】 猗頓。古の富者。黔婁。古の貧者。
- 【五四】 陽文。美女。敦治。醜女。

自然に得て、道を才智に假らず。故に曰く、(一) 死生命あり富貴天に在りと、斯の謂なり。【大意】 伍子胥、屈原、賈誼、馮唐等の榮達せずして死せるは、才足らず、行宜しからざるにあらず。皆天命なり。齊の劉瓛、劉璉、學徳一世に高きも、亦皆衡門の下に窮死せり。此を以て之を觀れば、古の賢人沈滅して今に聞えざる者、其の幾人なるを知るべからず。されば人の貴賤壽夭貧富美醜は皆之を自然に得るなり。才智に由りて然るにあらざるなり。子夏曰く、死生命あり富貴天に在りと。眞に然り。然れども命體周流し變化一にあらず。或は先づ號きて後に笑ひ、或は始め吉にして終は凶、或は召さずして自ら來り、或は人に因りて以て濟り、交錯糾紛、廻還倚伏、一理を以て徵すべきにあらず、一途を以て驗すべきにあらず。而も其道密微にして寂寥。忽恍たり。形の以て見るべきなく、聲の以て聞くべきなし。必ず物を御して以て靈を效し、亦人に憑りて象を成す。天王の冕旒、百官に任ずるに司職を以てするに譬ふ。而して或者は、湯武の龍躍せるを觀て謂へらく、(二) 龜亂神功に在りと。(三) 孔墨の挺生せるを聞きて謂へらく、(四) 英睿(五) 奇響を撞にすと。(六) 彭韓の豹變

- 【一】 死生命云云。子夏の語、論語に出づ。
- 【二】 忽恍。不明の貌。
- 【三】 御。乗すといふが如し。
- 【四】 冕旒。天子の冠。
- 【五】 湯武。殷の湯王、周の武王。龍躍。天子の位に升ること。
- 【六】 龜亂。龜一に載に作る、亂に克つこと。
- 【七】 孔墨。孔子、墨翟。
- 【八】 奇響。美譽なり。
- 【九】 彭韓。彭越、韓信なり。
- 【一〇】 豹變。一躍して諸侯となりしをいふ。

せるを視て謂へらく、(畜) 驚猛人爵を致すと。張桓の朱紱せるを見て謂へらく、(天) 明經青紫を拾ふと。豈に(毛) 有力者之を運らして趨らしむるを知らんや。故に言うて命にあらすとするもの六蔽あるのみ。請ふ其梗槩を陳べん。

【大意】 然れども天命の體たる、周流變化一ならず。或は先づ泣きて後笑ひ、或は始め吉にして後凶、或は招かずして自ら來り、或は他人に因りて成る。一理を以て斷ずべからず。形聲の見聞すべきなし。其理は天に係ると雖も、其の來るや必ず人に憑り物に乗ず。譬へば天子冕旒して柄を兼り、必ず百官職司を分ちて政を爲すが如し。然るに命を知らざる者は、湯武を見ては大功に因りて天子となるとなし、孔子、墨翟を見ては英明を以て名を成すとなし、彭越、韓信を見ては武勇を以て諸侯となるとなし、張禹、桓榮を見ては、明經を以て貴仕に登るとなし。何ぞ天命の運轉する所なるを知らんや。其の命を知らざる凡そ六蔽あり。今其大略を言はん。

- 【六】 驚猛。勇猛なり。
- 【六五】 張桓。前漢の張禹、後漢の桓榮、共に博學を以て貴仕に登る。朱紱。朱紱なり。
- 【六六】 明經。經術に明なると。青紫。貴服なり。
- 【六七】 有力者。即ち天命なり。
- 【六八】 靡顏。美顔なり。賦理。肌膚の滑なること。
- 【六九】 哆嚙。口を張りて正しからざるなり。顛頰。鼻莖を縮むること。
- 【七〇】 朝秀晨終。日未だ出でざる時秀で、日出づるに至れば枯るる花。
- 【七一】 言を開けば直に理解すること。
- 【七二】 菽麥。菽は豆なり、菽と麥とを辨ぜざるは愚なり。
- 【七三】 辨。別なり。

なり。同じく(畜) 三者の造化に定まるを知らば、榮辱の境獨り人に由ると曰はんや。是れ二五を知りて未

だ十を識らざるなり。其蔽一なり。(毛) 龍犀日角は帝王の(毛) 表なり。(毛) 河目龜文は公侯の相なり。(毛) 鏡を撫りて其の將に刑せられんとするを知り、紐を壓して其の(毛) 録に膺れるを顯し、(毛) 星虹樞電聖徳の符を(毛) 昭にし、(毛) 夜哭聚雲興王の瑞(毛) 帝道に升ると謂はば、則ち未だ(毛) 宵冥の情に達せず、未だ神明の數を測らざるなり。其蔽二なり。

- 【四】 三者。上の形異、年殊、神辨なり。
- 【五】 龍犀日角。額龍犀の如く突起して日形をなす。
- 【六】 表。相貌なり。
- 【七】 河目。目の上下正平なるをいふ。龜文。足に龜文あるなり。
- 【八】 蜀志に、張裕相術を曉る、鏡を擧げて面を視る毎に自ら刑死せんことを知るとあり。
- 【九】 録に膺る。嫡嗣と定まること、左傳昭公十三年に、楚の共王冢適なし、龍子五人なり、適として立つるなし、

乃ち神に祈りて曰く、請ふ神五人を擇び社稷に主たらしめよ、壁に當りて拜する者は神の立つる所なり、誰か敢て之に違はんと、既にして巴姬と密に壁を宗廟の庭に埋め、五人をして入りて拜せしむ、康王は之に跨り、靈王は肘加はり、子干子皙は皆之に遠ざかり、平王弱し、抱かれて入り再拜して皆紐を壓すとあり、紐は壁の紐なり、壓紐とは壁に當るをいふ。

- 【一〇】 星虹。大星虹の如く下りて華渚に流れ少昊を生む。樞電。舜の母北斗の樞星に感じ
- 【一一】 夜哭。漢の高祖徒を驪山に送る、大澤の蛇を斬る、老嫗あり夜哭して曰く、吾が子は白帝の子なり、赤帝の子に殺さると、赤帝の子とは高祖なり、白帝の子は秦なり。聚雲。漢の高祖芒碭山に隱る、嘗て聚雲の氣あり。
- 【一二】 兆。跡なり。
- 【一三】 渙汗。流布の貌。
- 【一四】 貔虎。勇士なり。
- 【一五】 紫微。天子の宮殿。
- 【一六】 帝道。帝位なり。
- 【一七】 宵冥。運命の理なり。

を鬱にす。皆(毛) 兆前期に發れ、後葉に(毛) 渙汗たり。若し(毛) 貔虎を驅り尺劍を奮ひ、(毛) 紫微に入り(毛) 帝道に升ると謂はば、則ち未だ(毛) 宵冥の情に達せず、未だ神明の數を測らざるなり。其蔽二なり。

空桑の里變じて洪川と成り、(八八) 歷陽の都化して魚鼈となり、(八九) 楚師漢卒を屠りて睢河其流を鯁へ、秦人趙士を坑にして、沸聲雷震の若く、火(九〇) 崑岳に炎れば礫石と琬琰と俱に焚け、嚴霜夜零つれば(九一) 蕭艾と(九二) 芝蘭と共に盡く。(九三) 游夏の英才、(九四) 伊顔の殆んど庶きと雖も、焉んぞ能く之に抗せんや。其蔽三なり。

【大意】 夫れ人の顔貌に美醜の異あり、年齢に壽夭の異あり。才に智愚の異あり。此三者は天命に由りて定まれり。されば人の榮辱何ぞ獨り天命にあらずと謂ふを得んや。此理を解せざる者は、二五の十となるを解せざらんや。

【八八】 空桑。呂氏春秋に、有莘氏の女子桑を採り、嬰兒を空桑の中に得、之を其君に獻す、焮人をして之を養はしむ、其の然る所以を察す、曰く其母伊水の上に居り孕む、夢に神あり、之に告げて曰く、白水を出さば東に走れと、母明日白の水より出づるを見、其鄰に告げ東に走ること十里にして其邑を顧れば、盡く水となり、身因つて化して空桑となる、故に之を命じて伊尹といふとあり。

【八九】 歷陽。淮南子に、歷陽は淮南の縣名なり、歷陽に老嫗あり、常に仁義を行ふ、兩書生あり之に過りて謂つて曰く、此國當に没して湖となるべし、嫗東城門に血あるを見れば乃ち走りて山に上り反顧する勿れと、此れより嫗數々往いて門を視る、門吏之に問ふ、嫗對ふること其言の如くす、東門の吏雞を殺し血を以て其門に塗る、明日嫗早く往いて門を視るに血あり、乃ち走りて山に上る、國没して湖となるとあり。

【九〇】 楚師。項羽の軍、漢書に、項羽漢を撃つて大いに彭城に戦ひ、多く士卒を殺す、睢水爲に流れずとあり。

【九一】 崑岳。書經に、火崑岡に炎ゆれば玉石俱に焚くとあり。

【九二】 蕭艾。醜草なり。

【九三】 芝蘭。香草なり。

【九四】 游夏。孔子の弟子、子游子夏。

【九五】 伊顔。伊尹、顔回なり、易經に、顔氏の子其れ殆んど庶幾きかとあり、玉珩の註に、幾を知るに近きなりとあり。

る者なり。又人の帝王となり、公侯となる者は、れる者あり、紐を壓して嫡嗣の運に膺れるを知る者あり、祥瑞によりて興王たるを知る者あり。是れ皆天命始めより定まり、後に至りて實現するものなればなり。勇士を驅り刀劍を振つて、以て帝位を取るとなす者は、天命の理を解せざる者なり。城池の變遷、戦争の勝敗、草木の榮落、金石の存没、亦皆天命に由る。此理は子夏、子游、顔回の如き機を知るの人と雖も、固より抗禦する能はざるなり。

【九六】 此語、淮南子に出づ。

【九七】 亭伯。後漢の崔駰、字は亭伯、竇憲辟して掾となす、駰を高第に察し、長岑の長となす、駰其の遠きを以て官に至らず、家に歸りて卒す。

【九八】 相如。漢の司馬相如、孝文園の令となり、既にして病んで免ぜられ、茂陵に家居して死す。

【九九】 結緑。美玉の名。鴻輝。盛なる光。

【一〇〇】 懸黎。美玉の名。夜色。夜も明に光ること。

【一〇一】 楚辭に、尺も短き所あり、寸も長き所ありとあり。

【一〇二】 主父偃。漢書に、主父偃は齊の臨淄の人なり、長短縱横の術を學び、北のかた燕趙中山に遊び甚だ困む、乃ち書を闕下に上り、拜して郎となり、中大夫に至る、偃曰く、大丈夫生きて五鼎に食はずんば死して五鼎に烹られんのみとあり。

【一〇三】 公孫弘。漢書に、公孫弘は淄川の人なり、家貧にして豕を海上に牧す、天子弘の對を擢んで第一となす、後丞相となり、東閣を開いて賢士を延くとあり。

或は曰く、(九六) 明月の球も類なき能はず。夏后の璜も考なき能はず。故に(九七) 亭伯は縣長に死し、(九八) 相如は園令に卒す。才傑ならざるにあらざるなり、(九九) 主明ならざるにあらざるなり。而も(一〇〇) 結緑の鴻輝を碎き、(一〇一) 懸黎の夜色を殘へり。抑(一〇二) 尺の量短きあればか。若し然らば(一〇三) 主父偃、(一〇四) 公孫弘、

對策するも第に升らず、歴説するも入らず、豕を淄原に牧し、州部に棄てられ、設令忽たること隙を過ぐるが如く、霜露に 濫死せば、其の詭恥たる豈に 崔馬の流ならんや。東閣を開き五鼎を列し、電照風行し、聲海外に馳するに至るに及んでは、寧んぞ前に愚にして、後に 智に、先に非にして終に是ならんや。將た榮粹定數あり、天命至極あり、而も謬りて 妍蚩を生ずるか。其蔽四なり。

【大意】 或は曰く、始め盛運なるも後届して伸びざる者あり。彼の崔駟、司馬相如の晩年振はざるが如きは是れなり。されば盛運も終を全うせざる事あるにあらずや。主父偃、公孫弘の如きは、始め貧窮なりしも、後貴仕に登りて聲名を海外に馳せたり。是れ始め衰運にして後一轉して盛運に向へり。されば、天命に定數ありと雖も、時に誤りて此の美醜を生ずるか。此言誤れり。

夫れ虎嘯いて風馳せ、龍興りて雲屬る。故に 重華立ちて 元凱升り、辛受生れて 飛廉進む。然らば則ち天下善人は少く惡人は多く、闇主は衆く明君は寡し。而して 薰蕕器を同うせず、 梟鸞翼を接せず。是れ 渾敦、檇杌をして武を

- 【一四】 濫死。忽ち死すること。
- 【一五】 崔馬。崔駟、司馬相如。
- 【一六】 妍蚩。美醜なり。
- 【一七】 重華。舜なり。
- 【一八】 元凱。舜才子八元八凱十六人を擧ぐ。
- 【一九】 辛受。殷の紂王。
- 【二〇】 飛廉。材力を以て紂に事ふ。
- 【二一】 薰蕕。蕕は香草、蕕は臭草。
- 【二二】 梟鸞。梟は惡鳥、鸞は神鳥。
- 【二三】 渾敦、檇杌。不才の人名、左傳に出づ。

【二四】 雲臺の上に踵ぎ、 仲容、庭堅をして巖石の下に耕耘せしむ。横に廢興我に在り、天に繫るなしと謂ふ。其蔽五なり。彼の 戎狄なる者は人面獸心にして、 鳩毒を宴安し、誅殺を以て道德となし、 蒸報を以て仁義となし、 大風青丘に立ち、 鑿齒華野に奮ふと雖も、 狼戾を比するに、曾ち何ぞ喩ふるに足らん。 金行競はず 天地 版蕩せしより、 左帶沸脣間に乗じて電發し、遂に 濃洛を覆し五都を傾け、 先王の 桑梓に居り、名號を 中縣に竊み、三皇と其 氓黎を競ひ、五帝と其區宇を角し、 種落繁熾して神州に 充切す。嗚呼善に福し淫に禍すとは、徒に虚言のみ。豈に否泰相傾け盈縮 遞に運り、而して之を汨すに人を以てするにあらずやと。其蔽六なり。

【大意】 すべて物は類を以て集る。故に明君あれば賢相出で、暗君あれば邪臣出づ。然れども世に善人少くして惡人多し。故に邪臣用ひられて賢臣遠ざげらる。然るに治亂興廢は己に在り、天命にあらず

- 【二四】 雲臺。臺閣なり。
- 【二五】 仲容。八元の二なり、賢人なり。
- 【二六】 戎狄。魏を指して言ふ。
- 【二七】 鳩毒。害毒なり。宴安。安んずること。
- 【二八】 蒸報。上淫を蒸といひ、下淫を報といふ。
- 【二九】 大風。淮南子に、堯の時、大風鑿齒皆害をなす、堯乃ちち羿をして鑿齒を疇華の野に誅し、大風を青丘の野に繳せしむとあり。
- 【三〇】 狼戾。暴虐なり。
- 【三一】 金行。金は晉の行なり。
- 【三二】 版蕩。亂ること。
- 【三三】 左帶。左任に同じ、夷狄の服なり。沸脣。夷狄の語なり、劉聰の徒をいふ。
- 【三四】 濃洛。洛陽なり。
- 【三五】 桑梓。故郷なり。
- 【三六】 中縣。中國なり。
- 【三七】 氓黎。衆民なり。
- 【三八】 種落。種族部落。
- 【三九】 充切。充滿なり。

ずといふは誤れり。彼の魏は夷狄なり。誅殺を以て道德となし、淫亂を以て仁義となし、暴虐比なし。晉其後を承くるや劉聰等之を侵伐し、遂に之を覆して天子の位に即けり。古人曰く、善をなせば天之福に福し、亂をなせば天之禍すと。此れ虚言なり。人力を以て相傾くるのみと。此言亦誤れり。

然らば所謂命なる者は、死生、貴賤、貧富、治亂、禍福、此十者は天の賦する所なり。愚智善惡、此四者は人の行ふ所なり。夫れ神舜禹にあらず、心宋均に異に、才中庸に結まるは習ふ所に在り。是を以て 素絲愼なく玄黄代々起り、鮑魚芳蘭入りて自ら變ず。故に 季路仲尼に學んで風霜の節を厲き、楚穆潘崇に謀りて弑逆の禍を成す。而して 商臣の惡も盛業後嗣に光り、仲由の善も其 結纓を思むる能はず。斯れ則ち邪正は人に由り、吉凶は命に在るなり。

【大意】 人の死生貴賤、貧富、治亂、禍福の十者は、是れ天命なり。愚智善惡の四者は人力なり。習ふ所の如何に由るなり。子路の孔子に學んで賢士となり、楚の穆王の潘崇に謀りて弑逆を行ひしは、是れ

【一】朱均。堯の子丹朱、舜の子商均、皆愚暗なり。
【二】素絲。白絲なり、淮南子に、墨子練絲を見て泣く、其の以て黄にすべく以て黒にすべきを以てなりとあり。
【三】鮑魚。腐りし魚、大戴禮に、君子と遊べば蘭芷の室に入るが如く久うして其芳を聞かず、之と化すればなり、小

習の致す所にして、所謂人力なり。穆王弑逆をなせるも其業子孫に傳はり、子路の善なるも戰死を免れざりしは、是れ所謂天命なり。故に邪正は人事にして吉凶は天命なり。或は以らく鬼神は盈を害し皇天は徳を輔く。故に宋公一言して 法星三徙し、殷帝自ら翦りて千里雲を來す。若し善惡をして徴なからしめば、未だ斯義に洽はず。且つ 于公門を高くして以て封を待ち、嚴母墓を掃ひて以て喪を望む。此れ君子の自ら疆めて息まざる所以なり。如し仁をして報なからしめば、奚爲れぞ善を脩め名を立てんやと。斯れ 徑廷の辭なり。夫れ聖人の言は顯にして晦、微にして婉なり。幽遠にして聞き難く、河漢にして測られず。或は教を立てて以て

【一六】法星。熒惑星をいふ、呂氏春秋に、宋の景公疾あり、朝臣曰く、熒惑心を守る、心は宋の分野なり、君當に禍を相に移すべしと、公曰く相は股肱なり、心腹の疾を除きて股肱に置く、可ならんやと、曰く民に移すべしと、公曰く、國民なれば何を以て君となさんと、曰く彗に移すべしと、公曰く歳は民を養ふ所以なり、歳登らずんば何を以て民を畜はんと、是の時熒惑退くこと三舍なりとあり。
【一七】殷帝。淮南子に、湯の時早すること七年、湯髪を翦り手を磨き、自ら以て犠となり、雨を祈る、四海の雲集り千里の雨至るとあり。
【一八】于公。漢書に、于定國の父子公、其門壞れ父老之を修むる時、謂つて曰く、門を高大にし駟馬高蓋の車を容るべからしめよ、我れ獄を治め陰徳多し、子孫必ず興る者あらんと、果して定國丞相となり侯に封ぜらるとあり。
【一九】嚴母。漢書に、嚴延年河南太守に遷る、其母東海より來り、適囚を報するを見て驚いて曰く、天道は神明なり、人獨り殺すべからず、我當に壯子の刑戮せらるるを見るべし、行きて東海に去り、墓地を掃除せんのみと、後歲餘にして果して敗すとあり。
【二〇】徑廷。懸隔なり。
【二一】河漢。二川の名、其の廣くして限なきこと。

庸怠を進め、或は命を言うて以て性靈を窮む。積善の餘慶は教を立つるなり。鳳鳥至らずとは命を言ふなり。今片言を以て其要趣を辯ず。何ぞ且つ荆昭の德音丹雲卷かす。周宣雨を祈り瑋壁斯に馨く。干叟徳を種つること助華の高きに逮ばず。延年の殘獮未だ東陵の酷暴より甚しからず。善を爲すこと一に惡を爲すこと均くして、禍福其流を異にし、廢興其跡を殊にす。蕩蕩たる上帝豈に是の如くならんや。

【大意】或は曰く、鬼神は滿つるを虧き徳あるを輔く。故に宋公高德の言能く星を徙し、殷湯髪を翦りて雨を祈れば、千里忽ち雨降る。鬼神の徳を輔くこと以て見るべし。且つ于公は高門を作りて子孫の封侯たるを待ち、嚴延年の母は其子の刑死すべきを知りて墓を掃ひて待たり。善惡の徴ある亦明なり。是を以て君子は自ら強めて徳を修む。若し仁を爲すも報いられずんば、誰か復

【四】積善。易經に、積善の家には餘慶ありとあり。
【四五】鳳鳥。論語に、孔子曰く、鳳鳥至らず、河圖を出さず、吾巳んぬるかたとあり。
【四六】荆昭。楚の昭王、左傳に、雲あり衆赤鳥の如し、日を夾んで飛ぶこと三日、楚王使をして周の太史に問はしむ、太史曰く、其れ王の身に當らんか、若し之を祭せば令尹司馬

【四七】片言。一言なり。
【四八】夕死の類。朝に生れて夕に死する蜉蝣なり。
【四九】荆昭。楚の昭王、左傳に、雲あり衆赤鳥の如し、日を夾んで飛ぶこと三日、楚王使をして周の太史に問はしむ、太史曰く、其れ王の身に當らんか、若し之を祭せば令尹司馬

【五〇】助華。堯は放勳と號し、舜は重華と號す。
【五一】殘獮。殘害なり。
【五二】東陵。莊子に、盜跖に東陵の上に死すとあり。
【五三】蕩蕩。寬廣の貌。

た善を爲し名を立てんやと。此言大に誤れり。夫れ聖人の言は顯晦婉微にして測り難し。或は教を立てて懶惰の人を勵まし、或は天命を説きて妙理を窮む。易に積善の家に餘慶ありと言ふが如きは、是れ教を立つるなり。孔子の鳳鳥至らずと嘆せし如きは、是れ天命を言へるなり。今一言を以て天命の要趣を辨せんとするは、所謂蜉蝣の春秋寒暑の變を論ずると同じ。且つ楚の昭王の徳言は宋公に譲らず。然も赤雲卷き收まらず。宣王の雨を祈るは殷湯に同じ。然も壁を盡して神に祈れども雨降らず。于公の徳は堯舜に及ばず。然も于公は賢子を得、堯舜は愚子を得たり。嚴延年の殘虐は盜跖より甚しからず。然も盜跖は壽を以て終り、延年は刑殺せらる。善惡同じくして禍福の異なること斯の如し。天豈に此の不公平をなさんや。詩に云く、風雨晦さが如きも、雞鳴已ますと。故に善人の善をなす、焉んぞ息むあらんや。夫れ稻梁を食ひ、芻豢を進め、狐貉を衣、氷紉を襲ね、窈眇の奇舞を觀、雲和の琴瑟を聴くは、此れ小人の急なる所なり。求むるありて爲すにあらざるなり。道徳を修め仁義を習ひ、孝悌を敦うし忠貞を立て、禮樂の腴潤に漸み、先王の盛則を蹈むは、此れ君子の急なる所なり。求むるありて爲すにあらざるなり。然らば則ち君子は正に居り道を體し、天を樂み命を知り、其の

【四四】風雨云云。詩經鄭風なり、風雨晦冥と雖も雞鳴いて改めず、君子亂世に居るも其節を改めざるに喩ふ。
【四五】稻梁。米のよきもの。
【四六】芻豢。肉なり。
【四七】狐貉。裘なり。
【四八】氷紉。白絹なり。
【四九】雲和。琴瑟の産する所。

奈何ともすべきなきを明にし、其の智力に由らざるを識る。逝けども召さず、來れども距がず。生くれども喜ばず、死すれども感へず。瑤臺(二五)夏屋も其神を悦ばす能はず。土室(二六)編蓬も未だ其慮を憂へしむるに足らず。富貴に充訓せず、欲する所に(二七)違違たらず。豈に(二八)史公、(二九)董相が不遇の文あらんや。

【大意】詩經に君子は亂世に居るも其節を改めず。猶ほ風雨晦冥なるも雞の鳴いて息まざるが如しといへり。夫れ聲色の樂は小人の爲す所なるも、求むる所ありて爲すにあらす。道德仁義は君子の爲す所なるも、亦求むる所ありて然るにあらす。君子は天命を知る。故に榮枯得喪を以て喜憂をなさざるなり。

【二五】夏屋。大屋なり。
【二六】編蓬。蓬を編みて戸となす。
【二七】違違。離離なり。
【二八】史公。太史公司馬遷。其集に悲不遇賦あり。
【二九】董相。江都の相董仲舒。其集に士不遇賦あり。

卷の第二十八

論三

廣絶交論

劉孝標

客主人に問うて曰く、

朱公叔が絶交論、是

となすか非となすか

と。主人曰く、客奚ぞ

此を之れ問ふと。客曰

く、夫れ草蟲鳴けば則

ち、(一)阜螽躍り、(二)雕虎嘯いて清風起る。故に(三)網緝相感じて霧涌き雲蒸し、(四)嚶鳴相召して星流れ電

激す。是を以て(五)王陽登れば則ち貢公喜び、(六)罕生逝いて國子悲む。且つ心琴瑟に同じければ、言

【一】廣絶交論。孝標任昉の諸子西華兄弟等流離して自ら振ふ能はず、生平の舊交收恤する者なきを見、乃朱公叔の絶交論を廣めて此篇を作る。
【二】朱公叔。朱穆、字は公叔、後漢の人、時の澹薄に感じ絶交論を著す。

【三】阜螽。ばつた、詩經鄭箋に、草蟲鳴けば則ち阜螽跳躍して之に従ふとあり。
【四】雕虎。虎の文鏤刻せるが如きなり、淮南子に、虎嘯いて谷風至るとあり。
【五】網緝。天地の氣相交るなり。

【六】嚶鳴。鳥の鳴くこと。
【七】王陽。漢の人、王陽朝に登れば、友人貢禹之を聞いて喜ぶ、己も亦舉げられんことを知ればなり。
【八】罕生。子皮なり。國子。子産なり、左傳に、子産子皮の卒するを聞きて哭すとあり。

蘭菫（九）よりも鬱郁（一〇）たり。道（一一）膠漆（一二）に叶へば志（一三）墳簾（一四）よりも婉孌（一五）たり。聖賢（一六）此を以て金版（一七）に鏤めて盤盂（一八）に鐫り、玉（一九）謀（二〇）に書して鐘鼎（二一）に刻む。若し乃ち（二二）匠人（二三）成風（二四）の妙巧（二五）を較め、伯子（二六）流波（二七）の雅引（二八）を息め、范張（二九）下泉（三〇）に款款（三一）として、尹班（三二）永夕（三三）に陶（三四）たり。駱驛（三五）縱橫（三六）、煙霏（三七）雨散（三八）、巧歷（三九）

【九】蘭菫。香草なり、易經に、同心の言は其臭蘭の如しとあり。鬱郁。香の盛なること。
【一〇】膠漆。にかは、うるし、共に密著する性質を有す。
【一一】墳簾。共に樂器の名。婉孌。相從好する貌。
【一二】金版。金匱の書。
【一三】盤盂。器物なり。
【一四】玉謀。文を記せる玉璧。
【一五】匠人。莊子に、郢人堊にて其鼻端を墾す、匠石をして之を斲らしむ、匠石斧を運らし風を成して之を斲る、堊を盡して鼻傷かす、郢人立ちて容を失はず、宋の元君之を開き匠石を召して曰く、試に寡人の爲に之をなせと、匠石曰く、臣能く之を斲らん、然れども臣の質死せり、吾ともに

言ふなしとあり、技を施すに足る程の人なしとの意。
【一六】伯子。伯牙なり、呂氏春秋に、伯牙琴を鼓す、意泰山に在り、鍾子期曰く、善いかな巍巍乎として泰山の如しと志流水に在り、子期曰く、善いかな湯湯乎として流水の如しと、子期死して伯牙琴を破りて復た鼓せず、世に音を賞する者なければなりとあり。
【一七】范張。後漢書に、范式、字は巨卿、少より張劭と友たり、劭卒す、式忽ち夢に劭を見る、呼んで曰く、巨卿吾某日を以て死し、當に某時を以て葬らるべし、子未だ我を忘れず、豈に能く相及ばんやと、式恍然として覺む、其葬日を

數へ馳せ往いて之に赴く、既に壙に至り將た窆せんとするも板進まず、其母之を撫して曰く、豈に望あるかと、遂に柩を停めて時を移す、乃ち素車白馬號哭して來るを見る、其母之を望見して曰く、必ず范巨卿ならんと、式執りて柩を引けば乃ち進む、式遂に家に留り樹を種みて然る後去るとあり。款款。相親む貌。
【一八】尹班。東觀漢記に、尹敏班彪と相厚し、毎に相與に談じ、晝は冥に至り夜は且に徹す、彪曰く、相與に久しく語らば、俗人の怪む所とならんと。陶陶。和樂の貌。
【一九】駱驛縱橫。絶えざる貌。
【二〇】煙霏雨散。衆多の貌。
【二一】巧歷。算數に巧なる人。

も知らざる所、心計も能く測るなし。而るに（三三）朱益州（三四）彝紋（三五）を泪し、謨訓（三六）を粵え、直切（三七）を捶ち交游（三八）を絶ち、黔首（三九）を比するに鷹鷂（四〇）を以てし、人靈（四一）を豺虎（四二）に媲（四三）す。蒙猜（四四）ふあり。請（四五）ふ其惑（四六）を辨（四七）せよと。
【大意】客、主人に問うて曰く、足下朱穆の絶交論を以て是となすか、將た非となすかと。主人曰く、何の故に此問をなすかと。客曰く、夫れ草蟲鳴けば阜螽之に従つて跳り、虎嘯けば風之に従つて起る。物は類を以て従ふ。交道の絶つべからざるや此の如し。故に良朋の道は憂樂を共にす。聖賢亦此道を簡策に書して後世に傳ふ。彼の匠人鼻端の堊を斲るを較め、伯牙琴を鼓するを息め、張劭死に至るまで其友を慕ひ、尹班徹宵歡談せるが如き、古來其例少からず。然るに朱穆の、常道を亂し聖賢の訓を破り、朋友を以て豺狼に比し、絶交論を著せるは何ぞや。余甚だ惑ふ。願くは足下の之を解かんことをと。
主人（三三）听然（三四）として笑つて曰く、客は所謂絃を撫し音を（三五）徽（三六）して、未だ燥濕（三七）の響を變ずるに達せず。羅（三八）を沮澤（三九）に張りて鴻鴈の雲飛するを觀ず。蓋し聖人は（四〇）金鏡（四一）を握り（四二）風（四三）

【三三】朱益州。朱穆、卒して益州刺史を贈らる。彝紋。交游の常道。
【三四】謨訓。古聖人の教訓。
【三五】黔首。人民なり。
【三六】媲。比なり。
【三七】蒙。愚昧の人、客自ら謂ふなり。
【三八】听然。笑ふ貌。
【三九】徽。琴を鼓して絃に循ふをいふ。
【四〇】沮澤。澤に草あるを沮といふ。
【四一】金鏡。明道に喩ふ。
【四二】風烈。烈は業なり。

烈を聞き、(三)龍驤、虯屈し、道に従つて汗隆す。
 び電薄れば、(三)棣華の微旨を顯す。五音の變化し
 て、(三)九成の妙曲を濟すが若し。此れ朱生、(三)玄
 珠を赤水に得、(三)神睿を誤りて言を爲すなり。夫
 の仁義を組織し道徳を琢磨し、其愉樂を驩び、其
(四)陵夷を恤ふるに至りては、通を、(四)靈臺の下に
 寄せ、跡を江湖の上に遺れ、(四)風雨急なれども
 其音を輟めず、霜雪零つれども其色を渝へず。斯
 れ賢達の、(四)素交、萬古を歴て一たび遇ふ。(四)
(四)叔世民訛し、(四)狙詐颺起するに逮んでは、谿谷も
 其險を踰ゆる能はず、鬼神も以て其變を究むるな
 し。(四)毛羽の輕を競ひ、(四)錐刀の末に趨る。是
 に於て素交盡きて利交興り、天下、(四)蚩蚩として
 鳥驚雷駭す。然らば、(四)則ち利交源を同うする

(三)日月壁を聯ぬれば、(三)靈臺の弘致を賛け、(三)雲飛

- 【三】 龍驤。龍の如く躍りあがること。虯屈。尺蠖の如く屈すること。
- 【三】 日月云云。時の太平なるをいふ。
- 【三】 靈臺。微妙なり。弘致。大旨なり。
- 【三】 雲飛云云。衰亂をいふ。
- 【三】 棣華。論語に唐棣の華、偏として其れ反すとあり、唐棣の花の反して後に合ふを言ふ、權反して後順に至るに喩ふ。
- 【三】 九成。韶樂なり。
- 【三】 玄珠。妙道に喩ふ。赤水。假設の川の名。莊子に黃帝赤水の北に遊び、其玄珠を遺るとあり。

- 【三】 神睿。神聖なり。
- 【四】 陵夷。凋零なり。
- 【四】 靈臺。心なり。莊子に、萬惡靈臺に内るべからずとあり。
- 【四】 風雨。詩經に風雨晦の如きも、雞鳴いて已ますとあり、君子亂世に居り其節を改めざるに喩ふ。
- 【四】 素交。純正の交。
- 【四】 叔世。季世なり、澆季の世。訛。偽なり。
- 【四】 狙詐。人の間隙を伺ふなり。
- 【四】 毛羽。小利に喩ふ。
- 【四】 錐刀。小事に喩ふ。
- 【四】 蚩蚩。擾擾なり。
- 【四】 一本に則字なし。

も、派流は則ち異り。其略を、(五)較言すれば、五術あり。
 【大意】 主人笑つて曰く、朋友の道時に隨つて盛衰す。今絶交の理を以て惑となすは、是れ時に隨ふの理を知らざる者なり。亦猶は琴聲の燥濕に因りて聲を異にするを知らず、網を草澤に張りて鳥の高飛するを知らざるが如し。蓋し聖人は明道を持し風業を開き、時に隨つて屈伸す。明時には則ち微妙大智の理を行ひ、衰亂には則ち權宜合順の意を爲す。亦猶は五音變化して韶樂の美を成すが如し。朱穆乃ち妙理の極を窮め、法を神聖に謨り、以て絶交論を作る。蓋し時を矯むるの理を得たる者なり。夫の共に仁義道徳を磨き憂樂を共にし、心に相知りて跡相忘れ、危難に臨んで節を變せざる者の如きは、乃ち天下の純交にして、所謂千載の一遇、容易に逢ふべからざるなり。澆世漸く詐僞險惡、鬼神も其變詐を究め盡す能はず、谿谷も其險惡に比するに足らず。而して互に小利を競争す。是に於てか純交絶えて利交興り、天下紛紛擾擾たり。而して利に趨るの本同じきも其法各異り。其類凡そ五種あり。

若其れ寵、(五)董石に鈞く、權、(五)梁竇を壓し、(五)百工を雕刻し、萬物を、(五)鑪捶し、吐漱、(五)雲雨を興し、(五)

- 【五】 較言。明言なり。
- 【五】 董石。董賢、石顯、竝に漢朝の寵臣。
- 【五】 梁竇。梁冀、竇憲、竝に後漢の權臣。
- 【五】 百工。百官なり。
- 【五】 鑪捶。鑪は火鑪。捶はフイガフ、鑪造に喩ふ。
- 【五】 雲雨。恩澤に喩ふ。
- 【五】 呼噓。呼吸なり。霜露。刑罰に喩ふ。

呼嘯霜露を下す。九域其風塵を聳れ、四海其
燿灼を疊れ、影を望んで、星奔し、響に藉
りて、川驚せざるなく、雞人始めて唱へて
鶴蓋陰を成し、高門且に開けて、流水軫を接
ふ。皆頂を摩して踵に至り、膽を墮り腸を
引き、約要離が妻子を焚けるに同じく、誓
荆卿が七族を湛せるに殉はんことを願ふ。是
を勢交といふ。其流一なり。富陶白に埒し
く、賢程羅より巨に、山に銅陵を擅に
し、家に金穴を藏し、平原を出でて騎を聯ね、
里閉に居て鍾を鳴らす。則ち窮巷の賓、繩樞の
士あり。宵燭の末光を冀ひ、潤屋の微澤
を邀め、魚貫鳧躍、颯沓鱗萃し、鴈鶩の
稻梁を分ち、玉壘の餘瀝に霑ひ、恩遇を銜み

- 【五】 九域。九州なり。
- 【六】 燿灼。威力なり。
- 【七】 星奔。星の如く奔る。
- 【八】 川驚。川の如く走る。
- 【九】 雞人。夜明けを告ぐる職。
- 【一〇】 鶴蓋。飛鶴の如き車蓋。
- 【一一】 流水。車なり。軫。車後
の横木。
- 【一二】 頂。頭なり。孟子に墨子
は兼愛す、頂を摩して踵に放
るとあり、摩は磨に通ず、頭
より足まで磨滅すること。
- 【一三】 要離。吳王僚の爲に慶忌
を殺さんとし、先づ其妻子を
焚き殺す。
- 【一四】 荆卿。荆軻なり、軻燕の
太子丹の爲に秦王を刺さんと
し、自ら七族を殺す。
- 【一五】 陶白。陶朱公、白圭、竝
に富豪なり。
- 【一六】 程羅。程鄭、羅褒、竝に
富豪なり。
- 【一七】 銅陵。銅山なり。
- 【一八】 里閉。閉は里門。
- 【一九】 繩樞。繩を以て戸樞とな
す、貧家なり。
- 【二〇】 宵燭。甘茂蘇代に謂つて
曰く、昔貧女あり、富女と會
績して曰く、我以て燭を買ふ
べしと、詳に戰國策に見ゆ。
- 【二一】 潤屋。大學に、富は屋を
潤し、徳は身を潤すとあり。
- 【二二】 魚貫鳧躍。貧者頭を駢べ
相次いで富者の門に至ること
貫魚の如く、水鳥の如きにい
ふ。
- 【二三】 颯沓鱗萃。羣集すること。
- 【二四】 鴈鶩。竝に水禽なり、魯
連子曰く、君の鴈鶩餘粟あり
と。
- 【二五】 玉壘。玉杯なり。

款誠を進め、青松を援いて以て心を示し、白水を指して信を旌す。是を
【大意】 若し其れ威權の盛なること、董賢、石顯、梁冀、竇憲を凌ぎ、呼吸舉動天下の人を振懼せし
むる者あれば、勢力を逐ふの人競つて其門に集
り、身を挫き心を盡し、要離、荆軻の、妻子を
焼き七族を殺して、吳王燕丹に附きしが如し。
是を勢交といふ。交りの第一種なり。鉅萬の富
を擁し、豪奢を極むる者あれば、貧窮の士其餘
澤を被らんことを冀ひ、其門に羣集して鴈鶩
を養ふの餘粟を求め、玉杯の餘瀝を乞ひ、其恩
遇に感じて誠信を進め、青松白水を指して其信
を誓ふ。是を賄交といふ。交の第二種なり。
陸大夫西都に宴喜し、郭有道東國に人倫た
り。公卿其籍甚を貴び、搢紳其登仙を羨む。加ふるに
談を聘せ、碧雞の雄辯を縦にし、溫郁を敍すれば則ち寒谷暄を成し、嚴苦を論すれば則ち春叢

- 【七六】 款誠。情信なり。
- 【七七】 賄交。賄は財貨なり。
- 【七八】 陸大夫。陸賈、高祖に事へ
て太中大夫たり、陳平錢五百
萬を以て賈に遣り食飲の費と
なす、賈此を以て公卿の間に
名聲籍甚なり。西都。長安也。
- 【七九】 郭有道。後漢の郭泰、博
學にして東都に遊ぶ、人倫之
を欽す、後郷に歸らんとす、
搢紳士子之を送る、李膺と舟
を同うして濟る、衆賓之を望
み以て登仙となす。東國。洛
陽なり。
- 【八〇】 鴈鶩。醜領なり。蹶頰。
- 【八一】 鼻莖の縮まれること、亦醜貌
なり、解嘲に、蔡澤頰頰折頰、
涕唾流沫、西のかた強秦の相
に揖して其位を奪へるは時な
りとあり。
- 【八二】 黃馬。莊子に惠施其言黃
馬と驢牛と三なり、辯者此を
以て惠施と相應じ、終身窮り
なしとあり。
- 【八三】 碧雞。王褒碧雞頰を作る、
其辭雄盛なり。
- 【八四】 溫郁。郁は煖に通ず、昔
鄒衍燕に在り、寒谷あり草木
を生ぜず、衍律を吹けば溫氣
至りて黍を生ず。

葉を零し、飛沈其顧指より出で、榮辱其一言に定まる。是に於て弱冠の王孫、綺紉の公子あり。道 通人に挂らず、聲未だ雲閣に遶からず。其鱗翼を攀ち、其餘論を丐ひ、駟驥の旄端に付き、歸鴻に 碣石に軼ぐ。是を談交といふ。其流三なり。陽に舒び陰に慘ふるは生民の多情、憂れば合ひ歡べば離るるは品物の恆性なり。故に魚は泉の涸るるを以て沫に噉き、鳥は將に死せんとするに因りて哀鳴す。同病相憐んで 河上の悲曲を綴り、恐懼懷に寘くは 谷風の盛典を昭にす。斯れ則ち 斷金は湫隘に由り、 芻豢は苦蓋より起る。是を以て 伍員は宰語を濯漑し、 張王は翼を 陳相に撫す。是を窮交といふ。其流四なり。

【八五】 飛沈。高下なり。
【八六】 綺紉。綺羅を飾る。
【八七】 通人。博く古今に通ずる人。
【八八】 駟驥。良馬なり。旄端。尾端なり。
【八九】 碣石。海畔の山の名。
【九〇】 河上。吳越春秋に、太宰嚭吳に來奔す、伍子胥請ひて以て大夫となす、吳の大夫被離承婁子胥に問うて曰く、何を以て語を信ずるか、子胥曰く、嚭吾と怨を同うすればなり、子河上の歌ふ者を聞かずや、同病相憐み、同憂相救ふ云云とあり。

【九一】 谷風。詩經小雅谷風篇の序に、天下俗薄く朋友の道絶ゆとあり、中に將た恐れ將た懼る、予を懷に寘くとあり、恐懼に際して朋友相親むをいふ。
【九二】 斷金。堅き交、易經に二人心を同うすれば其利金を斷つとあり。湫隘。貧賤に喩ふ。
【九三】 芻豢。堅き交、漢書に、張耳陳餘相與に芻豢の交をなすとあり。苦蓋。貧賤に喩ふ。
【九四】 伍員。伍子胥なり。濯漑。洗濯なり。宰語は子胥の洗濯に由りて顯榮なり、語既に貴くして子胥を讃す。
【九五】 張王。張耳常山王に封ぜらる、故に張王といふ。
【九六】 陳相。陳餘は趙相となる、故に陳相といふ、陳餘は張耳の撫翼に因りて奮飛す、餘既に尊くして耳を襲ふ。

【大意】 陸賈、郭泰が一時に籍甚たるの名聲を有し、之に加ふるに蔡澤が相位を奪ふに足るの才と、雄辯宏辭とを以てし、人の高下榮辱其人の一言に決す。此の如きの人あれば、王子公孫相與に其人に付き、以て己の名聲を揚げんことを競ふ。是を談交といふ。交の第三種なり。人陽時に在りては則ち舒び、陰時に在りては則ち慘み、憂患あれば相親み、歡樂に及んで相忘る。これ人の常情なり。故に魚水涸るれば相煦して親み、江湖に遊ぶに及んでは相忘る。鳥の將に死せんとする其鳴くや哀し。所謂同病相憐み同憂相救ふ者なり。故に斷金芻豢の交は、多く貧窮の時に成る。是を窮交といふ。交の第四種なり。
馳騫の俗、澆薄の倫、(九七)權衡を操り、(九八)權衡を乗らざるなし。衡は其輕重を揣る所以なり。(九九)續は其鼻息に、(一〇〇)屬する所以なり。若し衡擧ぐる能はず、續飛ぶ能はずれば、(一〇一)顔冉の龍翰鳳雛、(一〇二)曾史の蘭薰雪白、(一〇三)舒向の金玉淵海、(一〇四)卿雲の黼黻河漢と雖も、視ること游塵の若く、遇すること土梗に同じ。肯て其(一〇五)半菽を費すなく、其一毛を落すあること罕なり。若し衡

【九七】 馳騫。趨走なり。
【九八】 權衡。物の輕重を量るもの、ばかり。
【九九】 續。綿なり、人の死する時綿を鼻につけて氣息を候ふ。
【一〇〇】 屬。附くること。
【一〇一】 顔冉。顔回、冉耕、並に孔子の弟子。龍翰鳳雛。君子に喩ふ。
【一〇二】 曾史。曾參、史魚。蘭薰雪白。芳潔に喩ふ。
【一〇三】 舒向。董仲舒、劉向。金玉淵海。文章深博に喩ふ。
【一〇四】 卿雲。司馬長卿、楊子雲。黼黻河漢。錦繡の如く、大河の如きなり。
【一〇五】 土梗。土偶人なり。
【一〇六】 半菽。菽は豆なり。豆の半分。

重きこと (107) 錙銖、續微しく (108) 剽撇すれば、(109) 共工の慝を蒐し、(110) 驩兜の義を掩ひ、(111) 南荆の跋扈、(112) 東陵の巨猾と雖も、皆爲に (113) 匍匐逶迤し、(114) 折枝砥痔し、(115) 金膏翠羽其意を將け、(116) 脂章便辟其誠を導く。故に (117) 輪蓋の遊ぶ所、必ず (118) 夷惠の室にあらず。(119) 苞苴の入る所、實に (120) 張霍の家に於ける。謀りて後動き、(121) 毫芒も忒ふこと寡し。是を量交といふ。其流五なり。

【大意】 勢力を逐ふの人は皆衝を執り續を持ち以て勢力の輕重を量り、氣息の大小を驗す。若し勢輕く氣微なれば、行顔回、冉耕の如く、徳會參、史魚の如く、文章董仲舒、劉向、司馬長卿、楊子雲の如しと雖も、之を視ること浮塵木偶の如く、敢て半豆一毛を與へて以て之を濟はず。若し微しく氣勢あるの人を見れば、其惡行を顧みずして之に媚び、物を贈りて厚意を表す。其の氣勢

- 【一〇七】 錙銖。微少なる重量。
- 【一〇八】 剽撇。續の飛ぶ貌。
- 【一〇九】 共工。少昊氏なり、左傳に少昊氏子あり譏を服し慝を蒐すとあり、慝は惡、蒐は隠なり。
- 【一一〇】 驩兜。帝鴻氏の子なり、左傳に帝鴻氏子あり、義を掩ひ賊を隠し好んで凶徳を行ふとあり。
- 【一一一】 南荆。楚なり、莊躄盜をなし南楚に跋扈す。
- 【一一二】 東陵。地名、莊子に、盜跖東陵の上に死すとあり。巨猾。大賊なり。
- 【一一三】 匍匐逶迤。斜に行くこと、恭敬の狀なり。
- 【一一四】 折枝。手足を按摩するなり。孟子に長者の爲に折枝すとあり。砥痔。痔を嘗むること。
- 【一一五】 金膏。金丹なり。翠羽。翠鳥の羽。
- 【一一六】 脂章。柔媚なり。便辟。曲諂なり。
- 【一一七】 輪蓋。軒冕の人、官位ある人。
- 【一一八】 夷惠。伯夷、柳下惠、竝に潔白の人。
- 【一一九】 苞苴。贈り物。
- 【一二〇】 張霍。張安世、霍光、竝に漢の權臣。
- 【一二一】 毫芒。微小なり。

の輕重を量ること極めて精巧にして、少しも差ふことなし。是を量交といふ。交の第五種なり。

凡そ斯五交は義 (122) 賈嚮に同じ。故に (123) 桓譚之を譚闕に譬へ、(124) 林回之を甘醴に諭ふ。夫れ寒暑遞に進み、盛衰相襲る。或は前に榮えて後に悴へ、或は始め富んで終に貧しく、或は初め存して末に亡び、或は古 (125) 約にして今泰に、循環翻覆迅きこと波瀾の若し。此れ則ち利に殉ふの情、未だ嘗て異らず、變化の道一なるを得ず。是に由りて之を觀るに、(126) 張陳の終に凶なる所以、(127) 蕭朱の末に隙ある所以、斷焉として知るべし。而るに (128) 翟公方に (129) 規規然として門に勒して以て客を箴る。何ぞ見る所の晚きや。然れども此五交に因り是に (130) 三疊を生ず。徳を敗り義を殄ち、禽獸に相若くは一疊なり。難固攜れ易く讎訟の聚る所なるは二疊なり。名 (131) 饕餮に陥り

- 【一二二】 賈嚮。商賣なり。
- 【一二三】 桓譚。譚拾子孟嘗君に謂つて曰く、人富貴なれば則ち之に就き、貧賤なれば則ち之を去る、請ふ市を以て喻へん、夫れ市、朝には則ち満ち、夕には則ち虚し、朝に愛して夕に之を憎むにあらざるなり、求存するが故に往き、求亡するが故に去る云々とあり。譚闕。市垣なり。
- 【一二四】 林回。莊子に、林回曰く、君子の交は淡くして水の若く小人の交は甘きこと醴の如しとあり。
- 【一二五】 約。窮乏なり。泰。豊奢なり。
- 【一二六】 張陳。張耳、陳餘。
- 【一二七】 蕭朱。漢書に、蕭育少くして朱博と友たり、後育九卿となり、博先づ丞相に至る、博と隙ありとあり。
- 【一二八】 翟公。漢書に、翟公廷尉となり賓客門に填つ、廢せらるるに及び、門外雀糞を設くべし、後復た廷尉となる、賓客往かんと欲す、翟公大に門に署して曰く、一死一生乃ち交情を知り、一貧一富乃ち交態を知り、一貴一賤交情乃ち見ると、とあり。
- 【一二九】 規規然。區區といふが如し。
- 【一三〇】 三疊。疊は罪なり。
- 【一三一】 饕餮。貪慾なり。

【三】貞介の羞づる所なるは三疊なり。古人三疊の梗たるを知り、五交の尤を速くを懼る。故に王丹は子を威すに檣楚を以てし、朱穆は昌言して絶を示す。旨あるかな旨あるかな。

【大意】凡そ此五交は商賈の道と同じ。故に古人之を市場に喩ふ。夫れ人の盛衰は恆ならず。循環、翻覆波瀾の如し。利を求むるの情は同じくして、貧富貴賤は則ち異り。是に於てか終に交道の斷絶を致す。彼の翟公が盛なれば賓客門に填ち、衰ふれば去つて顧みざるを怒りしが如きは、事情に迂なる者なり。而して此五交又三罪を醸す。徳を敗り義を殄ち、行禽獸に同じきは一罪なり。深交忽ち離れて人の非難を被るは二罪なり。名聲を貪慾に没し、廉潔の士の羞づる所となるは三罪なり。古人五交三罪の禍を招くを知る。故に王丹は子を鞭ちて友の喪に奔るを止め、朱穆は絶交論を著せり。其旨深しと謂ふべし。

近世 樂安の任昉といふ者あり。海内の髦傑にして、早く銀黃を縮ひ、夙に民譽を昭にす。遁文麗藻は曹王に方駕し、英特俊邁は許郭に聯横し、田

文の客を愛せるに類し、鄭莊の賢を好むに同じ。一善を見れば則ち盱衡扼腕し、一才に遇へば則ち眉を揚げ掌を抵つ。雌黃其屑吻より出で、朱紫其月旦に由る。是に於て冠蓋輻湊し、衣裳雲合し、

輻輳を撃ち、坐客恆に滿ち、其闕闕を踏めば、闕里の堂に升るが若く、其陝隅に入れば、龍門の阪に登ると謂ふ。顧眄其倍價を増し、翦拂其をして長鳴せしむるに至りては、組を雲臺に影す者肩を摩り、丹墀

- 【一三】鄭莊。漢書に、鄭當時、字は莊、朝する毎に未だ嘗て天下の長者を言はずんばあらすとあり。
- 【一四】盱衡。驚き見る貌。
- 【一五】雌黃。善惡の批評。
- 【一六】朱紫。品評なり。月旦。評論なり。
- 【一七】冠蓋。官位ある人。
- 【一八】衣裳。前に同じ。雲合。雲の如く集る。
- 【一九】輻輳。車なり。輳。車軸頭なり。
- 【二〇】闕闕。門限なり、しきる。
- 【二一】陝隅。孔子の里の名。
- 【二二】龍門。室の西南隅を陝といふ。
- 【二三】龍門。後漢書に、李膺獨り風裁を持す、士其容接を被る者あれば名づけて登龍門となすとあり。
- 【二四】顧眄。蘇代淳于髡に謂つて曰く、客伯樂に謂ふあり、曰く臣駿馬あり之を賣らんと欲す、三且市に立つるも人與に言ふなし、願くば子還りて之を視、去つて之を顧みよ、臣請ふ一朝の費を獻ぜん、伯樂乃ち之を視、去つて之を顧る、一旦にして馬の價十倍すとあり。
- 【二五】組。印綬なり。
- 【二六】丹墀。天子の階階、地を塗るに丹を以てす、之を丹墀といふ。
- 【二七】綢繆。懇親なり。
- 【二八】惠莊。淮南子に、惠施死して莊子説を疑む、世爲に語るべきものなければなりとあり。

に趨走する者跡を疊ね、恩狎を締む。縲を結び、惠莊の清塵を想ひ、羊左の徽烈を庶はざるはなし。東粵に瞑目し、骸を洛浦に歸すに及び、總帳猶ほ懸るも、門に漬酒の彦罕に、墳未だ

【二五】羊左。烈士傳に、羊角哀、左伯桃、死友となり、同じく楚に往く、路に雨雪に逢ふ、俱に全からざるを計り、乃ち相與に樹中に餓死すとあり。徽烈。美業なり。
【二六】東粵。新安をいふ、任昉ここに死す。
【二七】洛浦。揚州をいふ、揚州は梁の洛陽なればなり。
【二八】總帳。靈前の帳。
【二九】漬酒。後漢の徐穉、毎に一兩の醪を以て酒中に漬し、友の死するを聞けば、之を持

して塚に至り、乃ち水を以て蘇を漬し、酒氣あらしめ、前に置いて祭り、終れば乃ち去り、喪主を見ず。彦。美士なり。
【三〇】宿草。年を歴し草木、禮記に、朋友の墓に宿草あれば哭せずとあり。
【三一】動輪。范式の其友張劭の柩車を推しし故事。一七を見よ。
【三二】藐爾。小なる貌。諸孤。任昉の子をいふ。
【三三】鄆。山中の毒氣。
【三四】英。英士なり。

【三五】金蘭。親友也、易經に二人心を同うし、其利金を斷つ、同心の言其臭蘭の如しとあり。
【三六】羊舌。叔向なり、國語に、叔向司馬侯の子を見、撫して泣く。
【三七】郗成。孔叢子に、郗成子魯より晉に聘し衛を過ぐ、衛の右宰穀臣止めて之に觴し、畢りて贈るに璧を以てす、成子辭せずして去る、後衛亂れ穀臣死す、成子はに於て其妻子を迎へ、其璧を還し、宅を隔てて之を居くとあり。

宿草あらざるに、野に動輪の賓を絶つ。藐爾たる諸孤、朝に夕を謀らず。大海の南に流離し、命を鄆瘴の地に寄す。昔臂を把るの英、金蘭の友より、曾て羊舌泣を下すの仁なし。寧ろ、刷成宅を分つの徳を慕はんや。

【大意】任昉は天下の英傑にして、夙に顯榮に登り天下の望を負ひ、文章に巧に賢士を愛す。故に衣

冠の士皆其門に集ること、昔人の孔子の堂、李膺の門を慕ひしが如し。士人亦其顧眄選抜に因りて臺省に升りし者甚だ多し。昉の新安に死し揚州に歸葬するや、復た人之之れを哭弔する者なく、遺孤南方瘴癘の地に流離するも、之を救恤する者なし。

嗚呼世路の嶮巖一に此に至る。太行、孟門豈に斷絶と云はんや。是を以て耿介の士其の斯の若きを疾み、裳を裂き足を裹み、之を棄てて長驚し、高山の頂に獨立し、麋鹿と羣を同うするを歡び、噉噉然として其霧濁を絶つ。誠に之を恥づればなり。誠に之を畏るればなり。

【二七】嶮巖。危險なり。
【二八】太行、孟門。竝に山名。斷絶。危險なる貌。
【二九】耿介の士。廉潔の人、作者自ら謂ふ。
【三〇】長驚。長驅といふが如し。
【三一】噉噉然。潔白の貌。
【三二】霧濁。汗穢なり。

【大意】ああ世路の險は山よりも險なり。故に廉潔の士は俗世の交を避け、獨り山中に隠れて麋鹿を侶とす。汗穢を恥ぢ畏るればなり。

連珠

演連珠五十首

陸士衡

臣しん聞きく、日ひ薄はくり星せい廻めぐるは、穹きう天てんの物ものを紀きする所以ゆゑなり。山やま盈みち川かは沖おきは、
后ご土どの氣きを播はす所以ゆゑなり。五ご行ぎやう錯さくりて用ようを致いたし、四し時じ違ちがひにして歳としを成なす
と。是こゝを以もつて百ひやく官くわん 恪かく居きよして以もつて 八はち音いんの離りに赴おもむき、明めい君くん契けいを執とりて以もつて
克やくく諧やぐの會くわいを要ようす。

【大意】 日ひの天てんに薄はくり星せいの漢わんを廻めぐるは、陰いん陽やうの節せつを紀きする所以ゆゑ、山やまの充じう積せき
し川かはの空くう虚きよなるは、地ち氣きを流りう通つうする所以ゆゑなり。五ご行ぎやう錯さく運うんし四し時じ去き來らいして以もつて一いつ歳さいを成なす。是こゝを以もつて百ひやく官くわん 各おの其おの職しやく事じに勤つとめ、君きみ信しんを執とりて以もつて之これに任にんずれば、事こととして治をさまらざるはなし。猶なほ樂がくを奏そうする者ものの八はち音いんの節せつを會くわいして聲せい韻いん和わするが如ごとし。(此この章しやうは君きみたる者もの天地てんち運うん動どうの節せつに倣ならひて賢けん能のうに任にんすべきに喩たとふ)。

臣しん聞きく、任にん力ちからより重おもければ、才さい盡つきて則すなはち困くわんみ、用よう其その器きより廣ひろければ、應おう博ひろくして則すなはち凶きまなりと。是こゝを以もつて物もの 權けんに勝かてば 衡へい殆あやふく、形かたち鏡かがみに過すぐれば則すなはち照せう窮きまる。故ゆゑに明めい主しゆは才さいを程はかりて以もつて業げふを效こころみ、貞てい臣しんは力ちからを底いたして豊ほうを辭じす。

- 【一】 演連珠。連珠とは假に衆物に託して義を陳べ、以て諷諭の道を通ずるなり、連は貫なり、情理を穿貫し珠の貫に在るが如きをいふ、漢の章帝の時、班固、賈逵已に此作あり、士衡復た舊義を引いて之を廣む。
- 【二】 后土。地なり。
- 【三】 五行。水火金木土なり。
- 【四】 恪居。恪は勤なり。其職事に勤むるなり。
- 【五】 八音。金石絲竹匏土革木、離。節なり。
- 【六】 克く諧ぐ。書經に、八音克く諧ぐとあり。
- 【七】 權。はかりの錘なり。
- 【八】 衡。秤なり。秤る所の物錘より重ければ衡必ず折る。

【大意】 君きみは當まさに才さいを度はかりて任にんを授さづくべく、臣しんは當まさに德とくを度はかりて官くわんを受うくべし、君きみよく才さい能のうを品ひんし事じ業げふを考かんがへ、然しかる後のちに職しやくを授さづけ、臣しんよく力ちからを致いたして主しゆを佐たすけ、爵しやく祿りくの豊ほう大たいを辭じせば、能よく國くにを安やすんじ身みを存ぞんするを得う。

臣しん聞きく、髻しん俊しゆんの才さいは世よに希き乏はふなる所ところなり。(一〇) 丘きう園えんの秀しゆは時ときに因よりて則すなはち揚あがると。是こゝを以もつて 大たい人じん命めいを基はむるに、才さいを后こう土どより擢ねかず。明めい主しゆに興おこるに、佐たすけ 吳ご蒼そうより降くださす。

【大意】 賢けん人じんは世よに稀まれなりと謂いふも、世よとして有あらざるはなし。ただ君くん主しゆの之これを登とう庸ようせざるのみ。故ゆゑに聖せい主しゆ興おこれば賢けん臣しんも亦また相あひ應おうじて起おこる。豈あに之これを地ち下かより拔ひき、之これを天てん上じやうより降くだすならんや。

臣しん聞きく、世よの遺いつる所ところ、未いまだ實たかららずとなさす。主しゆの珍ちんとする所ところ、必かならずも治てきに適てきせずと。是こゝを以もつて 俊しゆん父ふの藪そふ、(二) 翹せう車しやの招まねを蒙かうむること希まれに、(三) 金きん碧へきの巖がん、必かならず 鳳ほう舉きよの使つかひを辱かたじけなうす。

- 【九】 髻俊。俊傑なり。
- 【一〇】 丘園の秀。隱遁せる傑士。
- 【一一】 大人。天子なり。
- 【一二】 吳蒼。天なり。
- 【一三】 俊父。俊傑なり。藪。澤なり。
- 【一四】 翹車。使者の車、詩經に翹翹たる車乘、我を招くに弓を以てすとあり。
- 【一五】 金碧。漢書に、益州に金馬、碧雞の神あり、帝諫議大夫王褒を遣し、之を求めしむとあり。
- 【一六】 鳳舉。鳳凰の飛揚するが如きなり。

何となれば俊傑草澤に隱

る者招引を蒙らず。精怪の神山巖に在れば、使を發して之を求むればなり。
臣聞く、祿龍を放にするは家を隆にするの舉にあらず、官親に私するは邦を興すの選にあらずと。
是を以て 三卿世及して 東國衰弊の政多く、五侯軌を竝べて 西
京陵夷の運あり。

【大意】 權龍臣に盛に、祿私身に厚きは家國興隆の道にあらず。魯國の
衰、漢室の微、蓋し皆是に由るなり。

臣聞く、靈輝朝に觀ゆれば物に稱ひて照を納れ、時風夕に灑げば、形を
程りて音を賦くと。是を以て至道の行はるる、萬類足るを世に取り、大化既
に洽ければ、百姓心に匿きことなし。

【大意】 此章は聖人百姓の心を以て心となせば、則ち萬物各其所を得る
を明にす。夫れ日の朝に見ゆるや、隙穴の大小に隨つて照を納れ、風の夕
に散するや、形物の巨細に因つて音を賦す。亦猶ほ至徳の君化、萬物に及
んで各其分を盡すが如し。故に百姓匿乏なし。

臣聞く、網を頓へて淵を探るも龍を招く能はず。綱を振つて雲を 羅するも必ずしも鳳を招かずと。

【一七】 三卿。魯の三卿孟孫叔孫季孫をいふ。世及。世襲なり。

【一八】 東國。魯をいふ。

【一九】 五侯。漢の成帝、舅王譚、王立、王根、王逢、王商を封じて列侯となす、世之を五侯といふ。

【二〇】 西京。長安なり、前漢は長安に都す。故に漢をいふ。

【二一】 靈輝。日なり。

【二二】 羅。網なり。

是を以て 箕に巢ふの叟は丘園の 幣を晒みず。 渭に洗ふの民は 傅
巖の夢を發せず。

【大意】 大賢（龍鳳）は禮物を以て致すべからず、ただ至道を以て之を招
くべきを明にす。許由東帛の聘を顧みず、巢父時君の夢に感せず。賢人
の禮物を以て致す能はざる、之を見て知るべし。

臣聞く、鑿の積るや厚きなし。而も照すこと重淵の深きあり。目の察るや畔
あり。而も眠ること天壤の際に周し。何となれば則ち事に應ずるに精を以て
して形を以てせず。物を造るに神を以てして器を以てせざればなりと。是を
以て萬邦の 凱樂は鐘鼓の 娛を悦ぶにあらず。天下仁に歸するは 玉
帛の恵に感するにあらず。

【大意】 夫れ鏡の質は薄く、目の形は小なり。能く深きを照し遠きを視る
所以は、精明の徳あるを以てなり。聖人能く此精明の徳を體すれば、則ち
禮樂の化を假らずして天下自ら樂む。
臣聞く、實を積むこと微なりと雖も必ず物を動かし、虚を崇うすること廣し

【二三】 箕に巢ふの叟。呂氏春秋に、堯帝位を許由に譲らんとす、許由恥ちて箕山の下に隠るとあり。

【二四】 幣。束帛なり。

【二五】 渭に洗ふの民。高士傳に、巢父許由の堯の爲に譲られしを聞き、以つて汙れたりとなし、池水に臨んで耳を洗ふ。

【二六】 傅巖。傳說刑人となりて傅巖に築く、殷の高宗夢に之を見、徴して相となす。

【二七】 凱樂。和樂なり、論語に、樂といひ樂といふ、鐘鼓をいはんやとあり。

【二八】 玉帛。禮物なり、論語に、禮といひ禮といふ、玉帛をいはんやとあり。

と雖も心を移す能はずと。是を以て 都人の冶容なるも 西施の影を悦ばず。乘馬 班如たるも 泰山の陰に輟らず。

【大意】 此章は實を積んで小なるも、名の虚にして大なるに勝るを明にす。必ず人を感動す。虚名を高うするは廣しと雖も心を移す能はず。美士荒淫なるも西施の畫像を悦ばず。泰山の陰影は進み難きの馬を止むる能はず。

臣聞く、物に應ずること 方あれば、難に居るも則ち易し。器を藏めて身に在るも、乏しき所の者は時なりと。是を以て堂に充てるの芳は、幽蘭にあらずれば難しとする所、 梁を繞るの音は、實に 榮絃の思ふ所なり。

【大意】 此章は賢才あるも知音に遇はずんば不可なるを言ふ。機に應ずること法ある者は難に居るも亦易し。才を身に抱く者も時を俟つて後行ふ。満室の香を求むれば、幽蘭にあらずんば致し難し。(治績を擧ぐるは賢才に因る)。歌聲 梁を繞るは彈絃者の與に曲を合せんことを思ふ所なり。(賢才明主を待つて功を立てんことを思ふ)。

臣聞く、智通塞に周ければ時の爲に窮せられず。才 夷險を経れば世の爲に屈せられずと。是を以て 廳を陵ぐの羽は風を反さんことを求めず。夜に曜くの目は日を倒にせんことを思はず。

【大意】 賢者は時に隨ひ變に應ず。故に窮屈するなし。陵廳の翻ある者は風力を假らず。夜物を見る者は日を廻らして明となさんことを思はず。賢人は夷險一節、其志を改めず。故に能く大功を立つ。

臣聞く、忠臣は志に率ひ、其報を謀らず。貞士の憤を發する、斯明賢に在りと。是を以て 柳 莊の黜殞は 瓜衍の賞を食まんとにあらす。禽息の首を碎くは豈に 先茅の田を要めんや。

【大意】 此章は貞義の臣、君を諫め賢を擧ぐるは、皆深衷より發す。封賞を求むるの意あるにあらざるを言ふ。

臣聞く、利眼も雲に臨めば照を垂る能はず。朗璞も垢を蒙れば輝を吐く能はずと。是を以て明哲の君も時に蔽壅の累あり。

【大意】 此章は明哲の君も時に蔽壅の累あり。俊父の臣も屢

時 珠 連 演

【二九】 都人。美士なり。冶容。荒淫なること。

【三〇】 西施。美女の名。影。畫像なり。

【三一】 班如。盤桓して進まざる貌。

【三二】 泰山。泰山なり。

【三三】 方。常なり。法なり。

【三四】 梁を繞る。韓娥善く歌ふ、餘聲梁を繞る。

【三五】 榮絃。絃樂曲せられて伸びざるをいふ。

【三六】 夷險。治亂といふが如し。

【三三】 柳莊。史魚の誤、韓詩外傳に、衛の大夫史魚且に死せんとす、其子に謂つて曰く、我屢遭伯玉の賢を言へども進むる能はず、彌子瑕の不肖を言へども退くる能はず、我死せば喪を正堂に居くべからず、我を室に殯せば足ると、衛君其故を問ふ、子父の言を以て聞ず、君乃ち蓬伯玉を貴び彌子瑕を退け、殯を正堂に徙し、禮を成して去る、生きては身を以て諫め、死しては尸を以

【三二】 瓜衍。晉侯の賞として士伯に與へし縣名。

【三三】 禽息。人名、禽息百里奚を秦の繆公に薦む、繆公用ひす、乃ち首を碎いて以て之を達す。

【三四】 先茅。晉の襄公の胥臣に與へし縣名。

【三五】 朗璞。明玉なり。

【三六】 俊父。俊傑なり。

【三七】 後時。時を失ふこと。

【大意】 此章は讒臣朝に在りて明君を壅蔽す。故に賢者の用ひらるる能はざるを言ふ。
臣聞く、郁烈の芳は 委灰より出で、繁會の音は絶絃より生ずと。是を以て貞女は名を没世に要し、
烈士は節に當年に赴く。

【大意】 此章は烈士貞女の身死して後名彰るるを言ふ。香は火に委して始めて、死して後其名を成すが如し。
臣聞く、良宰の朝に謀る、必ずしも威を借らず。貞臣の主を衛る、身を脩めて、死して後其名を成すが如し。

【大意】 忠良の朝に在るや、威力を假らずして敵國を服す。故に晏嬰禮節を樽俎に執り、子罕介夫を陽門に哭し、晉をして敢て兵を齊宋に加へざらしむ。

臣聞く、曲に赴くの音は 洪細韻に入り、節を踏むの容は俯仰詠に依る。是を以て言苟も事に適すれば、精麤施すべし。士苟も道に適すれば、脩短命すべし。

- 【四四】 郁烈。香氣の盛なること。
- 【四五】 委灰。火に委して焼くこと。
- 【四六】 齊堂の俎。齊の晏嬰威を樽俎の間に立て、晉人をして齊を伐つの謀を輟めしむ、事晏子春秋に出づ。
- 【四七】 陽門。子罕介夫を慟哭し、晉人をして、宋を伐つの謀を輟めしむ、詳に禮記に見ゆ。
- 【四八】 洪細。大小なり。
- 【四九】 脩短。長短なり。

【大意】 此章は人を取るは當に其所長に隨ふべし。諸長を備具するを待ちて後任せざるを言ふ。樂音の大小異りと雖も俱に調に合ふ。舞容の俯仰體を殊にすと雖も必ず歌士に依る。言事に適し徳道に合ふあらば、才の精粗長短同じからずと雖も、皆命じて之を用ふべし。
臣聞く、雲に因つて潤を灑げば則ち芬澤流れ易く、風に乗じて響を載すれば則ち音徽自ら遠しと。是を以て徳教物を俟ちて濟り、榮名時に縁りて顯る。

【大意】 雨の潤を灑ぐ、聲の響を傳ふる、必ず風雲に資りて後芬美に流遠し。亦猶ほ徳教賢を待つて後成り、賢人時を待つて後彰るるが如し。
臣聞く、影を覽て質を偶ふれば獨を解る能はず。跡を指し遠きを慕へば遅きを救ふなしと。是を以て 虚器に循ふ者は物に應ずるの具にあらず。空言を翫ぶ者は治を致すの機にあらず。

- 【五〇】 音徽。美音なり。
- 【五一】 虚器。畫ける器物。
- 【五二】 陽谷。日の出づる處。
- 【五三】 飛廉。風の神。
- 【五四】 瑣。小なり。洪。大なり。

【大意】 此章は言ありて行なき者の用ふるに足らざるを言ふ。畫器に循ふ者は物を盛るに堪へず。空言を賞する者は機務を理むるに足らず。
臣聞く、燧を鑽り火を吐いて以て 陽谷の晷に續ぎ、翮を揮ひ風を生じて 飛廉の功に繼ぐと。是を以て物微にして著を毗くるあり。事瑣にして洪を助くるあり。

飛廉の功に繼ぐと。是

【大意】 燧を鑽りて火を取り、扇を揮つて風を生ずるも、亦能く日晷の明を續ぎ、飛廉の吹を繼ぐ。

小能の人も亦能く大業を助成すべし。
臣聞く、春風朝に煦なれば、蕭艾も其温を蒙り、秋霜宵墜つれば、芝蕙も其涼を被ると。是の故に威は物を齊ふるを以て、肅となし、徳は普く濟ふを以て弘となす。

【大意】 此章は人君の賞罰、貴賤を以て常を易へざるを明にす。

臣聞く、巧は器に盡く。習數くすれば則ち貫る。道は神に繋る。人亡ぶれば則ち滅ぶと。是を以て、輪匠目を肆にすれば、奚仲の妙に乏しからず。瞽叟耳を清すも、伶倫の察なし。

【大意】 工巧は習を以て致すべし、妙道は力を以て求め難し。輪工目力を極むれば奚仲の妙に達すべし。瞽師耳を靜にするも伶倫の妙を得る能はず。妙道は其人に存す。故に其人亡すれば妙道も亦随つて滅ぶ。

臣聞く、性の期する所貴賤量を同うす。理の極まる所卑高歸を一にすと。是を以て、月を准じて水を烹くるも涼を加ふる能はず。日を晷かして火を引くも必ずしも輝を増さず。

【五五】 蕭艾。惡草なり。

【五六】 芝蕙。香草なり。

【五七】 肅。嚴なり。

【五八】 輪匠。車を作る工。

【五九】 奚仲。車を作る名工。

【六〇】 瞽叟。盲の樂人。

【六一】 伶倫。音樂の名人。

【六二】 古方諸(器物の名)を用ひて月中の水を取り、以て祭祀の用に供す。

【六三】 古陽燧(器物の名)を以て火を日に取り、以て祭祀の用に供す。

【大意】 物貴賤流を殊にし、高卑級を異にすと雖も、理其極に至れば則ち歸を同うす。亦猶は方諸水を月に取り、陽燧火を日に取る、高しと雖も涼輝の性尋常の水火に加へざるが如し。
臣聞く、絶節高唱は凡耳の悲む所にあらず。肆義芳訊は庸聽の善する所にあらずと。是を以て、南荆には和すること寡きの歌あり。東野には釋かざるの辯あり。

【大意】 此章は事至妙に達すれば、常人の知る所にあざるを明にす。楚客雅曲を唱ふるも凡耳の聽かざる所、子貢芳義を陳ぶるも、野人の善せざる所なり。

臣聞く、煙を尋ね芬を染むるに、薰息むも猶ほ芳し。音を徴し響を録するに操終れば則ち絶ゆ。何となれば則ち世に垂るる者は繼ぐべく、身に止まる者は結び難ければなりと。是を以て、玄晏の風は恆に存し、動神の化は已に滅ぶ。

【大意】 此章は教跡の世に垂るる者は尋ねべく、妙道の身に在る者は繼ぎ

【六四】 絶節高唱。高妙なる歌。

【六五】 肆義芳訊。肆は陳、訊は言なり、道義を述べたる美言。

【六六】 南荆。楚なり、客楚都に歌ふ者あり、始め下俚巴人を歌ふや、屬して和する者數千人なり、既にして陽春白雪を歌へば、唱へて之に和する者彌々寡し。

【六七】 東野。呂氏春秋に、孔子東野に行く、馬逸して野人の稼を食ふ、野人其馬を留む、子貢説いて之を詰ふ、野人終に聽かず、鄙人馬圍乃ち復た往き説いて曰く、子東海に耕して西海に至る、吾が馬何ぞ子の苗を食はざるを得んやと、野人大に悦び馬を解いて之を還すとあり。

【六八】 操。曲なり。

【六九】 玄晏。禮教なり。

【七〇】 動神。至道なり。

難きを言ふ。煙を尋ね氣に染るに煙息めども猶ほ芳し（周孔死すと雖も禮教の風尚は存するに喩ふ）。

音を驗し響を録するに曲終れば則ち絶ゆ（堯舜世を去り至道の化乃ち滅ぶるに喩ふ）。

臣聞く、闇に託し形を藏すは巧密となさず。智に倚り情を隠すは自ら匿すに足らずと。是を以て 重

光藻を發し、虚を尋ね景を捕へ、 大人貞觀して心を探り 忒を 昭に

す。

【大意】 人身を闇に藏し、自ら以て密なりとなすも、日光彩を發して之を

照す。情を知に隠し、自ら以て匿せりとなすも、聖人貞觀して之を 明に

す。人焉んぞ度さんや。

臣聞く、雲を披いて霄を看れば則ち天文清み、風を澄めて水を觀れば則ち川

流平なりと。是を以て 四族放たれて 唐劭しく、 二臣誅せられて

楚寧し。

【大意】 風雲を去れば則ち天清く水平なり。暴亂を誅すれば則ち君聖にして時泰し。堯の治は四凶

を放てるに因りて美に、楚の政は二臣を誅せるに因りて寧し。

臣聞く、音は耳に 比するを以て美となし、色は目を悦ばすを以て歡となすと。是を以て衆聽の傾く所は

【七二】 重光。日なり。

【七三】 大人。聖人なり。貞觀。

正しく觀察すること。

【七四】 四族。四凶なり、共工、驩兜、三苗、鯀をいふ、舜堯

を佐けて此四凶を放逐せり。

【七五】 唐。堯なり。

【七六】 比。和順なり。

百里の操を假るにあらず。萬夫の 婉孌は西子の顔を俟つにあらず。故に聖人は世に隨つて以て

佐を擢んで、明主は時に因つて官を命ず。

【大意】 此章は明君は時に隨つて賢を擢んづ、必ずしも 徒に古人を慕はざるを言ふ。夫れ耳目を悦

ばす者は時に適ふを以て美となす。何ぞ必ずしも北里の曲、西施の顔を俟つて後樂まんや。

臣聞く、身より出づる者は物を假りて隆にする所にあらず。時に牽かるる者

は克己の易むる所にあらずと。是を以て利萬物を盡すも、童昏の心を 叡に

する能はず。徳生民に表たるも、 棲遑の辱を救ふ能はず。

【大意】 下愚は性に由る。物を假りて移すべきにあらず。弊俗は時に繋る。

克己の能く正す所にあらず。是を以て堯の化天下に被るも其子丹朱の闇愚

を革むる能はず。孔子の徳生民に冠たるも、 棲遑の辱を救ふ能はず。

臣聞く、動くに 定檢に循へば、天も察すべきあり。應ずるに常節なけれ

ば身或は 照し難しと。是を以て景を望んで日を揆れば 盈數期すべし。臆を撫して心を論ずるも、

時ありて 謬る。

【大意】 天の運轉は定法あり。故に之を測度すべし。人心の變易は常なし。故に明にし難し。是れ人

【七七】 百里。一本に北里に作る、

樂の名。操は曲なり。

【七八】 婉孌。心の和樂なり。西

子。西施なり、古の美女。

【七九】 棲遑。孔子は棲棲遑遑と

して席暖まるに暇あらず。

【八〇】 定檢。法度なり。

【八一】 照。一に昭に作る。

【八二】 盈數。長短の數なり。

心を明にするは、天を知るより難き所以なり。

臣聞く、耳を傾けて音を求むれば、眠ること 儻に聴くこと苦し。心を澄して物に循へば、形逸し神

【八三】 優。樂むこと。
【八四】 匏瓜。一處に繋りて動かざること、論語に、子曰く吾豈匏瓜ならんや、焉んぞ能く繋りて食はざらんとなり。

【八五】 懷春。春情を抱くこと、詩經に、女あり春を懷ふ、吉士之を誘ふとあり。

【八六】 偶影。獨居なり。孤影の意。

【八七】 鈞天。中天なり。

【八八】 蒲密。蒲は子路の治めし邑。密は卓茂の治めし邑。黎。民なり。

勞す。是を以て天其數を殊にすれば、方を同うすと雖も其感を分つ能はず。理其通を塞げば則ち質を竝ぶるも其休を共にする能はず。

【大意】 それ耳を傾けて聲を求むれば、耳苦んで目樂む。心を定めて物を視れば心勞して身安し。同じく一身の上在りて休感異なる者は、天理宜しきを殊にし、造化自ら隔つればなり。

臣聞く、遁世の士は 匏瓜の性を受くるにあらず。幽居の女は 懷春の情なきにあらずと。是を以て名欲に勝つ。故に 偶影の操 矜なり。窮、達に愈る。故に凌霄の節厲し。

【大意】 隱者豈に性匏瓜の如く繋りて一處に在らんや。貞女豈に獨居を樂む者ならんや。時の仕ふべからず、欲の名に及ばざるを知ればなり。故に能く貞節を立つ。

臣聞く、聽音を極れば 鈞天の樂を慕はず。身陰に足れば垂天の雲を假るなしと。是を以て 蒲密

の黎は 時雍の世を遺れ、 豊沛の士は 桓撥の君を忘る。

【大意】 夫れ音聽くに足れば天上の廣樂を思はず。身庇はるる所あれば大雲を假らず。亦猶ほ蒲密の民子路、卓茂の化を被りて太平の世を遺れ、漢朝の士殷徳を思はざるが如し。

臣聞く、 飛轡西に頓けば則ち 離朱と矇瞶と察を收め、 懸景東に秀づれば則ち 夜光と瑛珠と耀を匿すと。是を以て才世を換ふれば則ち俱に困み、功時に偶すれば竝に勅し。

【大意】 此章は君暗くして權臣事に任ずれば、則ち賢と愚と類を同うするを言ふ。日暮るれば明目と盲人と同じく明なしとなし、月出づれば夜光と瑛珠と皆光を匿す。亦猶ほ世昏ければ賢愚共に困み、時に逢へば賢者相繼いで興るが如し。

臣聞く、應を近きに示せば遠きも察すべきあり。驗を顯に託すれば微も或は包むべしと。是を以て 寸管下僚すれば、天地も氣を以て欺く能はず。尺表逆立すれば、日月も形を以て逃る能はず。

【九六】 寸管。律管なり、下僚。僚は向なり、挿して地中に向ひ氣を候ふなり。
【九七】 尺表。日影を測る器。

【大意】此章は人を用ふるには、事に臨んで後知るを假らず。ただ志氣の近きを察し心迹の遠きを驗すべきを言ふ。寸管を以て天地の氣を測り、尺表を以て日月の形を候すれば、天地も人を欺く能はず。日月も逃るる能はず、況んや人情能く逃匿せんや。

臣聞く、絃に常音あり。故に曲終れば則ち改る。鏡に畜影なし。故に形に觸るれば則ち照すと。是を以て己を虚うして物に應ずれば、必ず千變の容を究め、情を挾んで事に適けば、萬殊の妙を觀ず。

【大意】此章は聖人道を以て物を御し、其情に私せず。故に應せざるなきを言ふ。絃に常音あり。曲終れば則ち變ず。改易の情を挾む。故に其妙を見る能はず。鏡に積影なし。形に觸るれば則ち照し、以て物の體に應ず。

故に能く其容を盡す。聖人の己を虚うして人に應ずるは、亦猶ほ鏡の如し。臣聞く、祝敵希聲なるも以て金石の和を諧へ、(101)鼙鼓疏擊なるも以て繁絃の契を節すと。是を以て治を経むには必ず其通を宣べ、物を圖るには恆に其會を審にす。

【大意】道小なりと雖も、理に合ふ者は棄つべからざるを言ふ。祝敵鼙鼓は音希疏なりと雖も、皆金石を和し繁絃を節す。故に政化を經營し事物を謀圖するも、亦理に合ふの事を資りて以て要會を審にすべし。

- 【九八】畜影。積影なり。
- 【九九】萬殊。殊は異なり。
- 【一〇〇】祝。樂器の名、祝は樂を始むる者、敵は樂を止むる者。
- 【一〇一】鼙鼓。鼙は小鼓なり。

臣聞く、目には音を嘗むるの察なく、耳には景を照すの神なしと。故に我に在る者すら之を己に誅めず。物に存する者は備はらんことを人に求めず。

【大意】此章は、人に周材なし。備はらんことを一人に求むべからざるを言ふ。目は聽くに堪へず、耳は視るに堪へず。同じく一人の身に在りてすら、猶ほ兼長を責めず。豈に備はらんことを人に求むべけんや。

臣聞く、身を放にして居る。體逸すれば則ち安し。口を肆にして食ふ。屬厭すれば則ち充つと。是を以て王鮪俎に登れば吞波の魚を假らず。

(102)蘭膏室に停れば、銜燭の龍を思はず。

【大意】此章は物各其所を得れば傾慕の心なきを言ふ。身を放にして居り、口を恣にして食へば、安飽して足るをなす。亦猶ほ王鮪を食ふ者は吞波の魚を求めず、蘭燈に照さるる者は燭龍の光を假らざるが如し。

臣聞く、(103)衝波安流すれば則ち龍舟も以て漂ふ能はず。(104)震風洞發すれば則ち夏屋も時ありて傾く。何となれば則ち動に牽かるれば則ち靜凝み、靜に係れば則ち動貞しければなり。是を以て淫風大に行はるれば貞女も(105)冶容の誨を蒙り、淳化殷に流るれば盜跖も

- 【一〇二】屬厭。満足すること。
- 【一〇三】王鮪。魚の名。
- 【一〇四】蘭膏。蘭香を以て練りし膏、燈火に用ふ。
- 【一〇五】銜燭の龍。北方に巨なき國あり、龍あり燭を銜んでこれを照す、これを燭龍といふ。
- 【一〇六】衝波。大波なり。
- 【一〇七】龍舟。龍を畫ける舟。
- 【一〇八】震風。大風なり。洞發。洞は疾なり。
- 【一〇九】夏屋。大屋なり。
- 【一一〇】冶容。淫姿なり。

【大意】 曾史の情を挾む。

【大意】 人常性なし。善惡ただ化に在り。舟もと漂蕩すれども風靜なれば則ち安し。屋もと堅正なれども風漂せば則ち傾く。猶ほ貞女の淫風に因りて倡蕩し、大盜も淳化に遇ひて廉潔なるが如し。

臣聞く、達の 服する所、貴或は遺つるあり。窮の接する所、賤にして必ず尋ぬと。是を以て 江漢の君は其の履を墜すを悲み、 少原の婦は其の簪を亡ふを哭す。

【大意】 此章は故舊を忘るべからざるを言ふ。

人達する時貧賤の交を棄つるあり。永く窮賤の交を持続するあり。楚王の悲、少原の哭は、蓋し澆俗を激厲するなり。

臣聞く、觸其類にあらざれば疾しと雖も應せず。感其方を以てすれば微なりと雖も則ち順ふと。是を以て 商飈山を漂せども盈尺の雲を興さず。 谷風條に乗れば必ず 彌天の潤を降す。故に治に闇き者は唱繁くして和寡く、物に審なる者は力約にして功峻し。

【二】曾史。曾子、史魚、俱に廉潔の士。
【三】服。用なり。
【三】江漢の君。楚王なり、楚は江漢の畔に在ればなり、楚の昭王戰敗れて走り其履を亡ふ、已に行くと三十歩、還りて之を取る、左右曰く、大王何ぞ此を惜むと、昭王曰く、吾之と偕に出で之と偕に返らざるを悲むと、是に於て楚俗相棄つる者なし。
【二四】少原の婦。韓詩外傳に、孔子少原の野に遊ぶ、婦人あり哭すること甚し、孔子之を問ふ、婦人曰く、嚮に著薪を刈り吾が簪を亡ふ、是を以て哀む、簪を亡ふを傷むにあらす、吾が悲む所以の者は故を忘れざるなりとあり。
【二五】商飈。秋風なり。
【二六】谷風。東風なり。
【二七】彌天。天に互ること。

【大意】 君暴虐の政を行へば百姓を懐くる能はざるを言ふ。秋風山を吹くも雲を興す能はず。疾しと雖も應せざればなり。東風枝を動かせば必ず雨を降らす。微なれども順なればなり。亦猶ほ闇君は法繁きも人従はず、明君は事約なるも功多きが如し。

臣聞く、煙は火より出づれども火の和にあらす。情は性より生ずれども性の適にあらす。故に火壯なれば則ち煙微に、性充つれば則ち情約なりと。是を以て殷墟物に感ずるの悲あり。周京 佇立の跡なし。

【大意】 情欲縦なれば必ず身を喪し國を亡すを言ふ。夫れ煙は火より生じ、欲は性より生ずるも、火順なれば煙滅え、性充つれば欲寡し。微子の殷墟を過ぎて麥秀の悲を歌ひ、周の大夫周京を過ぎて黍離の嘆を發せしは、殷周二王の情欲を縦にせるに因る。

【二八】一面に禾黍を生じて佇立すべき地なしとの意。
【二九】綴。いぐるみ、矢なり。
【三〇】賁鼓。大鼓なり。
【三一】密。閉ること。
【三二】朗笛。ほがらかなる笛の音。疏。通なり。

臣聞く、物に適するの技は俯仰を異にし、事に應ずるの器は通塞任を異にすと。是を以て鳥雲に栖めば 綴飛び、魚淵に藏るれば網沈む。 賁鼓 密なれば響を含み、 朗笛疎なれば音を吐く。 【大意】 聖人は物を枉げて己に從はしめず。故に適く所必ず通するを言ふ。聖人の心を用ふる、俯仰物に順ふ。雲に升れば綴をなし、淵に沈めば網をなし、鼓聲息めば聲を呑み、笛聲興れば聲を發す。

故に物逃るる能はずして、適くとして通せざるはなし。
臣聞く、理の守る所は勢の常に奪ふ所なり。道の閉づる所は權の必ず開く所なりと。是を以て生は利より重し。故に 圖に據りて劍を揮ふの痛なし。義は身より貴し。故に 川に臨んで跡を投ずるの哀あり。

【大意】 此章は、賢者は義を重んじて身を輕んずるを言ふ。夫れ理守るべきものあり。勢力の爲に奪はる。道閉づべきものあり。威權の爲に開かる。是を以て圖に據るの人は劍を揮つて痛まず。利の身より輕きを以てなり。川に投ずるの士死して哀むべきは、身を輕んじて義に徇へばなり。

臣聞く、變に通ずる者は用約にして利博く、其要を明にする者は器淺くして應 玄なりと。是を以て天地の曠きも 六位に該り、萬殊の曲も五絃に窮る。

【大意】 變に通ずる者は小と雖も以て大を窮むべきを言ふ。よく變要に通ずる者は、用ふる所淺約にして玄遠に通ずるを得。亦猶ほ六爻を以て萬象を該綜し、琴の五絃衆聲を總括するが如し。

【一三】 文子に。左手天下の圖に據り、右手其喉を劬ぬるは愚者も爲さざるなり、身天下より貴ければなりとあり。
【一四】 莊子に、舜天下を以て北人無擇に讓る、北人無擇曰く、異なるかな君の人となりや、其辱行を以て我を漫せんと欲す、吾之を見るを恥づと、自ら清冷の淵に投ずとあり。
【一五】 玄。遠なり。
【一六】 六位。易の六爻。

臣聞く、形を影に圖すれば未だ纖麗の容を盡さず。火を灰に察すれば洪赫の烈を視ずと。是を以て道を問ふは其人に存し、物を觀るは必ず其質に造る。

【大意】 人形を影に畫けば眞形を寫す能はず。火を灰に察すれば其赫烈を見る能はず。故に道を問ふには其人に據らざるべからず。物を觀るには實質を究めざるべからず。

臣聞く、情物に見るれば遠しと雖も猶ほ疎なり。神形に藏るるは近しと雖も則ち密なりと。是を以て天に 儀し晷を歩すれば 脩短量るべし。淵に臨んで水を探るも淺深察し難し。

【大意】 此章は事の遠きもの必ずしも知り難からず。近きもの必ずしも察し易からざるを言ふ。天體遠しと雖も法を以て推せば、疎にして知り易し。神機至つて近きも能く理契する者にあらざれば測り難し。

臣聞く、虐暑天を熏するも堅氷の寒を滅せず。涸陰地に凝るも 陵火の熱を累すなしと。是を以て 吞縦の疆も 蹈海の志を反す能はず。 漂櫓の威も 西山の節を降す能はず。

【一七】 儀。法なり。歩。推なり。
【一八】 脩短。長短なり。
【一九】 陵火。陵は原野。
【二〇】 吞縦。六國合縦して秦に對抗す、秦之を併吞す。
【二一】 蹈海。史記に、新垣衍趙に説き、秦を尊んで帝となさんとす、魯仲連曰く、秦若し肆然として帝たらば、連東海を蹈んで死するあらんのみとあり。
【二二】 漂櫓。櫓は大楫なり、武王紂を伐ちし時、流血櫓を漂せり。
【二三】 西山。首陽山なり、伯夷叔齊周に仕ふるを恥ぢ、首陽山に隠れて餓死す。

【大意】節を執る者は威力を以て屈すべからざるを言ふ。氷の性は寒し。虐暑も之を滅す能はず。火の性は熱し。凝陰も之を累す能はず。亦猶ほ秦皇の強も魯連の志を廻らす能はず、武王の威も伯夷の節を屈する能はざるが如し。

臣聞く、理の開く所は力の常に達する所なり。數の塞がる所は威必ず窮するありと。是を以て烈火金を流すも景を焚く能はず。沈寒海を凝らすも風を結ぶ能はず。

【大意】此章は理に定分あり、越ゆべからざるを言ふ。火の金を流す、寒の海を凝らすは、乃ち理開き常に達するの道なり。是を以て之を能くす。景を焚き風を結ぶに至りては、則ち數塞がり必ず窮するの義なり。是に由りて及ばざるなり。

臣聞く、性に足る者は天損も入る能はず。期に貞なる者は時累も淫する能はず。是を以て迅風、陵雨も、晨禽の察を謬らす。勁陰殺節も、寒木の心を凋まさず。

【大意】君子には、邪亂も其節を侵す能はず。亦猶ほ風雨も雞鳴を誤らしむる能はず、霜雪も松柏を凋ます能はざるが如し。

- 【一】陵雨。暴雨なり。
- 【二】晨禽。詩經に風雨晦の如きも雞鳴いて已ますとあり、君子亂世に居り其節を改めざるに喩ふ。
- 【三】寒木。松柏なり。

箴

二女史箴

張茂先

茫茫たる造化、二儀既に分れ、氣を散じ形を流き、既に陶し既に甄す。帝庖羲に在り、肇めて天人を經め、爰に夫婦を始め、以て君臣に及ぶ。家道以て正しく、王猷倫あり。

【大意】造化分れて天地を生じ、天地の氣交りて萬物を生ず。伏羲始めて天下を治め、夫婦君臣の道を立つ。是に於て家道正しくして天下定まる。

婦徳は柔を尙ぶ。章を含めば貞吉なり。婉嫕淑慎、位を正し室に居り、衿を施め襦を結び、中饋を虔恭し、爾の儀を肅慎し、式て清懿を瞻る。

- 【一】女史箴。茂先后族の盛を懼れて此篇を作る。
- 【二】二儀。天地なり。
- 【三】陶、甄。陶工の瓦器を作ること。
- 【四】帝庖羲。伏羲なり、太古の天子。
- 【五】王猷。王道なり。倫。治まること。
- 【六】章を含む。己の才智を現はさざると、此語易經に出づ。
- 【七】婉嫕。順靜なり。
- 【八】儀禮に、女嫁する時母を施め衾を結びて曰く、之を勉め之を敬ひ、父母の戒に違ふなかれとあり。襦。にほひ袋。
- 【九】中饋。酒食の事。虔恭。慎むこと。
- 【一〇】清懿。懿は美なり。
- 【一一】樊姬。楚の莊王の夫人。莊王狩獵を好む、樊姬諫むれども止めず、乃ち禽獸の肉を食はず、三年にして王改む。

姫莊を感せしめ、鮮禽を食はず。衛女桓を矯め、耳に和音を忘る。志厲
く義高うして、二主心を易ふ。玄熊檻を攀づれば、馮媛趨進す。夫れ豈
に畏るるなからんや。死を知れども恠まず。班妾辭あり、驪を同輦に割
く。夫れ豈に懷はざらんや。微を防ぎ遠を慮る。道隆なるとして殺がざるは
なく、物盛なるとして衰へざるはなし。日中すれば則ち昃き、月満つれば則ち
微く。崇は猶ほ塵の積るがごとく、替は駭機の若し。人咸其容を飾るを知り
て、其性を飾るを知るなし。性の飾らざる、或は禮正を愆る。之を斧し
之を藻し、克く念へば聖と作る。

【大意】 婦人は宜しく柔順なるべく、淑靜にして家を守り、飲饌の調理を
慎むを以て美となす。樊姫鮮肉を食はずして莊王を感動せしめ、衛姫淫樂
を聴かずして桓公を勵したるが如きは、其志厲く義高しと謂ふべし。
馮婕好熊に當りて元帝を免れしめしは君の爲に命を致して惜まず。班婕好
同輦を辭して成帝を諫めしが如き、豈に同輦の歡を懷はざらんや。微遠を
防慮すればなり。夫れ徳を興すは塵を積んで山を成すの難きが如く、徳を

【三】 衛女。齊の桓公の夫人衛
姫。桓公淫樂を好む、衛姫爲
に淫佚の聲を聴かず。

【四】 馮媛。漢書に、元帝虎園
に幸す、熊伏して圈を出づ、
馮媛好直に進んで熊に當りて
立つ、上問ふ何の故に熊に當
ると、婕好曰く、猛獸は人を
得て止む、妾御座に至らんこ
とを恐る、故に身之に當ると、
帝嗟嘆すとあり。

【五】 班妾。漢書に、成帝後庭に
遊び、班婕好と聲を同うして
乘らんと欲す、婕好辭して曰
く、妾古の聖賢の君を圖畫す
るを觀るに皆名臣側に在るあ
り。三代の末主乃ち嬖女あり、
今輦を同うせんと欲す豈に近
似するなきを得んやとあり。

【六】 斧藻。修飾なり。

敗るは機を發するの易きが如し。宜しく其性を修飾し、以て聖人とならんことを期すべし。
其言を出して善なれば、千里之に應ず。苟も斯義に違はば、則ち同衾も以て疑ふ。出言は微なるが如
きも榮辱茲に由る。幽昧と謂ふことなかれ、靈は無象に監みる。同衾。夫婦なり。
玄漠と謂ふことなかれ、神は無響に聴く。爾の榮に矜るなかれ、天道は盈を
惡む。爾の貴を恃むなかれ、隆隆たる者は墜つ。小星に鹽み、彼の
遂ぐる彼を戒めよ。心を蠡斯に比し、則ち爾の類を繁くせよ。驪は以て
躡すべからず。寵も以て專にすべからず。專なれば實に慢を生ず。愛極
まれば則ち遷る。盈を致せば必ず損す。理固より然るあり。美なる者自ら美
とすれば、翩として以て尤を取る。冶容好を求むるは、君子の讎とする所な
り。恩を結んで絶ゆるは、職として此に由る。故に曰く、翼翼矜矜たる
は、福の興る所以なり。靖恭自ら思ふは、榮顯の期する所なりと。女史は
箴を司る。敢て庶姫に告ぐ。

【大意】 又能く言を慎むべし。言は榮辱の由りて分るる所なり。暗靜の處
に在りて知る者なしとなすなかれ。神靈は形なきに視、聲なきに聴く。己の榮貴に誇るなかれ。滿つ

【一】 同衾。夫婦なり。
【二】 幽昧。暗きこと。
【三】 無象。無形なり。
【四】 玄漠。靜なり。
【五】 小星。詩經の篇名、羣妾
夫人に隨ひ次序を以て君に進
御するに喩ふ。
【六】 易經に、遂ぐる所なく、中
饋に在れば貞吉なりとあり。
【七】 蠡斯。蟲の名、べつた、
性妬忌せず、故に子孫繁多な
り、詩經に蠡斯篇あり。
【八】 躡。分に過ぐること。
【九】 翩。反對に。
【十】 翼翼矜矜。謹む貌。
【十一】 庶姫。衆妾なり。

れば缺くるは世の習なり。己の分を守り妬忌の心を棄て、我慾を遂げんとするなかれ。寵歡を專にするは、尤咎を招くの道なり。妖冶の姿を以て寵を求むるは君子の惡む所なり。恩寵の絶ゆるは皆是に因る。靖を守りて恭敬なれば榮顯必ず汝の身に及ばん。

銘

燕然山を封する銘並序

班孟堅

維れ 永元元年秋七月、有漢の元舅を車騎將軍竇憲と曰ふ。寅んで聖皇を亮け、登りて王室を翼け、大麓に納るれば惟れ清くして緝熙なり。乃ち 執金吾耿秉と述職 巡禦し、朔方に治兵す。鷹揚の校、螭虎の士、爰に 六師を該ふ。暨び南單于、東胡の烏桓、西戎の氏羌、侯王君長の羣、驍騎十萬。

- 【一】 燕然山。匈奴に在る山の名、後漢竇憲大に單于を破り、遂に此山に登り、石に刻して功を勒し、孟堅をして銘を作らしむ。
- 【二】 永元。後漢の和帝の年號。
- 【三】 有漢。有字意義なし、漢をいふ。元舅。伯父なり、竇憲は竇皇后の兄なり。
- 【四】 曰。一本に曰字なし。
- 【五】 大麓。書經に、大麓に納るれば烈風雷雨迷はずとあり、麓は録なり、大に萬機の事ヲ録せしむること。
- 【六】 緝熙。光明なり。
- 【七】 執金吾。官名。
- 【八】 朔方。北方なり。
- 【九】 鷹揚。勢の盛なる貌。校。將校なり。
- 【一〇】 六師。大軍なり。

(一) 元戎輕武、長轂四に分れ、(二) 雷輜路を蔽ふこと、萬有三千餘乘。勒するに八陣を以てし、泄むに威神を以てす。(三) 玄甲日に耀き、朱旗天に絳し。遂に(四) 高關を凌ぎ、(五) 雞鹿を下り、(六) 磧鹵を經、(七) 大漠を絶り、(八) 温禺を斬りて以て鼓に繫り、(九) 尸逐を血にして以て鏢を染む。然る後四校(一〇) 横徂し、(一一) 星流彗掃す。蕭條たる萬里、野に遺寇なし。是に於て域滅び區殫き、旃を反して旋る。傳を考へ圖を驗し、其山川を窮覽し、遂に(一二) 涿邪を躐え、(一三) 安侯を跨え、燕然に乗り、(一四) 冒頓の區落を躡み、(一五) 老上の龍庭を焚く。將に上は(一六) 高文の宿憤を攄べ、(一七) 祖宗の玄靈を光し、(一八) 下は以て後嗣を安固にし、(一九) 境宇を恢拓し、(二〇) 大漢の天聲を振はんとす。茲れ一勞して久逸し、(二一) 暫費して永寧なりと謂ふべし。乃ち遂に山を封じ石に(二二) 刊し、(二三) 昭に盛徳を銘す。其辭に曰

- 【一】 元戎。輕武。竝に兵車なり。
- 【二】 雷輜。車聲雷の如きなり。
- 【三】 玄甲。黒き甲冑。
- 【四】 高關。山の名。
- 【五】 雞鹿。山の名。
- 【六】 磧鹵。磧は磧地、鹵は鹹地。
- 【七】 大漠。砂漠。
- 【八】 温禺。匈奴君長の名號。
- 【九】 尸逐。匈奴君長の名號。
- 【一〇】 横徂。横に往く。
- 【一一】 星流彗掃。彗は帚なり、
- 【一二】 涿邪。山の名。
- 【一三】 安侯。河の名。
- 【一四】 冒頓。單于の名。區落。部落なり。
- 【一五】 老上。單于の名、冒頓の子なり。龍庭。單于の天地を祭る處。
- 【一六】 高文。漢の高祖匈奴を伐ちて平城に圍まる。文帝の時匈奴北地都尉印を殺す。
- 【一七】 玄靈。神靈なり。
- 【一八】 刊。刻なり。

【元】鏖たる王師荒裔を征し、凶虐を勦し海外を截る。【三〇】復として其れ遼く地界を互り、神丘を封じて。【三一】隆嶋を建て、【三二】帝載を照めて萬世に振ふ。【大意】我が王師絶遠の地を征伐し、以て凶虐を絶つ。乃ち燕然山を封じて豊碑を建て、帝業を萬世に傳ふ。

【元】鏖。盛美なり。荒裔。遠地なり。
【三〇】復。遙なり。
【三一】隆嶋。高碑なり。
【三二】帝載。載ば事なり。

座右の銘

崔

子玉

人の短を道ふことなかれ。己の長を説くことなかれ。人に施しては慎んで念ふなかれ。施を受けては慎んで忘るるなかれ。世譽は慕ふに足らず。唯仁を紀綱となす。心に隠りて後動く。誇議庸何ぞ傷まん。名をして實に過ぎしむるなかれ。愚を守るは聖の臧する所なり。【三】涅に在れども緇まざるを貴ぶ。【四】暖暖として内に光を含め。【五】柔弱は生の徒なり。老氏は剛彊を誡む。【六】悠悠として故に量り難し。言を慎み飲食を節し、足るを知りて不祥に勝て。之を行ひて苟も恆あら

【一】崔子玉。名は瑗、字は子玉。後漢の涿郡の人。
【二】涅。黒泥なり。緇。黒色なり。論語に、子曰く、白しといはずや、涅にすれども緇ますとあり。
【三】暖暖。暗昧の貌。
【四】柔弱。老子に、人の生くるや柔弱なり、其の死するや堅強なり、故に堅強なる者は死の徒、柔弱なる者は生の徒なりとあり。
【五】行行。剛強の貌。
【六】悠悠。禍を受くるの長遠なるをいふ。

【一】往漢。漢の末劉備ここに據りて國を立てしこと。
【二】有晉。晉鍾會に命じて蜀を平けしめしこと。實は魏の時代なれども、政晉王に由る、故に功を晉に歸せしなり。
【三】百二。秦の地險にして二萬の衆を以て百萬に敵すべし故に百二といふ。
【四】十二。齊は海の險を負ふ二萬を以て十萬に敵すべし。

ば、久久自ら芬芳あらん。

【大意】人の短を誹らず、己の長に誇らず。恩を施しては須らく忘るべし。恩を受けては忘るる勿れ。名をして實に過ぎしめず。常に謙讓を守るべし。俗に在りて染まらず。暗昧の内に光明を含め。剛強は禍を招くの本なり。言語飲食を節すべし。

劍閣の銘

張孟陽

【三】巖巖たる梁山、積石、峩峩たり。遠く、荆衡に屬り、近く、岷嶓に綴る。南は、印契に通じ、北は、褒斜に達す。狭きこと、彭碣に過ぎ、高きこと、嵩華に踰ゆ。惟れ蜀の門、固を作し鎮を作す。是を劍閣といふ。壁立千仞。地の險を窮め、路の峻を極む。世濁れば則ち逆、道清めば斯に順なり。閉づること、往漢よりし、開くこと、有晉よりす。秦は、百二を得、諸侯を并吞す。齊は、十

【一】劍閣。蜀の山の名。
【二】巖巖。積石の貌。梁山。梁山(蜀)の山。
【三】峩峩。高き貌。
【四】荆衡。二山の名。
【五】岷嶓。二山の名。
【六】印契。印は蜀の西部。契は蠻夷の名。
【七】褒斜。谷の名。
【八】彭碣。彭門、碣石の二山。
【九】嵩華。二山の名。

【一〇】往漢。漢の末劉備ここに據りて國を立てしこと。
【一一】有晉。晉鍾會に命じて蜀を平けしめしこと。實は魏の時代なれども、政晉王に由る、故に功を晉に歸せしなり。
【一二】百二。秦の地險にして二萬の衆を以て百萬に敵すべし故に百二といふ。
【一三】十二。齊は海の險を負ふ二萬を以て十萬に敵すべし。

二を得、田生籌を獻す。矧んや茲狹隘、土の外區なるをや。一人戦を荷へば、萬夫も越起す。形勝の地、親に匪れば居くこと勿れ。昔在武侯、中流にして喜ぶ。山河の固、吳起に屈せらる。興ること實に徳に在り、險も亦恃み難し。洞庭孟門、二國祀らず。古より今に迄るまで、天命易からず。阻を憑みて昏を作せば、敗績せざること鮮し。公孫既に滅び、劉氏壁を銜めり。覆車の軌、跡を重ぬる或るなかれ。銘を山阿に勒し、敢て梁益に告ぐ。

【大意】 劍閣山は蜀の關門鎮固をなし、實に天下の絶險なり。故に劉備嘗て此に據りて叛き、晉に至り始めて之を平ぐ。昔秦は百二の險に據りて六國を併吞し、田肯は齊十二の險を取らんことを勸む。此外區の險隘や、齊秦の險に勝ること甚し。故に一人關を守れば萬夫も開く能はずと稱せらる。國君の子弟親族にあらずんば此地に居らしむべからず。然れども險を恃んで亂をなせば、

- 【四】 田生。田肯なり、田肯高祖に策を獻じ齊を取らしむ。
- 【五】 越起。進み難き貌。
- 【六】 武侯。史記に、魏の武侯西河に浮んで下り、中流にして顧みて吳起に謂つて曰く、美なるかな山河の固、此れ魏國の寶なりと、吳起對へて曰く、徳に在りて險に在らず、昔三苗氏、洞庭を左にし彭蠡を右にす、禹之を滅せり、殷紂の國、孟門を左にし太行を右にす、武王之を殺せり、若し君徳を修めずんば、舟中の人
- 【七】 盡く敵國とならんと、とあり。
- 【八】 洞庭。湖の名。孟門。山の名。
- 【九】 公孫。漢の末、公孫述蜀に據りて天子と稱す、吳漢を遣し伐つて之を滅さしむ。劉氏。蜀の後主劉禪、魏の爲に伐たれ、而縛し壁を銜んで降る。
- 【一〇】 山阿。山隈なり。勒。刻なり。
- 【一一】 梁益。二州の名、蜀なり。

古來未だ滅亡を招かざる者あらず。是れ天命の常にして、公孫述、劉後主の滅びし所以なり。蜀人慎んで二氏の覆轍を踏むなかれ。因つて銘を刻して石を山隈に立て、以て蜀人に戒む。

石關の銘並序

陸 佐 公

晉在舜は 文祖に格り、禹は 神宗に至り、周は 商俗を變じ、湯は 夏政を黜く。革命は因襲に殊に、揖讓は干戈に異りと雖も、而も

- 【一】 石關。端門の外に在り、道を夾んで之を置く、其上隱起して奇獸異禽の狀あり。
- 【二】 陸佐公。名は倭、字は佐公、梁の吳郡の人。
- 【三】 文祖。舜の天命を受けて天子となりし所、書經に、帝曰く汝帝位に陟れと、正月上日終を文祖に受くとあり。格。至なり。
- 【四】 神宗。禹の天命を受けし所、書經に、帝曰く禹惟れ汝

- 諸へよと、正月朔且命を神宗に受くとあり。
- 【五】 商俗。商は殷なり、殷の風俗。殷の紂王を滅したること。
- 【六】 夏政。夏の政。夏の桀王を滅ししこと。
- 【七】 革命。易經に、湯武は革命し、天に順ひ人に應ずとあり。因襲。禪讓なり、堯位を舜に讓り、舜は禹に讓る。
- 【八】 揖讓。禪讓なり。干戈。

- 湯武の兵力を以て位を取りしこと。
- 【九】 晷緯。日星なり、日星祥瑞を呈すること。
- 【一〇】 啓悉。開導といふが如し。
- 【一一】 昏虐。齊の東昏侯天子となり暴虐なりしこと。
- 【一二】 五行。書經甘誓篇に五行を威侮し、三正を怠棄すとあり、五行は水火木金土なり。威侮は暴威を揮つて輕侮すること。三正は天地人の三正道。

明にして大に生民を庇するは、其揆一なり。齊の季に在りて 昏虐君臨し、五行を威侮し三正

を怠棄す。刑(一)然炭(二)より酷(三)しく、暴(四)膏柱(五)に踰(六)。民怨(七)み神怒(八)り、衆叛(九)き親離(一〇)る。地(一一)に踏(一二)して歸(一三)するなく、鳥(一四)を瞻(一五)るに託(一六)するなし。是(一七)に於(一八)て我が皇帝(一九)之(二〇)を拯(二一)ひ、乃(二二)ち斗極(二三)を操(二四)り、鉤(二五)陳(二六)を把(二七)り、百神(二八)を翼(二九)し萬福(三〇)を視(三一)す。是(三二)に於(三三)て黑水(三四)に龍飛(三五)し、西河(三六)に虎步(三七)し、雷動(三八)風驅(三九)し、天行(四〇)地止(四一)す。旅(四二)に命(四三)ずれば屯雲(四四)の應(四五)を致(四六)し、壇(四七)に登(四八)れば降火(四九)の祥(五〇)あり。龜筮(五一)協從(五二)し人祇(五三)響附(五四)す。智(五五)を穿(五六)ち頂(五七)を露(五八)すの豪(五九)、箕坐(六〇)椎髻(六一)の長(六二)、旗(六三)を援(六四)きて奮(六五)はんことを請(六六)ひ、銳(六七)を執(六八)りて先(六九)を争(七〇)はざるはなし。夏首(七一)固(七二)を憑(七三)み、庸岷(七四)阻(七五)を負(七六)み、彼の離心(七七)に協(七八)へ、茲(七九)の同徳(八〇)

【一】然炭。燃ゆる炭。
【二】膏柱。紂銅柱を作り膏を以て之に塗り燃炭の上に加へ罪ある者をして之に緣らしむ名けて炮烙の刑といふ。
【三】斗極。星なり、天下の法を執る所。
【四】鉤陳。星の名、兵衛の象。
【五】翼。敬なり。
【六】視。取るなり。
【七】黑水、西河。書經に、黑水西河は惟れ雍州とあり、梁の武帝雍州刺史として義兵を擧ぐ。
【八】虎步。盛に興ること。
【九】天行地止。天地に則りて行止すること。
【一〇】旅。軍衆なり、衆に誓ふこと。屯雲。漢の高祖が白蛇を斬り黒雲を屯せしめし祥瑞。
【一一】壇に登れば降火の祥あり。周の武王河を濟るとき降火。周の武王河を濟るとき
【一二】火流れて鳥となるの祥あり。
【一三】龜筮。卜占なり。人祇。祇は神なり。
【一四】西南夷の長をいふ。
【一五】箕坐椎髻。南越の風俗。
【一六】夏首。水口なり。薛天嗣の郢州に守たるを謂ふ。
【一七】庸岷。庸は國の名、岷は山の名、蜀をいふ。
【一八】離心。東昏侯をいふ。
【一九】同徳。梁の武帝をいふ。
【二〇】凶渠。賊の渠帥。
【二一】巨艦。艦は艦なり。
【二二】鐵馬。鐵甲の馬。

に抗(一)す。帝赫(二)として斯(三)に怒(四)り、馬(五)に秣(六)ひ兵(七)を訓(八)ふ。嚴鼓(九)未(一〇)だ通(一一)せざるに凶渠(一二)首(一三)を泥(一四)にす。弘舸(一五)軸(一六)を連(一七)ね、巨艦(一八)艦(一九)を接(二〇)し、鐵馬(二一)千羣(二二)、朱旗(二三)萬里(二四)、折簡(二五)して廬九(二六)を禽(二七)にし、檄(二八)を傳(二九)へて以(三〇)て湘羅(三一)を下(三二)す。兵刃(三三)に血(三四)ぬらす、士鏃(三五)を遺(三六)すなくして、樊鄧(三七)威懷(三八)し、巴黔(三九)底定(四〇)す。是(四一)に於(四二)て流湯(四三)の黨(四四)、握炭(四五)の徒(四六)、守(四七)ること藩籬(四八)に似(四九)、戰(五〇)ふこと枯朽(五一)に同(五二)じ。革車(五三)近次(五四)し、師(五五)商牧(五六)に營(五七)す。華夷(五八)の士女(五九)、冠蓋(六〇)相望(六一)み、老(六二)を扶(六三)け幼(六四)を攜(六五)へ、一旦(六六)雲集(六七)し、壺漿(六八)野(六九)に塞(七〇)ち、箪食(七一)塗(七二)に盈(七三)つ。夏民(七四)の成湯(七五)に附(七六)き、殷士(七七)の周武(七八)を窺(七九)ふに似(八〇)たり。老(八一)を安(八二)んじ少(八三)を懷(八四)け、罪(八五)を伐(八六)ち民(八七)を弔(八八)す。農業(八九)を遷(九〇)さず、市賈(九一)を易(九二)ふるなし。八方(九三)計(九四)を入れ、四隩(九五)圖(九六)を奉(九七)じ、羽檄(九八)交(九九)し、軍書(一〇〇)狎(一〇一)く至(一〇二)る。一日(一〇三)二日(一〇四)、止(一〇五)に萬機(一〇六)のみにあらず。而(一〇七)して尊嚴(一〇八)の度(一〇九)、師旅(一一〇)を偃(一一一)らず、淵默(一一二)の

【三七】折簡。策書を傳ふること。廬九。廬江、九江の二郡。
【三八】湘羅。二川の名。
【三九】樊鄧。二郡の名。威懷。威に畏れ恩に懐くこと。
【四〇】巴黔。二郡の名。底定。底は致なり。底は音ジ。
【四一】流湯握炭。東昏侯の兵なり、六韜に、紂の卒炭を握り湯を流す者十八人とあり。
【四二】藩籬。垣なり。弱きをいふ。
【四三】枯朽。摧け易きなをいふ。
【四四】革車。兵車なり。
【四五】商牧。殷郊牧野なり、周の武王衆に誓ひし地。
【四六】壺漿。壺に盛りし飲物。
【四七】孟子に、湯往いて之を征す、箪食壺漿して之を迎ふとあり。
【四八】箪食。筥に盛りし飯。
【四九】計。計簿なり。
【五〇】四隩。四方なり。
【五一】一日。書經臯陶謨篇に、兢兢業業たれ一日二日萬機とあり。

容、行陣を改むるなく、計、水に投ずるが如く、思、規を轉するが若く、策帷幄に定まり、謀、几案に成る。曾て未だ、(五) 浹辰ならざるに、(五) 獨夫首を授く。乃ち其、(五) 綵席を焚き、彼の、(五) 寶衣を棄て、(五) 璇臺の珠を歸し諸侯の玉を反す。指麾して四海隆平に、車を下りて天下大に定る。茲の塗炭を拯ひ此の横流を救ふ。功天地に均く明日月に竝ぶ。是に於て仰いで、(五) 三靈に協ひ、俯して、(五) 億兆に從ひ、(五) 昭華の玉を受け、(五) 龍敍の圖を納れ、(五) 帝を類し、(五) 宗を禮し、(五) 神器を光有し、(五) 中に升りて以て羣望を祀り、袂を攝へて、(五) 諸夏を朝せしむ。教を都畿に布き、政を、(五) 方外に班ち、謀、(五) 上

- 【五】 水に投ず。運命論に張良高祖に遭ふに及び、其言ふや石を以て水に投ずるが如く、之に逆ふなきなりとあり。
- 【五】 規を轉す。規は圓なり、圓き物を轉するが如く易きなり。
- 【五】 浹辰。十二日間をいふ。
- 【五】 獨夫。齊の東昏侯をいふ。
- 【五】 綺席。六韜に、紂の時婦人文綺を以て席となす者三千人とあり。
- 【五】 寶衣。六韜に、武王紂を伐つ、紂寶衣を蒙り火に投じて死すとあり。
- 【五】 璇臺の珠。說苑に、武王大に殷人を敗り、堂に上り玉を見て曰く、誰の玉ぞと、曰く諸侯の玉なりと、即ち取れて諸侯に歸す、天下之を開いて曰く、王財に廉なりとあり。
- 【五】 三靈。天地人なり。
- 【五】 億兆。庶民なり。
- 【五】 昭華の玉。尙書大傳に、堯、舜を得て之を尊び、昭華の玉を贈るとあり。
- 【五】 龍敍の圖。春秋元命苞に堯河渚に遊ぶ、赤龍圖を負ひ之を堯に授くとあり。
- 【五】 帝。天帝なり。類。祭ること。
- 【五】 宗。六宗なり。禮は祭ること、書經舜典に、六宗を禋すとあり。
- 【五】 神器。皇位なり。光有。光は大なり。
- 【五】 中。中岳嵩山なり。羣望。山川を祀ること。
- 【五】 諸夏。中國なり。
- 【五】 方外。四夷なり。
- 【五】 上策。戦はずして敵を降すをいふ。

策に協ひ、刑、(五) 中典に從ふ。南は、(五) 緩耳を服し、(五) 西は、(五) 反舌を騎し、(五) 劔騎穹廬の國、(五) 同川共穴の人、膝を屈し臂を交へ、(五) 厥角稽顙せざるはなく、(五) 萬里を、(五) 鑿空し、(五) 千都に攘地し、(五) 幕南鞞を罷め、河西警なし。是に於て治定り功成り、邇は安く遠は肅み、茲の、(五) 鹿駭を忘れ、此の、(五) 狼顧を息む、乃ち、(五) 願を息む、乃ち、(五) 六樂を正し、(五) 五禮を治め、(五) 章程を改め法律を創め、博士の職を置いて著録の生雲の若く、集雅の館を開いて、(五) 款關の學市の如し。、(五) 庠序を興建し、(五) 郊丘を啓設し、(五) 一介の才も必ず記し、(五) 無文の典も咸く秩づ。是に於て天下の學士、靡然として風に向ひ、人々、(五) 廉隅を識り、家々禮讓を知り、教、(五) 侍子に臻り、化、(五) 期門に洽く、(五) 區宇又安にし

- 【六】 中典。周禮に、大司寇は三典を掌る、平國を刑するには中典を用ふとあり。
- 【七】 緩耳。遠國の名。
- 【七】 反舌。前に同じ。
- 【七】 劔騎穹廬。匈奴なり。
- 【七】 同川共穴。遠國の名。
- 【七】 厥角。叩頭なり。稽顙。拜伏なり。
- 【七】 鑿空。開通なり。
- 【七】 千都。千城なり。攘地。地を拓くこと。
- 【七】 幕南。沙漠の南。鞞。小城なり。
- 【七】 鹿駭。鹿の如く驚くこと、騷擾なり。
- 【七】 狼顧。狼の如く顧疑すること、不安なり。
- 【八】 六樂。六代の樂、雲門、大咸、大韶、大夏、大護、大武、五禮。吉凶軍賓嘉の禮。
- 【八】 章程。制度なり。
- 【八】 款關。款は叩なり、關門を叩いて來り學ぶこと。
- 【八】 郊丘。天地を祭る所。
- 【八】 一介の才。小才なり。
- 【八】 無文の典。未だ成文とならざりし法度。
- 【八】 廉隅。廉潔なり。
- 【八】 侍子。諸蕃の子にして來りて天子に侍する者。
- 【八】 期門。守衛の士。
- 【八】 區宇。天下なり。又安。治まり安し。

て、方面静息し、役休み務簡に、歳阜に民和ぎ、歴代の規、前王の典故、芟夷翦截して允に厥中を執らざるなし。以爲らく象闕の制、其の來る已に遠し。春秋に舊章の教を設け、經禮に布憲の文を垂れ、戴記に遊觀の言を顯し、周史に樹闕の夢を書すと。(一〇) 北荒の明月、西極の流精、(一〇) 海岳の黄金、(一〇) 河庭の紫貝、(一〇) 蒼龍玄武の制、(一〇) 銅爵鐵鳳の工、或は以て窮を聽き冤を省み、

- 【九三】規。法則なり。
- 【九四】象闕。周禮に、太宰は正月の吉を以て治象の法を象魏に懸け、萬人をして治象を觀しむとあり、鄭玄註に吉は朔日なり、象魏は闕なりとあり。
- 【九五】經禮。周禮なり。周禮に、布憲は中士二人とあり。
- 【九六】戴記。禮記なり。禮記禮運篇に、昔仲尼蜡賓に與り、事畢り出でて觀の上に遊び、喟然として歎すとあり。
- 【九七】周史。周書に、文王商より至る、太妃夢に商庭に棘を生じ、太子發周庭の梓を取りて之を闕の間に樹う、化して松栢となるとあり。
- 【九八】北荒。神異經に、西北荒の中に二金闕あり、二闕相去る百丈、上に明月の珠あり、光千里を照すとあり。
- 【九九】西極。十洲記に、崑崙山に三角あり、其一角の正東に墟城あり、流精の闕あり、西王母の治する所なりとあり。
- 【一〇〇】海岳。蓬萊山なり、山に黄金白銀の闕あり。
- 【一〇一】河庭。河伯の居る所、紫貝を以て闕となす。
- 【一〇二】蒼龍。未央宮の東に蒼龍闕あり、北に玄武闕あり。
- 【一〇三】銅爵。爵は雀に同じ、長安城の西に雙圓闕あり、上に一雙の銅雀あり。鐵鳳。西京賦註に、圓闕の上に鐵鳳凰を作り兩翼を張らしむとあり。
- 【一〇四】浸弱。微減なり。
- 【一〇五】宋歷。歷は曆に同じ、宋代をいふ。威夷。微弱なり。
- 【一〇六】鴻規。大法なり。盛烈。大業なり。

或は以て治を布き法を懸け、或は以て王居を表正し、或は以て帝里を光崇す。晉氏浸弱し、宋歴威夷し、禮經舊典、寂寥として記することなく、鴻規盛烈、湮沒して稱すること罕なり。乃ち天闕

を牛頭に假り、遠圖を博望に託するも、耳目を欺くありて、憲章を補ふなし。乃ち審曲の官に命じ、(一〇) 明中の士を選び、(一〇) 圭を陳ね(一〇) 臬を置き、星を瞻地を揆り、表門を興復し、華闕を草創す。是に於て(一〇) 歲天紀に次り、(一〇) 太簇に旅る。皇帝天下を御するの(一〇) 七載なり。茲(一〇) 盛則を構へ、此(一〇) 崇麗を興し、方に且つ趨つて以て敬を表し、觀て法を知らしむ。(一〇) 物雙碣の容を觀、人(一〇) 百重の典を識る。範を作り訓を垂る、赫なる矣壯なる乎。爰(一〇) 下臣に命じ、式て(一〇) 盤石に銘せしむ。(一〇) 辭に曰く、

惟れ帝國を建て、位を正し方を辨ず。周は洛澹を營み、漢は岐梁を啓く。居は業に因りて盛に、文は化を以て光る。爰に象闕あり、是れ惟舊章。青蓋南に泊び、黃旗東を指す。懸法

- 【一〇六】牛頭。晉牛頭山の兩峰を以て天闕となす。
- 【一〇七】博望。宋雙闕を博望、梁山に立つ。
- 【一〇八】審曲。曲面の勢を審にすること。
- 【一〇九】明中。四時昏明の中星を明にすること。日入りて後三刻を昏となし、日出づる前三刻を明となす。
- 【一一〇】圭。日影を測る器。
- 【一一一】臬。水準器。
- 【一一二】草創。創建なり。
- 【一一三】歲。歳星なり。天紀。星紀なり。
- 【一一四】太簇。正月の律なり。
- 【一一五】七載。七年なり。梁の天
- 【一一六】漢七年正月なりとの意。
- 【一一七】盛則。闕をいふ。
- 【一一八】崇麗。闕をいふ。
- 【一一九】物。人なり。雙碣。石闕なり。
- 【一二〇】百重。百代なり。典。常法なり。
- 【一二一】下臣。佐公自ら請ふ。
- 【一二二】盤石。大石なり。
- 【一二三】洛澹。洛邑なり。
- 【一二四】岐梁。雍州なり。
- 【一二五】青蓋。晉をいふ。
- 【一二六】黃旗。吳をいふ。
- 【一二七】懸法。周禮に、正月乃ち治象の法を象魏に懸け、萬民をして治象を觀しめ、決日にして之を斂むとあり。

聞ゆるなく、(一七)藏書紀せず。(一八)大人造物、龍徳(一九)否を休む。此(二〇)百常を建て、茲(二一)雙起を興す。偉なる哉(二二)偃蹇たり、壯なる矣(二三)巍巍たり。旁(二四)重疊に映じ、上(二五)翠微に連る。布教方に顯れ、(二六)浹日初めて輝く。(二七)懸書附くあり、(二八)委儀歸を知る。(二九)鬱岷たる重軒、(三〇)穹隆たる反宇、形(三一)飛棟より聳え、勢(三二)浮柱に超ゆ。色(三三)上圓に法り、制(三四)下矩に模る。周(三五)原隰を望み、俛して煙雨に臨む。前は(三六)四會に賓り、却是(三七)九房に背き、北(三八)二轍に通じ、南(三九)五方に溱る。暑來り寒往き、地久しく天長し。神なる哉(四〇)華觀、永く(四一)無疆に配す。

- 【一七】藏書、懸法を斂めて之を藏すること。
- 【一八】大人。梁の武帝を指す。造物。造物者即ち天道なり。
- 【一九】否。亂なり。
- 【二〇】百常。闕の名。
- 【二一】雙起。雙闕なり。
- 【二二】偃蹇。高大の貌。
- 【二三】巍巍。壯大の貌。
- 【二四】重疊。宮觀の多きをいふ。
- 【二五】翠微。天邊の氣。
- 【二六】浹日。十日間をいふ。
- 【二七】懸書。即ち懸法。
- 【二八】委儀。即ち藏書。
- 【二九】鬱岷。壯大の貌。
- 【三〇】穹隆。丸天井なり。反宇。屋根のそりかへりたること。
- 【三一】飛棟。高き棟。
- 【三二】浮柱。空に浮べる柱。甘泉賦に、浮柱の飛榦を抗ぐとあり。
- 【三三】上圓。天なり。天の形は圓し。
- 【三四】下矩。地なり。地の形は方なり。
- 【三五】原隰。原野なり。
- 【三六】四會。道路なり。
- 【三七】九房。明堂なり。東京賦に、複廟重屋八達九房は則ち明堂の制なりとあり。
- 【三八】華觀。華麗なる石闕。
- 【三九】無疆。無窮なり。

都すと雖も、未だ門闕を立つるに暇あらず。乃ち法懸くる所なく、書藏する所なし。梁の武帝、其徳天に同じ、克く龍徳を以て否亂を息め、乃ち此石闕を立て、宮觀の間に交りて高く天上に聳ゆ。是に於てか始めて法を懸け書を藏する所を得たり。其制天地に模り、前は道路に接し、後は明堂を控へ、北は二轍に通じ、南は五方に至る。ああ此闕永く天地と無窮に存せん。

新漏刻の銘並序

陸佐公

- 【一】新漏刻。漏刻とは水時計なり。
- 【二】象。天文なり。
- 【三】昏旦。天文を觀測するに昏明に於てす、日入りて後三刻を昏といひ、日出づる前三刻を明といふ。
- 【四】歷。曆なり。
- 【五】盈縮。日の長短なり。准法なり。
- 【六】挈壺。周禮に、挈壺氏を置き漏刻を掌らしむ。
- 【七】司歷。曆を主る官。
- 【八】疇人。家業世々相傳ふる人をいふ。
- 【九】孟陬。正月なり。殄滅。
- 【一〇】攝提。星の名。紀なしとは事實に乖ふこと。
- 【一一】衛宏。漢舊儀を著して曰く、夜漏起れば衛士傳呼して火に備ふと。

るも、較へて未だ詳ならず。(三) 霍融分至の差を殺するも、詳にして密ならず。(三) 陸機の賦、虚しく靈珠を握り、(四) 孫綽の銘、空しく崑玉を擅にす。(五) 弘度の遺篇、(六) 承天の垂旨、(七) 方冊に布在するも、器用に彰るるなし。彼の(八) 春華に譬へ、夫の(九) 海棗に同じ。寧ぞ以て物を軌し民を字ひ、範を作り訓を垂るべき者ならんや。且つ今の官漏は、(一〇) 會稽より出づ。水を積むこと方に違ひ、流を導くこと則に乖き、(一一) 六日辨するなく、(一二) 五行分れず。歳(一三) 閹茂に躔り、月(一四) 姑洗に次る。(一五) 皇帝(一六) 天下を有つもの(一七) 五載、樂夏諺を遷し、禮(一八) 商俗を變へ、業(一九) 補天に類し、功(二〇) 柱地に均し。河海(二一) 夷晏にして、風雲(二二) 律呂あり。

【三】 霍融。漢の太史令たり、上言す時日の差二刻半を失ふ夏曆の密なるに如かずと。
【四】 陸機。漏刻の賦を作る。靈珠。玉なり、徒に文章の美なるをいふ。
【五】 孫綽。漏刻の銘を作る。崑玉。崑山の玉。
【六】 弘度。李充、字は弘度、漏刻の銘を著す。
【七】 承天。何承天なり、宋の人、曆日に明なり。垂旨。遺意といふが如し。
【八】 方冊。史書なり。
【九】 春華。美しきのみにて實なきこと。
【一〇】 海棗。晏子春秋に、東海の中に棗あり、華ありて實なしとあり。
【一一】 會稽。郡の名、梁の舊漏は咸和七年、會稽山陰の令魏

丕の造る所なり。
【二】 六日。淮南子天文訓に、歳遷ること六日、終りて復た始まるとあり、註に今年子を以て冬至なれば、後年午を以て冬至となるとあり。
【三】 五行。五夜なり、甲乙丙丁戊に分つ。分れずとは分明ならざること。
【四】 閹茂。大茂戌に在るをいふ。戌の年。
【五】 姑洗。季春の月をいふ。
【六】 皇帝。梁の武帝。
【七】 五載。五年なり。
【八】 商俗。殷の制。
【九】 補天。昔女媧氏の五色の石を煉りて天を補ひしこと。
【一〇】 柱地。地に柱を立てて支へしこと。
【一一】 夷晏。平靜なり。
【一二】 律呂。音樂の調子。律呂

朝に坐し晏く罷め、毎日晨に興く。(三) 傳漏の音に屬し、(四) 雞人の響を聴き、以爲らく(五) 星火中を謬り、(六) 金水用に違ひ、時(七) 啓閉に乖き、(八) 箭錙を異にすと。爰に日官に命じ、(九) 新器を(一〇) 草創せしむ。是に於て(一一) 俯察旁羅し、(一二) 臺に登り、(一三) 庫に升り、(一四) 地四に則り、(一五) 參するに天一を以てす。(一六) 建武の遺壺、(一七) 咸和の餘舛、(一八) 金筒方員の制、(一九) 飛流吐納の規、(二〇) 律を變じ經を改め、一に皆懲革す。(二一) 天監六年、太歲丁亥、十月丁亥朔、十六日壬寅、漏成りて(二二) 進御す。以て辰を考へ晷を正し、表を測り陰を候ひ、(二三) 圭撮を謬らず、(二四) 黍累を乖くなし。又以て運算の(二五) 際合を校へ、分天の邪正を辨じ、(二六) 四氣の盈虚を察し、

に協ふこと。
【三】 傳漏。時刻を報すること。
【四】 屬は耳を屬すること。
【五】 雞人。夜明けを告ぐることを掌る役人。
【六】 星火。火星なり。中。昏に正南に出ること。
【七】 金水。漏は金壺と水とより成る。
【八】 箭。啓閉。開閉なり。
【九】 箭。刻を指す標なり。錙。微細なること。
【一〇】 草創。新に造ること。
【一一】 俯察。易經に仰いで以て天文を觀、俯して以て地理を察すとあり。旁羅。史記に黃帝旁く日月星辰を羅めとあり。
【一二】 臺。天文臺なり。
【一三】 庫。臺の類なり。
【一四】 地四云。漢書に、天以一を得、水を生ず、地以て

四を得、金を生ずとあり、金を以て壺となし、漏すに水を以てし、相參へて之を用ふるをいふ。
【三】 建武。後漢の光武帝の年號。
【四】 咸和。晉の成帝の年號。餘舛。今日までの差誤。
【五】 金筒方員。金は壺をいふ、壺の形は方、筒は水を引く者にして其形圓なり。
【六】 飛流吐納。漏の口より納れ胸より吐いて水を流すこと。
【七】 律。法なり。經。常なり。
【八】 天監。梁の武帝の年號。
【九】 進御。天子に進むること。
【一〇】 圭撮。六粟を圭といひ、四圭を撮といふ。
【一一】 黍累。十黍を一累となす。
【一二】 際合。離合なり。
【一三】 四氣。四時の氣。

【五】六歴の疎密を課し、永世に則を貽し、之を無窮に傳ふべし。赫たる矣煥たる乎、徳として稱するなきなり。昔嘉量の微物、盤孟の小器も、猶ほ其れ徳を昭にし功を記し、載せて銘典に在り。況んや入神の制、造化と符を合せ、成物の能、坤元と契を等うし、勳極席に倍し、事巾机に百なるをや。寧ぞ會水に多謝し、昆吾より陋なるあり、金字傳へず、銀書未だ勅せざる者ならしむべけんや。乃ち小臣に詔して其銘を爲らしむ。曰く、一暑一寒、明あり晦あり。神道跡なし、天工代ること罕なり。乃ち挈壺を置き、是れ惟れ載を熙む。氣衡石より均しく、晷權槩より正し。世道交喪し、禮術銷亡し、水火を遽遷し、衣裳を爭倒し、擊刁次を舛ひ、叢木方に乖く。爰に究め爰に度る、時れ惟れ我が皇、方壺外に次で、

- 【五】六歴。黄帝、顓頊、夏、殷、周、魯の曆。課。考ふること。
- 【五】嘉量。よきばかり。周禮に栗氏量を爲る、其銘に曰く、嘉量既に成り、以て四國に觀すとあり。
- 【五】盤孟。皿なり、昔黄帝の史孔甲、盤孟に書して戒となす。
- 【五】坤元。地なり。
- 【五】極席。周の武王の時、太公望極席の銘を作る。
- 【五】巾机。黄帝に巾机の銘あり。百。百倍すること。
- 【六】曾水。川の名、漢、鼎を其中より得たり。多謝。劣ること。
- 【六】昆吾。山の名、夏啓、鼎を鑄し處。
- 【六】金字、銀書。碑銘を作ること。
- 【六】小臣。佐公自ら謂ふ。
- 【六】衡石。ばかり。
- 【六】權槩。とかき、樹の上を平にする棒。
- 【六】水火。挈壺氏水火を守ること宜しきを失ふないふ。
- 【六】衣裳。詩經に、東方未だ明けざるに、衣裳を顛倒すあり、明暗の時節を失ふを刺るなり。
- 【六】擊刁。刁斗を撃つて夜を警むること。
- 【六】叢木。拍子木を打つて夜を守ること。

圓流内に襲ね、洪殺等を殊にし、高卑級を異にし、靈虬承注し、陰蟲吐噓し、倏ち往き忽ち來り、鬼出神入し、微なること抽繭の若く、逝くこと激電の如く、耳音を輟めず、眼眇を留むるなし。銅史刻を司り、金徒箭を抱く。薄を履めども兢るるにあらす、深に臨めども戦くなく、授受譽なく、登降爽はず。唯れ精唯一、法るべく象るべし。月來を知らず、日往を藏すなし。分は符契に似たり、至猶ほ影響のごとし。合昏暮に卷き、冀莢晨に生ずるも、尙ほ天意を辨じ、猶ほ地情を測る。況んや我が神造、幽に通じ靈を洞し、皇に配し、極に等しく、世の爲に程を作すをや。

- 【七】洪殺。大小なり。
- 【七】靈虬。龍なり。承注。水を受けて之を注ぐこと。
- 【七】陰蟲。蝦蟇なり。吐噓。吐吸なり。
- 【七】銅史。銅に鑄たる人形。
- 【七】金徒。金にて鑄たる人形。
- 【七】薄を履む。詩經に、戰戰兢兢として、深淵に臨むが如く、薄水を履むが如しとあり。
- 【六】授受。時を報ずること。
- 【七】登降。百官の升降。
- 【七】分。春分秋分なり。
- 【七】至。夏至冬至なり。
- 【八】合昏。權なり、其葉晨に舒びて昏に合ふ。
- 【八】冀莢。瑞草なり、堯の天子たりし時庭に生ず、每晨一葉を生じて十五日に至り、十五日後は每晨一葉を落す、以て晦朔を知るべし。
- 【八】皇。天なり。
- 【八】極。北極星なり。
- 【八】程。法度なり。

【大意】寒來り暑往き、或は明或は暗、天道の神妙なること人力の代る能はざる所なり。昔挈壺の官を置き、漏刻を作りて時を掌らしめ、氣平に晷正しく、微しも舛差あるなし。其後世亂れて禮術亡滅し、時刻を司るの官廢す。我が武帝乃ち考究して漏刻を作る。壺を方にし筒を圓にし、水を

其中に流通し、大小高低各等を異にし、龍をして水を承注せしめ、蝦蟇をして之を吐吸せしめ、其の流動すること鬼神の如く、其の微なること繭絲の如く、疾なること激電の如く、金銅人を鑄て之を壺の左右に置く。壺を掌るの人差失あらんことを懼れ、薄氷を履み深淵に臨むが如く、時の授受、升降の節少しも差はず。日月の度數、遁隱することなし。彼の權や莫莢や、猶ほ天地晝夜の情を知るに足る。況んや我が皇造る所の漏壺、萬世の標準となすに足るをや。

誄上

王仲宣の誄並序

曹子建

建安二十二年正月二十四日戊申、魏の故侍中、關内侯王君卒す。嗚呼哀しい哉。皇穹神察せよ。詰人は是れ恃む。如何ぞ靈祇、我が吉士を殲す。誰か痛ましからずと謂はん、早世にして冥に即く。誰か傷ましからずと謂は

- 【一】王仲宣。王粲、字仲宣、魏に仕へて侍中に累官す、建安七子の一。誄。死者を哀む文なり。
- 【二】建安。後漢の獻帝の年號。
- 【三】關内侯。爵なり、漢書百官表注に、侯號ありて京畿に居り國邑なきなりとあり。
- 【四】皇穹。天なり。
- 【五】詰人。詰は哲に同じ、王仲宣を指す。
- 【六】靈祇。神祇なり。
- 【七】吉士。善良なる人、仲宣を指す。

ん、華繁くして中ごろ零つ。存亡流を分つも、民の思ふ所なり。何を用てか徳を誄せん、之を素旗に表す。何を以てか終に贈らん、哀以て之を送る。遂に誄を作りて曰く、猗歟侍中、遠祖彌芳し。公高業を建て、武を佐け。商を伐つ。爵齊魯に同じ。邦祀絶亡す。流裔畢萬、勳績惟れ光る。晉獻封を賜ふ。魏の疆に。天之が祚を開き、末胄王と稱す。厥姓、斯氏、條分葉散す。世芳烈を滋くし、聲を秦漢に揚ぐ。陽九に會遭し、炎光中ごろ矜し。世祖亂を撥め、爰に時雍を建つ。三台位を樹て、道を履んで是に鍾る。寵爵の加はる、恵にあらす惟れ恭。君が二祖より、光をなし。龍をなす。僉曰く休い哉、宜しく漢邦を翼くべしと。或は太尉を統べ、或は司空

- 【八】天遂。遂は壽なり、天と壽と終に同じく死に歸する也。
- 【九】朝に云云。論語に、朝に道を聞いて夕に死するも可なりとあり。
- 【一〇】先民。古人なり。
- 【一一】素旗。白旗なり、銘旗也。
- 【一二】公高。王仲宣の遠祖畢公高、もと周と同姓なり、武王を佐けて紂を伐ち、功を以て畢に封ぜらる。
- 【一三】商。殷なり。
- 【一四】流裔。後裔なり。
- 【一五】晉獻。晉の獻公。
- 【一六】末胄。後裔なり。
- 【一七】斯氏。王氏なり。
- 【一八】條分葉散。條は枝なり、
- 【一九】陽九。災厄なり。
- 【二〇】炎光。漢の威力なり、漢は火徳なり、故に炎といふ。
- 【二一】世祖。後漢の光武帝。
- 【二二】時雍。太平也、書經に、黎民ああ變り時れ雍ぐとあり。
- 【二三】三台。三公の位をいふ。
- 【二四】二祖。仲宣の曾祖龔、祖暢皆後漢に仕へて三公となる。
- 【二五】龍。寵なり。
- 【二六】太尉。官名、三公の一、王龔順帝の時太尉となる。
- 【二七】司空。官名、三公の一、王暢靈帝の時司空となる。

を掌る。百揆是れ敍で、五典克く従ふ。天靜に人和し、皇教遐く通ず。伊れ君の顯考、奕葉時を佐く。入りて機密を管すれば、朝政以て治まり、出でて朔岱に臨めば、庶績咸熙まる。君淑懿を以て、此洪基を繼ぐ。

【大意】美なるかな仲宣の遠祖や。畢公高周の武王を佐けて殷を伐ち、功を以て畢に封せられ、爵を齊、魯に同うす。後其國亡絶せしも、畢萬に至り晉の獻公に事へて魏に封せられ、其後數世を歴て遂に王と稱す。子孫因つて氏とす。王氏の聲名を秦漢に揚げし者少からず。後漢に至りて王龔、王暢父子共に三公となり、一は太尉に任せられ、一は司空に任せられ、皆治績の觀るべきあり。王謙其後を嗣ぎ、入りては機密に參し、出でては朔岱に守たり。謙は即ち仲宣の父なり。既に令徳あり、材技廣宣す。彊記洽聞、微言を幽讚す。文は春華の若く、思は涌泉の若し。言を發すれば詠すべく、筆を下せば篇を成す。何の道か洽はざらん、何の藝か閑はざらん。棋局巧を逞うし、博奕惟れ賢

【二八】百揆。百官を司る官、書經舜典に、百揆に納るれば百揆時れ敍づとあり。
【二九】五典。親義別序信の五倫をいふ、書經舜典に、慎んで五典を徵くせしむれば五典克く従ふとあり。
【三〇】顯考。顯は明顯なり、考は父なり、仲宣の父謙、大將軍何進の長史となる。
【三一】奕葉。代代、父祖に繼ぎて。
【三二】朔岱。岱郡太守となりしこと。
【三三】庶績。多くの功績。
【三四】淑懿。善美の材。
【三五】令徳。美德なり。
【三六】微言。先聖の書なり。幽讚。深く明にすること。
【三七】棋局。碁盤なり。碁に巧なるをいふ。
【三八】博奕。雙六の類の技。

なり。皇家造らず、京室隕顛す。宰臣制を專にし、帝用て西遷す。君乃ち羈旅、此阻艱に離ふ。翕然として鳳舉し、遠く荆蠻に竄る。身は窮すれども志は達し、居は鄙しけれども行は鮮し。冠を南嶽に振ひ、纓を清川に濯ひ、蓬室に潜處し、勢權を干めず。我が公鉞を奮ひ、威を南楚に耀す。荆人違ふ或り、我を陳ね武を講ず。君乃ち義發し、我が師旅を算す。霸功を高尙なりとし、身を帝宇に投ず。斯言既に發し、謀夫是れ與す。是れ與する伊れ何ぞ、我が明徳に響ふ。戈を編都に投じ、漢北に稽顙す。我が公寔れ嘉し、京國に表揚す。金龜紫綬、以て勳則を彰す。勳則伊れ何ぞ、勞謙已むなし。世を憂へ家を忘れ、殊略卓峙す。

【大意】仲宣美德材藝あり。博聞強記にして文章に妙に、奕棋の小道に至るまで長達せざるはなし。

- 【三九】皇家。漢室なり、漢室の振はざること。
- 【四〇】京室。京師、即ち洛陽。
- 【四一】宰臣。董卓を指す。
- 【四二】帝。後漢の獻帝。西遷。長安に遷りしこと。
- 【四三】羈旅。寄客たること。
- 【四四】翕然。鳳の飛ぶ貌。
- 【四五】荆蠻。荆州に往き劉表に依りしこと。
- 【四六】南嶽。衡山なり、荆州に在り。
- 【四七】纓。冠の紐。清川。長江なり、亦荆州に在り。
- 【四八】蓬室。茅屋なり。
- 【四九】我が公。魏の武帝曹操。
- 【五〇】南楚。荆州なり。
- 【五一】戎。兵なり。
- 【五二】師旅云云。魏兵の強盛なるを知ることを。
- 【五三】霸功。曹操の功。
- 【五四】帝宇。漢室なり。
- 【五五】斯言。劉表の子琮に降を勧めしこと。
- 【五六】編都。縣の名。
- 【五七】勞謙。易經に、勞謙、君子終あり吉とあり。
- 【五八】殊略。特出せる材略。

董卓の洛陽を燒き、獻帝に迫りて都を長安に遷すや、仲宣乃ち京師の擾亂を避けて荊州に走り、劉表に依る。時に我が太祖(曹操)兵を率ゐて荊州を討つ。仲宣太祖の強盛なるを知り、表の子琮に勸めて之に降らしめ、仲宣亦自ら漢に歸す。太祖乃ち擧げて丞相の掾となし、爵關内侯を賜ひ、以て其功を彰す。

乃ち(五)祭酒に署せられ、軍と行止す。算遺策なく、畫失理なし。我が王國を建て、(六)百司僑父なり。君以て顯舉せられ、機を(七)省闈に乗る。(八)蟬を戴き貂を珥み、(九)朱衣皓帶し、入りては帷幄に侍し、出でては(一〇)華蓋を擁す。當世に榮耀し、芳風(一一)唵藹たり。嗟彼の(一二)東夷、江に憑り湖を阻て、邊境を騷擾し、我が師徒を勞す。(一三)光光たる戎路、(一四)霆駭風徂す。君華轂に侍し、(一五)王塗に輝輝たり。榮を思ひて懷附し、彼の(一六)來威を望む。如何ぞ濟らざる、運極り命衰へ、疾に寝ねて彌留し、吉往き凶歸る。嗚呼哀しい哉。

【大意】太祖又仲宣を以て軍謀祭酒となし、與に軍中に行止せしむ。計策

- 【五】祭酒。官名。署。任命する意。
- 【六】我が王。曹操なり、天子曹操の爵を進めて魏王となし、百官を置かしむ。
- 【七】百司。百官なり。僑父。俊傑なり。
- 【八】省闈。宮門なり。
- 【九】蟬貂。侍中は冠に貂と蟬とを附く。
- 【一〇】朱衣皓帶。侍中の服なり。
- 【一一】華蓋。魏王の車蓋。
- 【一二】唵藹。盛なる貌。
- 【一三】東夷。吳を指す。
- 【一四】光光。武き貌。戎路。路は略に同じ、兵車なり。
- 【一五】霆駭風徂。風雷の如く疾く行くこと。
- 【一六】王塗。塗は途なり。
- 【一七】來威。來り服すること。

皆中る。其後天子太祖を進めて魏王となし、百官を置かしむるや、仲宣侍中に任せられ、毎に太祖に侍す。吳の險阻を恃んで邊境を擾すや、太祖之を征し、仲宣從ふ。竊に吳の來降せんことを期せしも仲宣路に病み、志を齎して卒す。哀しい哉。

翩翩たる孤嗣、號慟崩摧す。軫を北魏に發し、遠く南淮に迄る。山河を経歴し、泣涕頽るるが如し。哀風感を興し、行雲徘徊す。游魚浪を失ひ、歸鳥栖を忘る。嗚呼哀しい哉。

【大意】遺孤之を聞いて慟哭し、車に駕して魏都を發し、南淮に至りて喪を迎ふ。風雲哀感の感を起し、魚鳥の淵巢を失へるが如し。

吾夫子と、義(七)丹青に貫ぎ、好琴瑟より和し、分(八)友生に過ぐ。庶幾くは(九)退年、手を攜へて同じく征かんことを。如何ぞ(一〇)奄忽に、我を棄てて(一一)夙く零ちたる。感ず昔宴會せしとき、志(一二)各高厲なりしを。予夫子に(一三)戲る、金石は斃れ難きも、人命は常なく、吉凶制を異にす。(一四)此驩の人、(一五)孰か先づ(一六)隕越せんと。何ぞ寤らん夫子、果して乃ち先づ逝かんとは。又論ず(一七)死生、存亡數度を。子猶ほ疑を懷き、之が明據を求む。儻し(一八)獨り靈あらば、(一九)泰素に游魂せんと。我將に(二〇)翼を假り、(二一)飄

- 【七】翩翩。孤獨の貌。
- 【八】丹青。二色の名、義丹青の分明なるに過ぐるなり。
- 【九】友生。朋友なり。
- 【一〇】退年。永久に。
- 【一一】奄忽。俄に。
- 【一二】此驩。此宴會。
- 【一三】夙。死亡すること。
- 【一四】泰素。天なり。

飄として高く擧り、景雲に超登し、子を天路に要めんとす。喪柩既に臻り、將に魏京に反らんとす。

(一〇) 靈輜軌を廻らし、(一一) 白驥悲鳴す。虚廓にして見るなく、景を藏し形を蔽ふ。孰か云ふ仲宣、其聲を聞かずと。首を延べて歎息すれば、(一二) 雨泣頸に交る。嗟乎夫子、永く(一三) 幽冥に安る。人誰か没せざらん、達士は名に徇ふ。生きて榮え死して哀しまる。亦孔だ榮なり。嗚呼哀しい哉。

【大意】 吾と仲宣と交誼極めて厚し。永く相攜へて俱に生きんことを冀ひしに、仲宣先づ我を棄てて逝けり。今にして念ふ、嘗て宴會の時、吾仲宣に戯れて曰く、金石は弊れ難きも人命は虞るべからず。此會の中誰か先づ没する者ぞと。何を圖らん仲宣先づ逝かんとは。又嘗て死生存亡の數を論ず。仲宣書を檢し明證を求めて曰く、我若し靈あらば當に天に升りて飛仙とならんと。ああ仲宣の遊魂天に在らば、我將に羽翼を借りて雲に登り、以て其魂を求めんとす。今や柩車魏都に還れるも、其容復た見る能はず。永く地下に留る。仲宣の生くるや榮耀を極め、其の死するや人の爲に哀まる。亦以て光榮となすに足る。

楊荊州の誄並序

維(一) 咸寧元年、夏四月乙丑、晉の故折衝將軍、

【一】 楊荊州。楊肇、荊州刺史たり、安仁が妻の父なり、故

潘安仁

- 【八】 靈輜。喪車なり。
- 【九】 白驥。白馬なり、喪には白馬を用ふ。
- 【一〇】 雨泣。雨の如く下る涙。
- 【一一】 幽冥。地下なり。

荊州刺史、東武戴侯、榮陽の楊使君薨す。嗚呼哀しい哉。夫れ天子は國を建て、諸侯は家を立つ。賢を選び能に興し、政是を以て和す。周は尙父に頼り、殷は太阿に憑る。矯矯たる楊侯、晉の爪牙なり。忠節克く明に、茂績惟れ嘉し。將に王略を宏にし、荒遐を肅清せんとして、年を降すこと永からず、(一) 玄首未だ華ならざるに、(二) 恨を銜んで世を没ふ。命や奈何せん。嗚呼哀しい哉。古在昔より、生あれば必ず死す。身没し名垂るるは、先哲の躋する所なり。行は(三) 號を以て彰れ、徳は(四) 述を以て美なり。敢て(五) 旌旗に託し、爰に斯誄を作る。其辭に曰く、邈なる矣遠祖、系(六) 有周よりす。(七) 昭穆繁昌し、枝庶分流す。族伯喬より始まり、氏楊侯より出づ。(八) 奕世丕顯にして、允に(九) 大猷を迪む。天(一〇) 漢徳に賦き、龍戰未だ分れず。伊れ君の(一一) 祖考、事の殷なるに方る。鳥は則ち木を擇び、臣も亦君を簡ぶ。心を(一二) 外朝に投じ、名を策し身を委ぬ。

- 【三】 東武戴侯。肇東武伯に封ぜられ、諡して戴といふ。
- 【四】 楊使君。刺史を使君といふ。
- 【五】 尙父。太公望呂尙なり。
- 【六】 太阿。伊尹なり。
- 【七】 矯矯。武き貌。
- 【八】 爪牙。將軍たること。
- 【九】 荒遐。遠方の國。
- 【一〇】 玄首。頭の黒きこと。華。白髮なり。
- 【一一】 恨を銜む。功未だ成らざること。
- 【一二】 祖考。父祖なり。
- 【一三】 外朝。魏を指す。

淵塗に奮躍し、風雲に跨騰す。或は驍騎を統べ、或は領軍に據る。

【大意】 楊君の祖先是遠く周より興る。伯喬といふ者あり。周の支庶を以て采邑を晉の楊に賜ひ、因つて氏とす。其後楊氏或は侯と稱する者あり、世世道を辿んで絶えず。漢室衰へて羣雄相争ふや、君の父祖早く心を魏朝に寄せ、祖恪は驍騎將軍に任せられ、父暨は領軍將軍に任せられ、竝に風雲に奮躍す。

篤く戴侯を生み、茂徳期を繼ぎ、戎の洪緒を纂け、克く堂基を構ふ。弱冠にして道を味ひ、競ふなき惟れ時。孝實に蒸蒸、友も亦怡怡たり。多才豊藝、彊記洽聞、目毫末を睇、心無根を算り、草隸兼ね善くし、尺牘必

【三】 淵塗。淵なり、塗は途に同じ。
【四】 洪緒。大業なり。
【五】 蒸蒸。自ら進んで身を脩むること。
【六】 友。兄弟に善きこと。怡和順の貌。
【七】 無根。無限なり。
【八】 草隸。草書と隸書。
【九】 尺牘。手紙の文。
【一〇】 學優。優は長なり、論語

に學んで優なれば則ち仕ふとあり。
【一】 璞。あらたま。
【二】 軹。縣の名。令。縣の長官。
【三】 司官。治書侍御史となりしこと。
【四】 大理。官名、漢書に、廷尉は秦の官、刑辟を掌る、景帝の中六年、更めて大理と名づくことあり。
【五】 憲章。法度なり。

す珍とせらる。足行を輟めず、手文を釋てず。翰動いて飛ぶが若く、紙落ちて雲の如し。學優にして則ち仕へ、乃ち王政に従ふ。璞を散じ輝を發し、軹に臨んで令と作る。化邑里に行はれ、惠百姓に洽し。越に司官に登り、我が朝命を肅む。惟れ此大理は、國の憲章。君其任に泄み、

民を視ること傷けるが如し。庶獄明愼にして、農政を改授す、彼の野王に倉盈ち

刑辟端詳なり。聽卓呂に參り、稱于張に倅

庾億、國富み兵彊し。煌煌たる文后、晉室に鴻漸す。君兼資を以て、戎に參し弼と

【三六】 刑辟。刑罰なり。
【三七】 卓呂。卓陶は舜の法官、呂侯は周の穆王の法官。
【三八】 于張。于定國、張釋之、竝に漢の法官なり。稱。聲譽なり。
【三九】 野王。縣の名、河内郡に屬す、肇野王典農中郎將となる。
【四〇】 庾億。詩經に、我が倉既に盈ち、我が庾惟れ億とあり。
【四一】 煌煌。明なる貌。文后。晉の文帝司馬昭をいふ。
【四二】 鴻漸。鴻の如く進み出づること。
【四三】 兼資。文武の才を兼ねること。
【四四】 戎。軍なり。

作る。用て土宇を錫はり、茲顯秩に膺る。青社白茅、亦其絨を朱くす。魏氏天に順

【四五】 土宇。封邑なり、東武に封ぜられしこと。
【四六】 顯秩。爵位なり。
【四七】 青社白茅。尙書緯に、天子諸侯を封ぜんとすれば、各方土を取り、苴くに白茅を以てし、以て社となさしむとあり。
【四八】 絨。絨に同じ、印の紐、諸侯は赤絨を用ふ。
【四九】 聖皇。晉の武帝。書經に正月上日、舜終を文祖に受くとあり。
【五〇】 禁戎。禁衛の兵。
【五一】 闔闔。洛陽城門の名。
【五二】 苛慝。禍亂なり。
【五三】 穰。和ける貌。
【五四】 督。篤に通ず。

ひ、聖皇終を受く。烈烈たる楊侯、實に禁戎を統ぶ。闔闔を司管し、我が帝宮を清む。苛慝作らず、穆として和風の如し。謂へらく勳

勞を督うすと。命を班つこと彌々崇し。【大意】 君盛徳を以て父祖の遺業を承け、克く基本を立つ。夙に道を好み、名利を競はず、多藝多材、博聞強記なり。仕へて軹縣の令となり

治化邑里に洽し。又大理の任に就き、訟を聽くこと臯陶、呂侯の如く、聲譽于定國、張釋之に齊し。

治化邑里に洽し。又大理の任に就き、訟を聽くこと臯陶、呂侯の如く、聲譽于定國、張釋之に齊し。

更に野王典農中郎將となり、國富み兵強し。文帝(司馬昭)の晉王となるや、君を取りて參軍となし、東武子に封じ采邑を賜ふ。魏帝天意に順ひ位を晉王に禪るに及び、君禁兵を統べて宮城を衛る。功を以て東武伯に進封せらる。

茫茫たる海岱、玄化未だ周からず。滔滔たる江漢、疆場分流す。文を乗り武を兼ね、時れ惟れ楊侯。既に東莞に守とし、乃ち荊州に牧たり。萬里に折衝し、王休を對揚す。善を聞けば驚くが若く、惡を疾むこと讎の如し。威を示し徳を示し、以て伐ち以て柔ぐ。吳夷凶侈にして、僞師畏逼す。將に讎讐に乗じ、南極を席卷せんとす。繼蹇り糧盡き、神謀武はす。君子の過つや、曲を引き直を推す。彼の日月の、時ありて則ち食するが如し。負けて其咎を執り、功は其力に讓る。亦既に旆を旋し、法の爲に黜を受く。退いて丘壘を守り、門を杜ちて出でず。目を典墳に遊ばしめ、心を儒術に縦にす。祁祁たる搢紳、堂に升り室に入り、事として咨はざるはなく、疑として質さざるはなし。位貶すれども道行はれ、

- 【五】 茫茫。廣き貌。海岱。青州をいふ。
- 【六】 玄化。治化なり。
- 【七】 江漢。二川の名。ここは其流域荊州をいふ。
- 【八】 疆場。境界なり。分流。未だ王化に沾はざること。
- 【九】 東莞。縣の名徐州に屬す。
- 【一〇】 王休。王の美命。對揚。對は答なり。
- 【一一】 吳夷。吳主孫皓を指す。
- 【一二】 畏逼。吳將步闡の晉に降りしこと。
- 【一三】 日月。論語に、君子の過や日月の食の如しとあり。
- 【一四】 丘壘。墳墓。
- 【一五】 典墳。書籍なり。
- 【一六】 祁祁。衆多の貌。搢紳。衣冠の士。

身窮すれども志逸す。慮らず圖らざりき、乃ち寢ね乃ち疾み。吳天甲ます、景命其れ卒らんとは。嗚呼哀しい哉。

【大意】 時に治化未だ遠方に及ばず。君乃ち東莞の相、荊州刺史となり、萬里に折衝して、天子の美命に答ふ。善言を聞けば及ばざらんことを恐れ、人の惡を見ては之を疾むこと讎の如く、威を以て叛を伐ち、徳を以て民を安んず。吳將步闡の晉に降るや、君此機に乗じて吳を席卷せんと欲す。運糧繼がざるを以て吳將陸抗の爲に破らる。固より君が謀策の誤れるにあらざるなり。然れども君罪を己に引き、直を人に推し、國に還りて刑を受け、墳墓の地を守り、門を杜ちて出でず。精を學術に專にす。搢紳の就いて疑を質す者甚だ多し。身窮すと雖も志樂めりと謂ふべし。圖らざりき忽ち疾を獲て薨せんとは。

子囊楚を佐け、遺言して郢に城かしめ、史魚衛を諫め、尸を以て政を顯にせり。伊れ君の臨終、忠敬を忘れず。牀蓐に寢伏するも、念朝廷に在り。朝に厥辭を達し、夕に其命を隕せり。聖王嗟悼し、衾襚を寵贈し、徳を誄し勳を策し、終を考

景命其れ卒らんとは

- 【一七】 吳天。天なり。
- 【一八】 景命。景は大なり。
- 【一九】 子囊。事左傳に出づ。
- 【二〇】 史魚。韓詩外傳に、衛の大夫史魚、病んで且に死せんとす、其子に謂つて曰く、我屢遽伯玉の賢を言ふも進むる能はず、彌子瑕不肖なるも退くる能はず、我死せば喪を正堂に置くべからず、我を室に殯すれば足ると、衛君其故を問ふ、子實を以て答ふ、君乃ち遽伯玉を進め、彌子瑕を退け、徙して正堂に殯せしむとあり。
- 【二一】 衾襚。衣服なり。

へ諡を定む。羣辟懷を慟ましめ、邦族涙を揮ふ。孤嗣疾に在り、寮屬悴を含む。赴ふ者哀を同うし、路人秋を増す。嗚呼哀しい哉。

【大意】昔楚の子囊、衛の史魚、死するも尚ほ忠諫を忘れず。君亦病瘳に寝ぬるも嘗て天子を忘れず。朝に諫言を進めて夕に薨す。天子嗟悼し、諡號及び哀策文を賜ひ、朝野哀慕せざるはなし。

余頑蔽を以て、重陰に覆露す。仰いで先考執友の心を追ひ、俯して知己識達の深きに感じ、諱を承けて忉怛し、涕淚襟を濡す。豈に載ち奔るを忘れんや、憂病に是れ沈む。疾に在りても省せず、亡に於ても臨せず。聲を擧げて慟を増し、哀んで餘音あり。嗚呼哀しい哉。

【大意】余暗愚を以て君の厚恩を受く。今亡父の友たり、我の知己たる君の死を聞き、悲傷に勝へず。乃ち奔りて之を弔問せんとするも、病床に在りて往く能はず。君の病むや吾省視せず、其の死するや亦臨哭せず。ああ哀しい哉。

楊仲武の誄並序

潘安仁

- 【七二】羣辟。百官なり。
- 【七三】邦族。天子と同族の者。
- 【七四】重陰。重恩といふが如し。覆露。潤ふこと。
- 【七五】先考。亡父なり。執友。同志の友。
- 【七六】諱。死なり。忉怛。悲むこと。
- 【七七】臨。臨哭なり。

楊經字は仲武、滎陽宛陵の人なり。中領軍肅侯の曾孫、荊州刺史戴侯の孫、東武康侯の子なり。八歳にして父を喪ふ。其母は鄭氏、光祿勳密陵の成侯の元女なり。操行甚だ高し。幼孤を恤養し、以て夫家を保父し、諸を艱難に免れしむ。戴侯康侯、論著する所多く、又草隸の藝を善くす。子妙年の秀を以て固に能く義旨を綜覽して、軌式模範あり。舅氏隆盛なりと雖も、孤貧にして約を守り、心陋巷に安んじ、體菲薄を服す。余甚だ之を奇とす。若し乃ち清才雋茂、盛徳日新、吾其の進むを見る。未だ其の止むを見ざるなり。既に三葉世親の恩に藉る。而して子の姑は、余の伉儷なり。往歳徳宮里に卒す。喪服次を周くし、綱繆月を累ぬ。苟も人必ず心あり、此れ亦款誠の至なり。不幸短命、春秋二十九。元康九年夏五月己亥卒す。嗚呼哀しい哉。乃ち誄を作りて曰く、

- 【一】肅侯。楊暨なり。肅は諡なり。
- 【二】戴侯。楊肇なり。
- 【三】東武康侯。東武伯楊潭。
- 【四】成侯。鄭默なり。元女。長女なり。
- 【五】保父。安んじ治むること。
- 【六】草隸。草書隸書。
- 【七】妙年の秀。少年秀才。
- 【八】舅氏。母の生家なり。
- 【九】約。窮乏なり。
- 【一〇】菲薄。飲食の薄きこと。
- 【一一】三葉。三代なり。
- 【一二】姑。伯叔母。
- 【一三】伉儷。妻をいふ。
- 【一四】徳宮里。洛陽の里名。
- 【一五】次。位なり。周。一本に同に作る。
- 【一六】綱繆。親密の貌。
- 【一七】元康。晉の惠帝の年號。

伊れ子の先、奕葉熙隆なり。惟れ祖惟れ曾、載ち終る。名器光ると雖も、勳業未だ融らず。篤く巖たり、(一)章を知り微を知り、深を鉤し、(二)蹟を探り、道を味ひ、(三)機を研く。直の人に匪ず、邦家の輝なり。子の、(四)閔に違へる、曾ら未だ、(五)亂

- 【一】奕葉。累世なり。熙隆。隆盛なり。
- 【二】巖。幽深なり。
- 【三】蹟。幽深なり。
- 【四】機。微なり。
- 【五】閔。父の喪。
- 【六】亂。齒の抜けかばるを亂といひ、總髮を髻といふ。
- 【七】休風。美風なり。
- 【八】顯考。尊父といふが如し。
- 【九】休明。美明なり。
- 【一〇】先訓。父祖の著書。
- 【一一】穆。和睦なり。
- 【一二】休。樂なり。戚。憂なり。
- 【一三】論語に。孔子曰く、回や予を視ること猶ほ父のごとし、予視ること猶ほ子のごとし、るを得ずとあり。
- 【一四】安仁の將た老いんとするに喩ふ。

景西し、子を

朝陰に望む。如何ぞ短折し、世に背いて

溼沈せる。嗚呼哀しい哉。

【大意】 足下の祖先は世々美風を揚ぐ。足下の父才器を抱いて未だ功業を建つるに及ばず、不幸にして早世す。足下幼にして穎悟、幽深の理皆能く鉤探して之を知る。未だ髻亂ならざるに父を喪ひ、恰も危根の急風に遇へるが如し。然れども足下の美德、よく幽谷より出でて喬木に遷り、弱冠にして父祖の聲譽を繼ぐ。舅氏富榮なるも、自ら貧困に安んじ肯て其援助を求めず。父祖の著述を撰録して散佚せざらしむ。潘氏と楊氏と婚を通ずること既に三世、我亦足下と父祖の好に順ふこと始の如し。故に足下の休戚は實に我が休戚なり。足下よく我を愛敬せるも、我足下を愛恤する能はず。老衰の身を以て足下の盛年なるに望を屬せり。足下今や不幸短命にして没す。哀しい哉。

- 【一】朝陰。盛年に喩ふ。
- 【二】溼沈。死をいふ。
- 【三】彌留。久しきに亙ること。
- 【四】孝友。父母に善きを孝と
- 【五】兄弟に善きを友といふ。
- 【六】嗷嗷。哭聲なり。同生。兄弟なり。
- 【七】荆實。荆山の玉璞。
- 【八】和。楚の卞和なり、荆山の璞を研きて美玉を得たり、和氏の璧是なり。

疾に寝ねて 彌留し、茲 孝友を守る。命に臨んで身を忘れ、慈母を顧戀す。哀哀たる慈母、心を痛ましめ首を疾ましむ。嗷嗷たる同生、悽悽たる諸舅。春蘭莖を擢んで、方に其華を茂にす。荆實を挺し、將に 和を剖かんとす。芳を含み耀を委し、壁を毀り柯を摧く。嗚呼仲武、痛ましい哉

奈何せん。徳宮の 艱、同じく 外寢に次す。惟れ我と爾と、筵を對し枕を接す。時より今に迄るまで、曾て未だ稔に盈たず。 姑姪繼いで隕つ。何の痛か斯より甚しからん。嗚呼哀しい哉。

【大意】 足下孝友の心に富む。故に死に臨んで慈母を顧戀す。父母兄弟諸舅皆足下の死を悲まざるはなし。 足下春蘭美玉の才を抱いて早折す。其の悲傷するは固より當然なり。

足下と共に我が妻の喪に服してより、未だ一歳ならずして足下亦没す。我亦何ぞ 悲に堪へんや。

帙を披き書を散じ、屢遺文を觀る。造れるあり寫せるあり、或は草或は

眞。執玩 周復して、其人を想見す。紙手を勞し、涕巾を霑す。 龜筮既

に襲り、 埏隧既に開く。痛ましい矣楊子、世と長く乖く。朝に洛川を濟

り、夕に山隈に次れば、歸鳥 頽頽し、行雲徘徊す。穴に臨んで永訣し、

櫬を撫して哀を盡す。 遺形紹ぐなし。慟を余が懷に増す。魂や往きぬ。

【大意】 足下の遺書を披き、之を觀て足下を追想すれば、涙巾を霑すに至る。其墓既に下定せられ、穴に臨んで永訣し哀を盡す。 足下死して遺子なきは、殊に余の悲む所なり。ああ哀しい哉。

梁木實に摧く。嗚呼哀しい哉。

【四二】 艱。徳宮里に於て安仁の妻の死せること。

【四三】 外寢。喪に服する室。

【四四】 姑姪。をばとをひ。

【四五】 眞。楷書なり。

【四六】 龜筮。墓を卜すること。

【四七】 埏隧。墓道なり。

【四八】 頽頽。飛んで上下すること。

【四九】 櫬。棺なり。

【五〇】 遺形。嗣子なり。

卷の第二十九

誄 下

夏侯常侍の誄 竝序

潘 安 仁

夏侯湛、字は孝若、譙國譙の人なり。少くして名を知らる。弱冠にして太尉府の掾、賢良方正

に辟され、徵されて太子舍人、尙書郎、野王

の令、中書郎、南陽の相となる。 家艱をも

て乞うて還り、頃之にして選ばれて太子の僕と

なる。未だ命に就かずして 世祖崩す。 天

子以て散騎常侍となす。 班列に従ふなり。 春秋四十有九、

喜里の第に卒す。嗚呼哀しい哉。乃ち誄を作りて曰く、

- 【一】 野王。縣の名。令は其長官。
- 【二】 南陽。晉の武帝の第三子 東、南陽王に封ぜらる。
- 【三】 家艱。父母の喪なり。
- 【四】 世祖。晉の武帝。
- 【五】 天子。晉の惠帝。
- 【六】 班列云云。次序を以て任用せるのみ、敢て拔擢せるにあらすとの意。
- 【七】 春秋。年齢なり。
- 【八】 元康。惠帝の年號。
- 【九】 延喜里。湛の居りし所の里の名。第は邸なり。

元康元年夏五月壬辰、疾に寝ね 延

禹(一〇)玄珪を錫る。實に(二)文命といふ。克く明に克く聖、光に夏政を啓く。其の漢に在る、勳を邁つる惟れ(三)嬰、儒業を弘めんことを思ひ、(四)小大名を雙ぶ。(五)顯祖徳を曜し、竟及び荆に牧たり。父(六)淮岱に守とし、治も亦聲あり。(七)英英たる夫子、(八)灼灼として其れ儁なり。飛辯(九)藻を擣べ、華繁玉振す。彼の(一〇)隋和の如く、彩を發し潤を流す。彼の(一一)錦纈の如く、素を列し絢を點す。人(一二)其表を見て、(一三)其裏を測るなし。徒に(一四)吾生を謂ふ、(一五)文勝てば則ち史なりと。心照し神交るは、唯我と子とのみ。且つ少長を歴、終始を觀るに逮べり。子の親に承まつるは、孝(一六)閔參に齊し。子の友悌なる、和瑟琴の如し。君に事へて直道、友と信心あり。實に(一七)唱高しと雖も、

- 【一〇】玄珪。黒き玉、昔堯禹に玄珪を賜ひ以て其成功を彰せり。
- 【二】文命。禹の號なり。
- 【三】嬰。夏侯嬰漢の高祖に仕へて太僕となり、從つて項羽を撃つ。
- 【四】小大。漢の夏侯勝。字は長公、夏侯始昌に從つて尙書を受け、勝の從父兄の子建、字は長卿、勝に師事し、是に由りて尙書に大小夏侯の學あり。
- 【五】顯祖。湛の祖父夏侯威、荆楚二州の刺史たり。
- 【六】淮岱。淮は川の名、岱は山の名、湛の父莊、淮南の太守たり。
- 【七】英英。美なり。夫子。夏侯湛を指す。
- 【八】灼灼。盛なる貌。儁。俊なり。
- 【九】藻。文藻なり。
- 【一〇】華繁玉振。華の繁きが如く、玉の振ふが如きなり。
- 【一一】隋和。隋侯の珠、卞和の玉。
- 【一二】錦纈。錦繡なり。
- 【一三】素は白、絢は文彩なり。
- 【一四】其表。威儀なり。
- 【一五】其裏。德行なり。
- 【一六】吾生。夏侯湛を指す。
- 【一七】文勝。論語に、文質に勝てば則ち史なりとあり。
- 【一八】閔參。閔子騫、曾參並に孔子の弟子、孝を以て名あり。
- 【一九】友悌。兄弟に宜しきこと。
- 【二〇】唱高。宋玉の對問に、曲彌高き者は其和彌寡しとあり。

猶ほ爾の音を賞す。

【大意】夏侯氏の祖禹は文命と號す。玄珪を堯より賜はり、大に夏の政教を開く。初め夏に封せられて侯となる。遂に以て氏とす。夏侯嬰漢の高祖に仕へて勳功を建て、夏侯勝、夏侯建、竝に尙書を脩めて大小夏侯の學を開く。湛の祖威は竟荆二州の刺史となり、湛の父莊は淮南の太守となり、皆治績あり。湛亦俊秀の才を以て文詞に長じ、其辭彩珠玉錦繡の如し。世人ただ其威儀を見て、未だ其德行を知らず。故に湛を以て博識の才子となし、其の有徳の君子たるを知らざるなり。余や獨り湛と深交あり、少長を歴て其の始終を觀たり。故に湛の性行を知ること最も深し。湛は親に事へて孝、兄弟に接して悌、君に仕へて直、朋友と交りて信あり。其曲高くして唱和し難しと雖も、我常に其德音を賞慕せり。

- 【一〇】公弓。古士を招くに弓を以てす、詩經に、翹翹たる車乘、我を招くに弓を以てすとあり。
- 【一一】皇輿。天子の車。
- 【一二】兩宮。太子舍人より轉じて尙書郎となりしをいふ。
- 【一三】黎蒸。庶民なり。宰とは野王の令となりしこと。
- 【一四】清風。美化なり。
- 【一五】決。大なり。
- 【一六】樂都。南陽をいふ。
- 【一七】妙簡。善く擇ぶ。
- 【一八】喉舌。納言の官をいふ。王命を出納すればなり。

南陽に相とす。惠訓倦まず、人を視ること傷けるが如し。乃ち眷みて北に顧み、祿を延喜に辭す。余も亦
(三九) 休息し、(四〇) 明時に事ふるなし。(四一) 疇昔の遊、
茲に(四二) 二紀なり。(四三) 班白にして手を攜ふ。何の
歡か之に如かん。居れ吾汝に語らん。衆實に寡に
勝つ。人は備異を惡み、俗は文雅を疵とす。(四四) 執戟
に楊を疲らし、(四五) 長沙に賈を投ず。爾を高しと謂
ひ、(四六) 物の下に居るを恥づる無かれ。子乃ち洗然
として色を變じ容を易へ、慨然として歎じて曰く、
道固より同じからず、(四七) 仁を爲すは己に由る。我
(四八) 蒙に求むるに匪ず。誰をか毀り誰をか譽め、何
をか去り何にか從はんと。(四九) 涅するとして緇せざ
るはなく、磨するとして(五〇) 磷せざるはなし。子獨
り色を正うし、屈に居て志申ぶ。爾を以ひすと雖
も、猶ほ其身を致し、(五一) 獻替規を盡し、(五二) 茲一人に媚ぶ。(五三) 讜言忠謀、世祖是れ嘉す。將に(五四) 儲皇に

【三九】 休息。心ゆたかに休息する。
【四〇】 明時。昭代といふが如し。
【四一】 疇昔。舊日なり、往日なり。
【四二】 二紀。十二年を一紀といふ。
【四三】 班白。頰白に同じ、胡麻鹽あたたま。
【四四】 執戟。戟を執りて宮禁を衛る官、漢の楊雄才高くして位下く、執戟となる。
【四五】 長沙。漢の賈誼に遇ひて長沙王の大傅に貶せらる。
【四六】 物。人なり。
【四七】 論語に、仁を爲すは己に

由りて人に由らんやとあり。
【四八】 蒙。無智の童蒙、易經に、童蒙來りて我に求む、我童蒙に求むるにあらずとあり。
【四九】 涅。黒土なり。緇は黒なり。論語に、白しと曰はずや、涅すれども緇せずとあり。
【五〇】 磷。薄くなること、論語に、堅しと曰はずや、磨すれども磷せずとあり。
【五一】 獻替。可を薦め否を廢すること。規。法なり。
【五二】 茲一人。天子をいふ。
【五三】 讜言。正直の言。
【五四】 儲皇。太子なり。

僕とし、轡を(五五) 承華に奉せしめんとす。(五六) 先朝の末命、(五七) 聖列顯加す。入りては帝闈に侍し、出でて
は厥家を光す。我聞く積善なれば、神之に吉を降すと。宜しく(五八) 遐紀を享け、長く(五九) 天秩を保つべし。
如何ぞ斯人にして、斯疾ある。會ち未だ(六〇) 知命ならざるに、中年にして(六一) 隕卒す。嗚呼哀しい哉。
【大意】 年二十にして初めて升りて太尉府の掾となり、又徵されて太子舍人となり、既にして尙書郎
に轉じ、出でて野王縣令となる。内外俱に美化あり。武帝の寵子東の南陽
王に封せらるるや、湛を取りて其相となす。民を愛撫すること傷者を慰撫
するが如し。會ち親の喪に遇ひて官を退き延喜里に閉居す。時に余も亦官
を辭して高臥せり。故に二十餘年を経て又昔日の交遊を俱にするを得たり。
何の歡か之に如かん。我嘗て湛を戒めて曰く、夫れ小人は衆く賢者は寡し。
衆は實に寡に勝つ。又時俗俊異の人を憎む。是れ楊雄の執戟に疲れ、賈誼
の長沙に謫せられし所以なり。足下自ら以て高しとなし、人の下に居るを恥づるなかれ。是れ自ら全
うするの道なりと。湛乃ち慨然として答へて曰く、余が道固より時俗と同じからず。我既に時俗に求
むるなし。亦誰をか毀譽し何をか去從せんやと。世皆時俗に染化せざるはなし。湛獨り能く俗に化せ
ず。下位に居て志を高うす。既に重用せられずと雖も、善く可否を獻替し、以て天子を輔く。武帝乃

【五五】 承華。東宮の門の名。
【五六】 先朝。武帝なり。末命。
【五七】 聖列。列は烈なり。
【五八】 遐紀。長壽なり。
【五九】 天秩。天子の秩祿。
【六〇】 知命。五十歳をいふ。
【六一】 隕卒。死すること。

ち其忠正を嘉し、將に太子に僕たらしめんとす。崩するに及び遺詔して散騎常侍たらしむ。我聞く善を積めば天之福を降すと。湛の如きは宜しく長壽を享け、長く天祿を保つべし。然も年未だ五十に到らずして歿す。ああ哀しいかな。

惟れ爾の存せる、爵に匪ずして貴し。甘食美服、重珍兼味す。終に臨んで遺誓し、永く爾の類を錫ふ。斂するに時襲を以てし、殯するに器を簡ばす。誰か能く俗を抜き、生きて其養を盡す。孰か是に生を養つて、其葬を薄くする。淵なる哉。若人、心を縦にして、條暢す。傑操明達、困して彌亮なり。柩輅既に祖り、容體長に歸る。存亡永く訣れ、逝者追はれず。子の舊車を望み、爾の遺衣を覽、悃抑して聲を失ひ、が慟誰が爲にせん。嗚呼哀しい哉。日往き月來り、暑退き寒襲ひ、零露霑凝し、勁風凄急なり。慘爾として其れ傷み、我が良執を念ふ。子の素館に適き、孤を撫でて相泣く。前思未だ弭まず、後

【三】重珍兼味。美味を併せ食ふこと。

【六】淵。深きこと。

【六三】爾の類。詩經大雅既醉篇に、孝子匱しからず、永く爾の類を錫ふとあり、類は朋類なり、猶ほ徳孤ならず必ず鄰ありといふが如し。

【六四】斂。死骸を棺に納むること。時襲。時服なり、生時の衣服。

【六五】殯。死して未だ葬らず、棺に納めて賓遇すること。器。

【六六】條暢。通達なり。

【六七】傑操。輅を載する車。

【六八】明達。死者なり。

【六九】困。哀憤なり。

【七〇】悃抑。落つる涙。

【七一】零露。秋になりて白露の降ること。

【七二】慘爾。悲む貌。

【七三】良執。良朋なり。

【七四】素館。舊宅なり。

感仍に集る。積悲懷に滿つるも、逝いては安んぞ及ばん。嗚呼哀しい哉。【大意】湛の生時、爵なくして貴し。故に美衣甘食して頗る豪奢を極む。而も死に臨んで其子に遺命し、葬禮を薄くせしむ。ああ生きて滋味を盡して養をなす、死して薄葬を崇ぶこと誰か能く此の如くならんや。湛の如きは實に通暢明達の士と謂ふべし。ああ湛逝き吾存し、幽明永く相訣る。復た之を追ふべからず。今其車服を見、涙流れて拭ふに暇あらず。舊宅を訪ひ遺孤を撫でて相泣く。生前の思未だ弭まざるに、死後の悲相續いで來る。嗚呼哀しい哉。

【六三】遺。死して未だ葬らず、棺に納めて賓遇すること。器。

【六四】條暢。通達なり。

【六五】傑操。輅を載する車。

【六六】明達。死者なり。

【六七】困。哀憤なり。

【七八】悃抑。落つる涙。

【七九】零露。秋になりて白露の降ること。

【八〇】慘爾。悲む貌。

【八一】良執。良朋なり。

【八二】素館。舊宅なり。

惟れ 元康七年秋九月十五日、晉の故の督守關中侯、扶風の馬君卒す。嗚呼哀しい哉。初め 雍部の内屬羌反す。未だ弭まざるに 編戸の氏又逆を肆にす。王旅討を致して 殄滅を終れりと雖も、而も 蜂蠆毒あり、驟小利を失ひ、百姓をして 流亡すること、

馬汧督の誄 竝序

潘安 仁

- 【一】馬汧督。晉の馬敦、汧督となり、氏羌に攻められ、節を執りて苦戦し汧城を存す。然も州司の爲に嫉まれ、獄中に憤死す。
- 【二】元康。晉の惠帝の年號。
- 【三】扶風。地名。
- 【四】雍部。雍は州名。内屬羌。
- 【五】編戸の氏。氏も夷族の名、晉に附きて百姓となれる氏。
- 【六】王旅。天子の軍。
- 【七】蜂蠆。毒蟲、羌氏に喩ふ。
- 【八】流亡。流離といふが如し。
- 【九】塗炭。水火の苦。

塗炭よりも頻ならしむ。建威元を好時に喪ひ、州伯宵大谿に遯る。夫の偏師裨將の首を隕し軍を覆す者、蓋し十を以て數へ、符を剖き城を專にし、青を紆ひ墨を拖くの司、奔走して其守を失ふ者の若き、境に相望む。秦隴の櫓に鞏更魁たり。既已に汧を襲ひて其縣に館す。子 眇爾の身を以て重圍の裏に介り、寡弱の衆を率ゐて 十雉の城に據る。羣氏蝟毛の如くにして四面より起り、雨のごとく城中を射る。城中穴を鑿ちて處り、戸を負ひて汲む。木石將に盡さんとして 樵蘇乏竭し、芻蕘罄絶す。是に於てか梁棟を發して之を用ひ、罅くるに鐵鎖機關を以てし、既に礮を縦ちて又升し、陳焦の麥を爨ぎ 栢栢の松を柿り、用て能く薪芻置からず、人畜給を取る。青煙傍起し、

- 【一〇】 建威。建威將軍周處、賊と戦ひ軍敗れて死す。好時。縣名。
- 【一一】 州伯。州の長官、雍州刺史解系、賊と戦ひ敗れて逃る。大谿。地名。
- 【一二】 偏師裨將。部將なり。
- 【一三】 符を剖き云云。守宰の屬をいふ。
- 【一四】 青を紆ひ云云。青墨は綬の色なり。
- 【一五】 秦隴。秦州隴西郡なり、羌賊の魁鞏更、秦隴に據り、僭して王と稱す。
- 【一六】 眇爾。微微たること。
- 【一七】 十雉。長さ三尺を雉といふ。

- 【一八】 十雉は小なるをいふ。
- 【一九】 羣氏。一本に羣羌に作る。
- 【二〇】 樵蘇。木を取り草を刈る者。
- 【二一】 芻蕘。前に同じ。
- 【二二】 發。出すこと。
- 【二三】 鐵鎖。鐵のくさり。
- 【二四】 大石なり。
- 【二五】 栢栢。栢は栢なり、櫛は櫛なり。
- 【二六】 青煙云云。薪あるをいふ。
- 【二七】 歷馬。歴は歴なり、馬の食料をいふる器。此句馬の壯なるをいふ。
- 【二八】 凶醜。賊なり。

歷馬長鳴す。凶醜駭いて疑懼し、乃ち地を

闕りて攻む。子穴を命じ漚を浚くし、壺罈瓶甗を寔き以て之を偵はしむ。將に城を穿たんとして響作る。因つて 穡を焚いて之を火薫す。潛氏殲く。久之して 安西の救至り、竟に虎口の厄を免る。數百萬石の 積を全うし、契書に幕府に文にす。聖朝疇咨し、進むるに顯秩を以てし、殊にするに 幢蓋の制を以てす。而るに 州の有司、乃ち私隸數口、穀數十斛を以て吏兵を 考訊し、 檟楚の辭を以て之に連ぬ。大將軍 屢其 疏を抗げて曰く、敦固く孤城を守り、獨り羣寇に當り、少を以て衆を禦ぎ、載ち寒暑に離ふ。危きに臨み節を奮ひ、穀を保ち城を全うせり。而るに雍州の 從事、敦が勳效を忌み、小疵を推極す。元功を褒獎する所以にあらず。宜しく敦が 禁効を解きて 假授すべしと。詔書して遽に許す。而も子固より已に獄に下され、憤を發して卒しぬ。朝廷聞いて之を傷

- 【二九】 壺罈瓶甗。カメなり。罈子に、若し城外より地を穿ちて來り攻むる時は宜しく城内に於て井を掘りて以て城に薄り、聰耳の者をして罌に伏して聽き、審に穴處を知り之を迎へしむべしとあり。
- 【三〇】 穡。大麥なり。
- 【三一】 潛氏。潛攻する所の氏。
- 【三二】 安西。安西將軍夏侯駿の援兵。
- 【三三】 積。糧食の儲。
- 【三四】 契書。帳簿なり。
- 【三五】 聖朝。惠帝をいふ。疇咨。謀り問ふこと。

- 【三六】 幢蓋。將軍刺史の儀飾。
- 【三七】 州の有司。雍州の法官。
- 【三八】 考訊。訊問すること。
- 【三九】 檟楚。杖なり、杖刑を以て罰すること。
- 【四〇】 大將軍。梁王形をいふ。
- 【四一】 疏。天子に上る書。
- 【四二】 從事。官吏なり。
- 【四三】 小疵。小過なり。
- 【四四】 元功。大功なり。
- 【四五】 禁効。罪刑なり。
- 【四六】 假授。假に官職を授くること。
- 【四七】 朝廷。惠帝なり。

み、策書して曰く、皇帝故の督守關中侯馬敦を 咨す。忠勇果毅、率勵方あり。孤城を固守し、危逼
 濟すを獲たり。寵秩未だ加へざるに不幸にして喪亡す。朕用て悼めり。今牙門將軍の印綬を追贈し、
 祠るに 少牢を以てす。魂にして靈あらば茲の寵榮を嘉せんと。然れども 黎士の穢を聞く、其れ
 庸ぞ思を致さんや。若し乃ち下吏の其 隳害を肆にするは、則ち皆妬の徒なり。嗟乎妬の善を欺く、
 抑亦首を買ふるの讎なり。語に曰く、或るひ
 と其子を戒む、慎んで善を爲すなかれと。固
 より以て是の若くなるべきを言ふ。悲しい夫。
 昔 乘丘の戦に、縣賁父、魯の莊公に御たり。
 馬驚いて敗績す。賁父曰く、吾未だ嘗て敗
 績せず。而るに今敗績す。是れ勇なきなりと。
 遂に之に死す。圍人馬を浴せるに、流矢の
 白肉に在るあり。公曰く、其罪にあらざるなりと。乃ち之を誅す。漢の明帝の時、司馬叔持なる者あ
 り。白日都市に於て父の讎を手劔す。死を視ること歸するが如し。亦史臣班固に命じて之が誅を爲ら
 しむ。然れば則ち忠孝義烈の流、非命に慷慨して死する者は、綴辭の士未だ之を或は遺てざるなり。

- 【四八】 咨。なげくこと。
- 【四九】 少牢。羊豕の供物。
- 【五〇】 黎士。清潔の士。潔士己の穢行あるを聞きては、何ぞ思を致して生を求めんやとなり。
- 【五一】 隳害。口に言はずして心に之を害するなり。
- 【五二】 善を爲せば人の妬を受く、故に慎んで善をなす勿れといへるなりとの意。
- 【五三】 乘丘。地名。事禮記に出づ。
- 【五四】 他日。前日なり。
- 【五五】 圍人。馬を養ふ者。
- 【五六】 白肉。股の裏なり。
- 【五七】 綴辭の士。史臣をいふ。

天子既已に策して之に贈る。微臣舊史の末に託す。敢て其文を闕かんや。乃ち誄を作りて曰く、
 人を知ること未だ易からず。人未だ知り易からず。嗟茲馬生、位末に名卑し。西戎夏を猾す、乃ち其
 奇を奮ふ。此汧城を保ち、我が邊危を救ふ。彼の
 邊奚ぞ危き、城小に粟富む。子眇身を以て、而も
 其守を裁す。兵加衛なく、墉増築せず。婁婁
 たる羣狄、豺虎競逐す。鞏更 恣睢し、潛に 官
 寺に跼る。齊萬の城闕なる、台司を震驚す。
 聲勢沸騰し、種落煽熾なり。旌旗 電舒し、戈
 矛 林植す。形珠星流し、飛矢雨集す。惴
 惴たる士女、天を號びて以て泣く。麥を擧げて炊
 ぎ、戸を負ひて以て汲む。累卵の危、倒懸の急。
 馬生爰に發し、險に在りて彌亮なり。精白日
 を貫き、猛秋霜より烈し。稜威厲むべく、懦夫も克く壯なり。撫循に霑恩し、寒士 縶を挾む。蠢
 蠢たる 犬羊、衆を阻み寡を陵ぐ。隧に潜んで密に攻む、九地の下に。愜愜たる窮城、氣假るな

- 【五八】 微臣。潘安仁自ら謂ふ。
- 【五九】 西戎。氐羌なり。夏。中國なり。
- 【六〇】 墉。牆なり。
- 【六一】 婁婁。貪慾なり。
- 【六二】 恣睢。放肆なること。
- 【六三】 官寺。官署なり。
- 【六四】 齊萬。賊將齊萬年なり。
- 【六五】 煽熾。怒の盛なる貌。
- 【六六】 台司。三公なり。
- 【六七】 種落。氏羌の部落。煽熾。勢の盛なること。
- 【六八】 電舒。電光の如く讖る。
- 【六九】 林植。林の如く立つ。
- 【七〇】 惴惴。懼るる貌。
- 【七一】 倒懸。倒につるすこと。
- 【七二】 陵威。威力なり。
- 【七三】 縶を挾む。縶は懸衣なり、暖く感ずること。左傳に楚王三軍を巡り拊して之を勉む、三軍の士皆縶を挾むが如しとあり。
- 【七四】 犬羊。賊をいふ。
- 【七五】 隧。地道なり。
- 【七六】 愜愜。小息の貌。

きが若し。昔は命天に懸る、今や惟れ馬。

【大意】 夫れ人を知るは易からず。馬敦は位卑くして名も亦顯れざれども、氏羌の中夏を亂すや、克く奇策を奮つて之に當り、汧城を守りて我が邊急を救へり。汧城は城小にして貯粟多し。是れ賊の窺ふ所となりし所以なり。賊魁鞏更、齊萬年、勢威強盛にして部落亦衆盛なり。汧城の士女天を呼んで號泣す。其の危きこと累卵の如く、其の苦しきこと倒懸の如し。馬敦乃ち其智謀を發し、精誠白日の如く、威嚴秋霜の如し。よく懦夫をして勇壯ならしむ。士卒皆其撫循に服す。賊衆を恃みて寡を陵ぎ、地道を鑿ちて汧城を攻む。汧城の人皆懼れて息を屏め、暫時の命すら假るべからざるが如く、馬敦の計策を恃んで纔に生存するのみ。惟れ此馬生、才博く智瞻る。偵ふに瓶壺を以てし、刺るに長壘を以てす。鍾未だ鋒を見ざるに、火以て焰を起す。戸を薰べて窟に滿ち、穴を培して以て斂す。木石匱竭し、其稗空虛なり。矚然たる馬生、傲餘あるが若し。梁を芻けて礪となし、松を柿りて芻となす。守械に乏しからず、櫛に鳴駒あり。哀哀たる建威、身斧質に伏す。悠悠たる烈將、軍を覆し器を喪ふ。戎我が徒を釋て、我が師を顯誅す。生を以て死に易ふ。疇か克く

- 【七】 長壘。長きホリ。
- 【七八】 培。割に同じ、掘ること。
- 【七九】 斂。埋むること。
- 【八〇】 其稗。薪藁なり。
- 【八一】 矚然。勁忿の貌。
- 【八二】 斧質。質は椎なり、人を斬る臺なり。斧は人を斬る具。
- 【八三】 悠悠。衆き貌。
- 【八四】 戎。賊なり。
- 【八五】 師。將なり。

二せざらん。聖朝西顧し、關右震惶す。我が汧庾を分ち、化して寇糧となす。實に夫子に頼り、

思譽彌長し。威勇ありて、命を致し方を知らしむ。我末學と雖も、之を前典に聞く。十世能を宥し、墓に表し善を旌す。人を思ひて樹を愛し、甘棠翦るなし。矧や乃ち吾子、功深く疑淺し。兩造未だ具らず、儲録蓋し尠し。孰か是の勳庸にして、免るるを獲ざる。猶なる哉。吾部司、其心反側す。善を斲り能を害し、正を醜とし直を惡む。牧人逶迤として、公より退食す。穢を聞いて、鷹揚し、曾て翼を戢めず。爾の大勞を忘れ、爾の小利を猜む。苟も懷を開くなし。何に于てか至らざらん。慨慨たる馬生、礪礪たる高致。憤を囹圄に發し、沒して猶ほ眠る。嗚呼哀しい哉。【大意】 馬敦乃ち壘を掘り瓶壺を置きて以て之を覘ひ、賊を穴中に薰殺して之を埋む。木石薪藁缺乏

- 【八六】 關右。關西なり。
- 【八七】 汧庾。汧城の倉。
- 【八八】 夫子。馬敦を指す。
- 【八九】 思譽。譽は謀なり。
- 【九〇】 甘棠。木の名、詩經に蔽芾たる甘棠、翦るなかれ伐るなかれとあり、民召公の徳を愛するなり。
- 【九一】 兩造。原告と被告、兩因相證するなり。
- 【九二】 儲録。儲粟及び私録。
- 【九三】 勳庸。勳功なり。
- 【九四】 部司。雍州從事をいふ。
- 【九五】 反側。偏曲なり。
- 【九六】 牧人。太守をいふ。逶迤。自得の貌。
- 【九七】 退食。官署より自宅に歸ること。詩經に逶迤逶迤たり、公より退食すとあり。
- 【九八】 鷹揚。鷹の飛揚するが如きなり。
- 【九九】 大勞。大功なり。
- 【一〇〇】 小利。數數十斛をいふ。
- 【一〇一】 慨慨。志を得ざる貌。
- 【一〇二】 礪礪。堅き貌。
- 【一〇三】 囹圄。獄なり。
- 【一〇四】 眠。目を開きて瞑せざること。

するも、傲然として懼るるなし。乃ち梁を懸けて礮となし、松を削りて薪となす。建威將軍周處の羌と苦戦して死するや、猛將の喪敗する者衆し。賊吾が士卒を釋し、我が將帥を誅す。誰か克く二心を抱かざらん。ただ敦獨り節を執りて降らす。天子汧城の倉庫を分ちて賊の糧となすや、敦能く長久の謀を立て、汧人をして勇あり且つ命を致さしむ。夫れ能者の子孫たとひ罪あるも、十世之を宥し、其墓に表して善を旌し、召公の徳を思ひて甘棠を愛せしは、古書に明記する所なり。馬敦の如きは、功高くして疑少し。然も刑罰を免れざるは何ぞや。是れ雍州の有司敦の罪を咎むること過大にして、其大功を顧みざるの致す所なり。是を以て敦終に獄中に憤死し、死するも猶ほ瞑せず。

安平奇を出し、破齊克く完し。張孟 籌を運らし、危趙安きを獲たり。汧人の子に頼る、猶ほ彼の談單のごとし。如何ぞ 吝嫉して、之を 筆端に搖ぶ。倉を傾くるも賞すべし、矧んや私粟と云ふをや。狄隸頌つべし、況んや家僕と曰ふをや。子が 雙龜を剔ひ、貫くに 三木を以てす。功汧城を存し、身汧獄に死す。凡そ爾が同圍、心焉に摧割し、老を扶け幼を攜へ、街號巷哭す。嗚呼哀

- 【一〇五】安平。安平君田單、火牛の計を用ひて燕軍を破り齊を回復す。
- 【一〇六】張孟。趙襄子の臣張孟談、韓魏と約して智伯の軍を破り趙を完うす。
- 【一〇七】吝嫉。有司の貪吝嫉妬をいふ。
- 【一〇八】筆端云云。文墨を弄して小過を罪すること。
- 【一〇九】狄隸。賊の捕虜。
- 【一一〇】雙龜。龜は印なり、汧督及び關中侯の印。
- 【一一一】三木。桎械枷、皆刑具なり。

しい哉。明明たる天子、旌すに殊恩を以てす。光光たる寵贈、乃ち其門を 牙にす。司勳爵を班ち、亦 後昆を兆す。死して靈あらば、庶くは冤魂を慰せん。嗚呼哀しい哉。【大意】昔田單燕軍を破りて齊を完うし、張孟談 籌を運らして趙を安んず。今汧人の敦に頼るは、猶ほ齊趙の談單に於けるが如し。然るに有司其功を嫉妬し文墨を弄して之を罪す。夫れ倉を傾けて功を賞するも猶ほ可なり。況んや私粟なるをや。狄隸をも賞すべし。況んや有功の士卒なるをや。同圍の者、敦が憤死を聞き、相俱に號哭せるは固より宜なり。然りと雖も天子殊恩を加へて牙門將軍を贈り、司勳爵を班ちて遺嗣を弔ふ。亦以て冤魂を慰すべきなり。

陽給事の誄並序

顔延年

惟れ 永初三年十一月十一日、宋の故の 寧遠司馬、漢陽太守、彭城の陽君卒す。嗚呼哀しい哉。瓚少うして志節を稟け、資性忠果なり。上に奉ずるに誠を以てし、下に率ゐるに方

- 【一】陽給事。陽瓚節に死し、給事中を贈らる。
- 【二】永初。宋の武帝の年號。
- 【三】寧遠。府の名。
- 【四】漢陽。郡の名。
- 【五】彭城。地名、陽瓚の生れし地。

あり。朝其能を嘉す。故に授くるに邊事を以てす。永初の末、佐として滑臺を守る。國禍存に臻り王略中ころ否がるに値ひ、獯虜鬻を間ひ、司兗を剛剝す。幽并の騎弩、鞏洛に屯逼し、營を列ね成を縁らし、相望んで屠潰す。瓚其猛銳を奮ひ、志難を達けず。將卒の間に立ち、以て裔の衆を緝らぐ。罷困して相保ち、堅守すること四句、上下力屈し、陷を勅寇に受く。士師奔擾し、軍を棄てて免れんとを争ふ。而も瓚命を沈城に誓ひ、身を飛鏃に佻んず。兵盡き器竭き、旗下に斃る。夫の貞壯の氣、勇烈の志にあらずんば、豈に能く敵に臨んで義を引き、死を以て節に徇ふ者ならんや。景平の元、朝廷聞いて之を傷む。詔あり曰く、故の寧遠司馬、濮陽太守陽瓚、滑臺の逼に、誠を厲まして固く守り、命を投じて節に徇ひ、危きに在りて撓むなし。古の烈士も以て之に加ふるなし。給事中を贈り、遺孤を振卹し、以て存亡を慰むべしと。追寵既に彰れ、人節を慕ふを知る。河汧の間、義風あり。元嘉祚を廓し聖

- 【六】邊事。邊境を守ること。
- 【七】佐。輔佐の官。
- 【八】滑臺。城の名、今の河南滑縣治。
- 【九】獯虜。索虜嗣なり。索虜とは南北朝の時、南朝より北朝を罵りて稱する語、其俗索を以て髪を辨するを以てなり。
- 【一〇】司兗。二州の名。剛剝。傷害なり。
- 【一一】幽并。二州の名、索虜の地なり。
- 【一二】鞏洛。地名、宋の地なり。
- 【一三】將卒。一本將率に作る。
- 【一四】華裔。華は中國。裔は邊遠の地。
- 【一五】勅寇。強賊なり。
- 【一六】奔擾。奔走擾亂なり。
- 【一七】景平。宋の少帝の年號。
- 【一八】河汧。二川の名。
- 【一九】元嘉。宋の文帝の年號。祚。皇位なり。文帝の即位をいふ。

神物を紀し。茂緒を光昭し舊勳を旌録するに速び、苟も貞孝に槩ある者、實に事仁明を感ず。末臣蒙固、側に至訓を聞き、敢て諸を前典に詢りて、之が誄を爲る。其辭に曰く、

貞は常に祐あらず。義は必ず甄るるあり。處父君に勤め、怨賢を登ぐるに在り。苦夷果を致し、子行間に題づく。忠壯の烈、宜なり爾の先よりす。舊勳廢すと雖も、邑氏遂に傳ふ。惟れ邑及び氏、温より陽に徂く。拳猛沈毅、温敏肅良なり。彼の竹柏の雪を負ひ霜を懐くが如く、彼の駢駟の服に配し、

- 【一〇】茂緒。美業なり。
- 【一一】仁明。天子仁明の心。
- 【一二】末臣。微臣といふが如し、延年自ら謂ふ。
- 【一三】處父。穀梁傳に、晉將に狄と戦ばんとし、狐夜姑をして中軍の將とならしむ、趙盾之に佐たり、陽處父曰く不可なり、古は君の臣を使ふや、仁者をして賢者に佐たらしめ、賢者をして仁者に佐たらしめず、今盾は賢、夜姑は仁なり、其れ不可なりと、襄公曰く諾と、公夜姑に謂ひて曰く、吾
- 【一四】汝をして盾に佐たらしむと、處父壇上の事を主る、夜姑人をして之を殺さしむとあり。
- 【一五】苦夷。魯の季氏の臣苦越なり、左傳に、苦越、子を生む、將に事を待ちて之に名づけんとなす、陽州の役に獲たり、之を名づけて陽州といふとあり。
- 【一六】好果。即ち戰勝なり。
- 【一七】行間。兵陣の間。
- 【一八】忠壯。忠は陽處父をいひ、壯は苦夷をいふ。
- 【一九】先。祖先なり。
- 【二〇】邑氏。先代封ぜらるる所の氏をいふ。
- 【二一】温。地名、晉處父を温に封じ、後改めて陽に封ず。
- 【二二】狐續。左傳に賈季、續鞠居をして陽處父を殺さしむとあり、賈季は狐射姑なり。
- 【二三】晉族。陽氏をいふ。
- 【二四】之子。陽瓚をいふ。
- 【二五】拳猛。拳は力なり。
- 【二六】竹柏。堅貞に喩ふ。
- 【二七】駢駟。よく國家の大任に當るに喩ふ。
- 【二八】服。車の中央に在りて轅を夾む兩馬をいふ。

【三七】 衡に驂たるが如し。邊兵 律を喪ひ、王略未だ恢ならず。函陝埋阻し、灑洛蒿萊あり。朔馬
東に驚せ、胡風南に埃つ。路に 歸轡なく、野に 委骸あり。帝圖斯に艱み、兵を簡び才に授く。寔
に陽子に命じ、師に 危臺に佐たらしむ。憬た
る彼の危臺、滑の坳に在り。周衛是れ交り、
鄭翟是れ争ふ。昔は惟れ華國、今は實に 邊亭。
嶽に憑り關を結び、河を負ひ城を築らし、金柝
夜撃ち、和門晝局す。敵を料り難を 厭す、時
れ惟れ陽生。

【大意】 昔陽氏の祖陽處父、君に忠勤し、趙盾
を以て賢となし、之を登げて中軍に將たらしめ、
以て狐射姑に代ふ。狐射姑因つて續鞠居をして
處父を殺さしむ。陽處父の忠貞なるも、終に身
の祐とならず。然も其名は赫赫たり。又魯の苦
夷、陽州の役に戦捷を獲、因つて其子に名づけて陽州といふ。陽瓚の祖忠烈なること此の如し。宜な

- 【三七】 衡。車の横木。驂。服の左右に居る馬、そへうま。
- 【三六】 律。軍法なり。
- 【三五】 函陝。函は函谷關、陝は魏國。
- 【三四】 灑洛。二川の名、宋の地。蒿萊。亂れて通ぜざること。
- 【三三】 朔馬。胡馬なり、索虜の馬。
- 【三二】 歸轡。轡は小棺。
- 【三一】 委骸。棄てられし死骸。
- 【三〇】 危臺。滑臺をいふ。
- 【二九】 憬。遠きこと。
- 【二八】 滑。春秋の國の名。坳。郊外なり。

- 【四七】 周衛云云。史記に、鄭滑に入る、滑命を聴く、已にして反して衛に與す、是に於て鄭滑を伐つ、周の襄王伯備をして滑を請はしむ、鄭の文公聽かず、王怒り翟と鄭を伐ちて克たすとあり。古既に戦争ありしをいふ。
- 【四六】 邊亭。今元魏の據る所とならず。
- 【四五】 金柝。金は刁斗なり、ドラの如きもの、柝は拍子木。
- 【四四】 和門。軍門なり。
- 【四三】 厭。壓に同じ、定むること。

り舊勳廢すと雖も、家系後に傳はるや。處父温に陽に封せられしも、狐射
姑、續鞠居の爲に殺され、其後復た盛ならず。瓚は宋皇の世に功績を立て
勇決にして能く上に事へ、堅貞の志を抱き、國家の大任に當る。索虜の南
侵して中國を亂すや、天子瓚に命じて滑臺を守らしむ。滑の地たる古來交
戦の地たり。昔は中國に屬せしも、今や索虜の據る所とならんとす。折衝
して難を定むるは實に陽瓚に是れ頼る。
涼冬氣勁く、塞外草衰ふ。邊い矣獯虜、障に乗り威を犯す。鳴驥横に
厲み、霜鎬高く聳ぶ。我が河縣を軼ぎ、我が洛畿を俘にす。鋒を擯めて林を
成し、鞍を投じて圍をなす。翳翳たる窮壘、嗷嗷として羣悲す。師老
いて形を變じ、地孤にして援闕なり。卒に 半菽なく、馬實に 拊秣す。
守りて未だ 衝を焚かず、攻めて已に 褐を濡す。烈烈たる陽子、困に在
りて彌々達す。痍傷を勉慰し、饑渴を 拊巡す。力窮すべしと雖も、氣奪ふ
べからず。義邊疆に立ち、身 鋒楛に終る。嗚呼哀しい哉。賁父節を隕し
て、魯人は是れ志し、汧督貞を效して、晉策に記せらる。皇上嘉悼し、思

- 【五二】 障。小城なり。
- 【五一】 霜鎬。かぶら矢。
- 【五〇】 翳翳。賊の爲に蔽はるること。
- 【四九】 嗷嗷。悲愁の聲。
- 【四八】 老。病るること。
- 【四七】 半菽。菽は豆なり。
- 【四六】 拊秣。木を以て口中に横たへ、食はしめざること。
- 【四五】 衝。戰車なり。
- 【四四】 褐。馬衣なり、左傳に、公齊を侵し稟丘の郭を攻む、主人衝を焚き或は馬褐を濡して以て之を授ふとあり。
- 【四三】 拊。拊は撫なり。
- 【四二】 鋒楛。楛は矢なり。
- 【四一】 賁父。馬汧督誅の序を見よ。
- 【四〇】 汧督。馬汧督誅を見よ。
- 【三九】 晉策。晉書なり。

寵異に存す。子に以て之に贈り、言に給事に登げ、爵を疏ち、庸を紀し、孤を恤み嗣を表す。嗟爾義士、没して餘喜あり。嗚呼哀しい哉。

【大意】寒氣加はるに及び索虜益振ひ、來りて我が洛畿を侵略す。滑臺賊の重圍に陥りて援軍來らず。糧食既に盡きて士馬大に窮す。守る者未だ賊の車を焚くに及ばざるに、賊の攻むる者益急なり。陽瓚遂に節を守りて死す。天子之を悼み、爵を分ち功を録し、其遺孤を慰む。瓚死して餘喜ありと謂ふべし。

陶徵士の誄並序

顔延年

夫れ 瑤玉美を致すも、池隍の寶とならず。桂椒芳を信ぶるも、園林の實にあらす。豈に深きを期して遠きを好まんとや。蓋し殊性と云ふのみ。故に足なくして至る者は、物之藉くれればなり。

- 【一】陶徵士。陶淵明隱居し、詔して徵せども就かず、故に徵士といふ。
【二】瑤玉。美玉なり。
【三】池隍。隍はカラホリ。
【四】桂椒。芬香ある木。
【五】瑤玉桂椒は遠くして致し

- 【六】足なく云云。韓詩外傳に、晉の平公河に遊び樂んで曰く、安んぞ賢士を得、之と此を樂まんと、紅人蓋背跪いて

對へて曰く、夫れ珠は江海より出で、玉は崑山より出づ、足なくして至るは主君の好むに由るなり、士足ありて至らざるは、蓋し君主を好むの意なければなり。何ぞ士なきを患へんや、人衆なるを以て

躡に隨つて立つ者は人の薄んずればなり。乃ち巢高の抗行、夷皓の峻節の若きは、故より已に堯禹を父老とし、周漢を錙銖とす。而も世を繇ること浸く遠く、光靈屬せず。菁華をして隱没し、芳流をして歌絶せしむるに至る。其れ惜しからずや。今の作者、人より自ら量をなすと雖も、而も首路塵を同うし、輟塗軌を殊にする者多し。豈に末景を昭にし餘波を泛ぶる所以ならんや。有晉の徵士、尋陽の陶淵明は、南岳の幽居者なり。弱うして弄を好まず、長じて實に素心なり。學は師を稱するにあらず、文は指達に取る。衆に在りて其寡を失はず、言に處して逾其默を見す。少うして貧病、居に僕妾なし。井臼任へず、藜菽給せず。母老い子幼く、

- 【七】物。人なり。
【八】躡に云云。戰國策に、淳于堯一日に七士を獻す、齊の宣王曰く、百代一聖躡に隨つて立つが若し、今何ぞ士の多きやとあり。
【九】巢高。巢父は堯の時の隱者、伯成子高は禹の時の隱者。抗行。高尚なる行。
【一〇】夷皓。伯夷は周の時の隱者、四皓は漢の時の隱者。

- 【二】父老。野人といふが如し、輕んずること。
【三】錙銖。輕んずること。
【三】光靈。光景神靈相連屬せすとあり。
【四】菁華。英華なり。
【五】作者。隱逸の行を爲す者。
【六】首路。始めは古人と其風を同じうするも。
【七】輟塗。中途にして止め、古人と其風を異にすること。
【八】末景。古人の餘景。

- 【九】有晉。晉なり、有字意義なし。
【一〇】尋陽。郡名。
【一〇】弄。戲なり。
【一三】素心。心に飾なきなり。
【一四】專師なきをいふ。
【一五】指達。旨意の通すること。
【一六】二句、活計の乏しきないふ。
【一六】藜菽。藜は草の名、あかざ。菽は豆。

就養勤置す。遠く田生親に致すの議を惟ひ、追ひて毛子檄を捧ぐるの懷を悟る。初め州府を辭

し、三命の後、彭澤令となる。道物に偶せず、官を棄て好に従ふ。遂に乃ち體を世紛に解き、志を區外に結び、跡を定め棲を深うし、是に於てか遠し。畦に灌ぎ蔬を鬻ぎ、魚菽の祭に供するを爲し、絢を織り、蕭を緯み、以て糧粒の費に充つ。心異書を好み、性酒徳を樂み、煩促を簡棄し、省曠を就成す。殆ど所謂國爵貴を屏け、

【一〇】 就養。禮記に、親の左右に事へ、就養方ありとあり。勤置。苦乏なり。

【一一】 田生。韓詩外傳に、齊の宣王田過に謂つて曰く、吾聞く儒者は親の喪三年なりと、君と父と孰れか重きと、田過對へて曰く、殆ど父の重きに如かずと、王忿りて曰く、則ち曷爲れぞ親を去りて君に事ふると、對へて曰く、君の土地にあらずんば以て吾が親を置くなし、君の祿にあらずんば以て吾が親を養ふなし、君の爵にあらずんば以て吾が親を尊顯にするなし、之を君に受けて之を親に致す、凡そ君に事ふる者は以て親の爲にするなりと、とあり。

【一二】 毛生。後漢書に、毛義は孝を以て稱せらる、張奉其名を慕ひ往いて之を候す、坐定りて府檄たまたま到り、義を以て守令とす、義檄を捧げて入り、喜顔色に動く、奉心に之を賤む、義の母死するに及び、官を去り服を行ひ、屢徵さるれども至らず、張奉歎じて曰く、賢者は固に測るべからず、往日の喜は母の爲に屈するなりと、とあり。

【一三】 彭澤。縣の名、令は其長官。

【一四】 區外。世外なり。

【一五】 魚菽。公羊傳に、齊の大陳乞曰く、常の母魚菽の祭ありとあり、祭に魚と豆とを用ふ、儉なり。

【一六】 蕭。蒿なり、之を織りて簾となすなり。

【一七】 省曠。恬淡なり。

【一八】 國爵。莊子に、至貴は國爵之を屏け、至富は國財之を屏くとあり。

【一九】 家人。莊子に、故に聖人は其の窮するや、家人をして貧を忘れしめ、其の達するや、王公をして爵祿を忘れしむとあり。

家人貧を忘るる者か。詔ありて著作郎に徵す。疾と稱して到らず。春秋若干。元嘉四年月日、尋陽縣の某里に卒す。近識は悲悼し、遠士は情を傷ましむ。冥默福應、嗚呼淑貞なり。夫れ實は誄を以て華に、名は諡に由りて高し。苟も允に徳義ならば、貴賤何ぞ算へん。若し其れ寛樂令終の美、好廉克己の操、諡典に合ふあり、前志に愆ふなし。故に諸友好に詢り、宜しく諡して靖節徵士といふべし。其辭に曰く、

物、特生を尙ぶ。人固より介立す。豈に伊れ時に違ふならんや、曷ぞ世及と云はん。嗟乎、若士、古を望んで遙に集る。此、洪族を頼し、彼の名級を蔑す。睦親の行、至自にして敦むるにあらず。然諾の信、布言より重し。廉深簡

【二〇】 詔。宋の高祖武帝の詔。

【二一】 春秋。年輪なり。

【二二】 元嘉。宋の文帝の年號。

【二三】 寛樂令終。諡法に寛樂令終を靖といふとあり、令終は終を善くすること。

【二四】 好廉克己。諡法に、好廉克己を節といふとあり。

【二五】 諡典。諡法なり。

【二六】 前志。古書なり。

【二七】 特生。一本に孤生に作る、特は獨なり。

【二八】 介立。特立なり。

【二九】 世及。世世相繼いで出づること。

【三〇】 若士。陶淵明をいふ。

【三一】 洪族。大族なり、大司馬陶侃の孫なるをいふ。頼、藏なり。有すること。

【三二】 名級。名位といふが如し。

この好み、身を薄くし志を厚くす。世を禮を虚にし、州壤風を推す。孝は惟れ、義養、道必ず邦を懷く。人の葬を乗る、隘と不恭とならず。爵下士に同じく、祿上農に等し。度量鈞うし難く、進退限るべし。長卿官を棄て、稚賓自ら免す。子の之を悟る、何ぞ悟るの辨なる。詩を賦して歸來し、高蹈して獨り善くす。亦既に超曠、適くとして心に非るなし。流を舊轍に汲み、宇を家林に葺く。晨煙暮靄、春煦秋陰、書を陳べ卷を綴り、置酒絃琴す。居勤儉を備へ、躬貧病を兼ぬ。人其憂に否へず。子は其命を然りとす。隱約閑に就き、遷延聘を辭す。直に明なるのみにあらず、是れ惟れ道性なり。糾纏幹流し、冥漠報施す。孰か云ふ仁に與すと、實に明智を

- 【三】世。當時の權位ある者。禮を虚にする。心を虚にして之を禮すること。
- 【四】州。州郡といふが如し。
- 【五】義養。善く親を養ふこと。
- 【六】人。陶淵明を指す。葬。道なり。
- 【七】隘。褊狭にして人を容れざること。孟子に伯夷は隘なり、柳下惠は不恭なり、隘と不恭とは君子は由らずとあり。
- 【八】長卿。司馬相如なり、漢書に、司馬長卿病んで免じ、梁に客遊し、諸侯の遊士と居るを得たりとあり。
- 【九】稚賓。漢書に、清居の士、太原には則ち郡相、字は稚賓、州郡の茂才に擧げらる、數病んで官を去るとあり。
- 【一〇】歸來。來は助辭、故郷に歸ること、淵明歸去來辭を作りて故郷に歸臥せり。
- 【一一】高蹈。潔く官を去ること、彭澤令を去りしをいふ。
- 【一二】舊轍。故山なり。
- 【一三】隱約。儉素なり、著作郎に徵されしも辭せしこと。
- 【一四】糾纏。三合繩なり。幹。轉なり。騶鳥賦に、幹流して遷り、或は推して遷る、夫れ禍と福と、何ぞ糾纏に異らんとあり。
- 【一五】冥漠。暗くして明ならざること。報施。天の人に報ゆること。
- 【一六】明智。老子を指して言ふ、老子に天道親なし、常に善人に與すとあり。

疑ふ。天蓋し高しと謂ふ、胡ぞ斯義を譽る。信を履む曷ぞ憑まん、頓を思ふ何ぞ寘かん。年。中身に在り、疾維れ。疢疾。死を視ること歸するが如く、凶に臨んで吉なるが若し。藥劑嘗めず、禱祠恤ふるにあらず。幽に俵ひ終を告げ、和を懷いて長く畢る。嗚呼哀しい哉。敬んで靖節を述べ、式で遺占を尊ぶ。存して豊を願はず、没して贍を求むるなし。訃を省き、賻を却け、哀を軽くし、斂を薄くす。壞に遭ひて以て穿ち、旋葬して窆す。嗚呼哀しい哉。

【大意】人宜しく孤特なるべし。然れども隱逸の士には容易に遇ひ難し。何ぞ相繼いで世に出でん。我が淵明の如きは、獨り遠く古逸人を慕ひ、族爵を視ること塵土の如し。何ぞ其の高尙なるや。睦親の行は天性より出づ。勉強して爲すにあらず。然諾を重んずること今布にまさり、其心和平にして廉潔なり。凡そ人俗に依りて行へば、必ず之を譏るに雷同を以てし、俗に違へば之を譏るに異を好むを以てす。我身に此一あれば、必ず譏議して黙視することなし。豈に淵明の己の心に任せ世事を棄つるに如かんや。權勢の人心を虚にして之を禮し、州郡其風に推服す。淵明親を養ふが爲に、枉げて彭澤の令となる。然も位卑くして祿薄し、因つ

- 【一七】中身。中年なり、中壽なり。
- 【一八】疢疾。瘧疾なり。
- 【一九】禱祠。病氣の平癒を神に祈ること。
- 【二〇】幽。幽冥即ち死。
- 【二一】和。平生の志なり。
- 【二二】遺占。遺命なり。
- 【二三】贍。豊なること。
- 【二四】賻。葬式の時の贈物。
- 【二五】斂。棺に納むること。
- 【二六】旋葬。疾く葬る、窆、棺を地に埋むること。

て長卿、稚賓の爲す所に傲ひ、歸去來の辭を賦して故山に歸隱す。詩酒を侶とし琴書を樂み、貧に居て憂へず。著作郎に徵されるれども就かず。雷に賢明なるのみにあらず、是れ固に道性なり。夫れ禍福は糾へる繩の如く、天の報施は人の能く測るべきにあらず。老子は天道親なし、常に善人に與すといへるも、此言大に疑ふべきなり。天は高くして卑きに聽くといふも、何ぞ義に爽ひて善人に與せざる。淵明中年にして病む。然も命に安んじて藥を嘗め神に禱らず。和平の志を抱いて死に就けり。其の死するや亦遺命して葬祭を薄くせしむ。高士と謂ふべし。

深心(七) 往を追ひ、遠情(七) 化を逐ふ。爾の(七) 介居せしより、我が暇多きに及ぶ。伊れ好の洽き、(八) 閤を接し舍を鄰す。宵は盤み晝は憩ひ、舟にあらず駕にあらず。念ふ昔宴私せしとき、觴を擧げて相誨ふ。獨正者は危く、至方は則ち闕る。哲人の(九) 卷舒、布いて(一〇) 前載に在り。鑒を取ることを遠からずと。吾が(一一) 規子佩ぶ。爾實に愀然たり、(一二) 中言にして發す。衆に違へば尤を速き、風に迂へば先づ斃る。身才實にあらず、榮聲歇むありと。(一三) 歡音永い矣。誰か余が闕を箴めん。嗚呼哀しい哉。仁にして終り、

【七】 往。往日の交遊。
【七】 化。淵明の死。
【七】 介居。獨居、即ち隱居なり。
【八】 閤。門なり。
【八】 卷舒。進退といふが如し、論語に蘧伯玉邦道あれば則ち仕へ道なければ則ち卷いて之を懷にすべしとあるが如し。
【八】 前載。前代の載籍、即ち古書。
【八】 規。諫戒なり。佩。よく服すること。
【八】 中言。言の中途。
【八】 歡音。美言なり。

智にして斃る。(一) 黔婁既に没し、(二) 展禽亦逝きぬ。其れ先生に在り、塵を往世に同うす。此の靖節を旌し、彼の康惠に加ふ。嗚呼哀しい哉。

【大意】 吾れ往日の交遊を追懷し、淵明の死を悲むこと深し。淵明の隱居するや、吾亦官を退いて閑居す。故に相鄰して住み、手を携へて相隨ふ。昔宴私せし時、吾れ淵明を戒めて曰く、方正の行をなす者は必ず時俗の惡む所となる、宜しく時に隨つて卷舒すべしと。淵明よく吾が戒に服す。淵明亦余が言を遮り、余を戒めて曰く、衆に違ひ世に忤へば必ず患害に罹る。身と才とは至實の具にあらず、榮譽は時ありて滅ぶと。蓋し余の才を恃んで物に傲り、寵を憑んで人を凌ぐを戒めしなり。ああ淵明死せり。誰か復た余を誡むる者あらん。哀しい哉。古來仁智の人皆死を免れず。黔婁、展禽亦皆歿せり。淵明百世の後に生れて其跡を同うす。ああ哀しい哉。

宋の(三) 孝武の(三) 宣貴妃の誄 竝序

謝 希 逸

惟れ 大明六年夏四月壬子、宣貴妃薨す。

【一】 孝武。孝武帝。
【二】 宣貴妃。殷氏。諡して宣。
【三】 大明。孝武帝の年號。

【四】 律谷。黍谷なり、劉向別錄に、鄒衍燕に在り、谷あり

律谷煖を罷め、
龍郷 曉を輟め、
照車魏を去り、
聯城趙を辭す。皇帝
掖殿の既に闕なる
を痛み、泉途の已
に宮たるを悼み、
步檐を巡りて、蕙
路に臨み、重陽に
集りて、椒風を望
む。嗚呼哀しい哉。
天寵方に隆に、
王

- 【一】 寒くして五穀を生ぜず、鄒衍律を吹いて之を温め、黍を生ずるに至るとあり、以下皆貴妃薨じて帝に離るるに喩ふ。
- 【二】 龍郷。郷の名、鳴鶴を出す。
- 【三】 照車。魏の惠王の珠、車の前後十二乗を照すもの。
- 【四】 聯城。趙の惠文王の壁、秦王十五城を以て易へんことを願ひしもの。
- 【五】 掖殿。後宮なり、貴妃の居りし殿。
- 【六】 泉途。黄泉なり。
- 【七】 步檐。長砌なり。
- 【八】 蕙路。蕙は香草なり、西

- 【一】 都賦に後宮には則ち蘭林蕙草ありとあり。
- 【二】 重陽。九月九日をいふ、楚辭に重陽に集りて帝宮に入るとあるを用ふ。
- 【三】 椒風。漢の董賢の妹昭儀となり、其舍を號して椒風といふ。
- 【四】 王姫。皇女なり、貴妃弟二皇女を生む、帝方に貴妃を寵す、妃の女を以て諸侯に降嫁せしめんとす。
- 【五】 蕭雅。蕭は敬、雅は和なり、王姫の徳をいふ、詩經召南何彼穠矣篇に見ぞ蕭雅ならざらん、王姫の車とあり。景を揆

- 【一】 日を探んで降嫁すること。
- 【二】 陟岵。山に登ること、詩經風陟岵篇に、彼の岵に陟り、母を瞻望すとあり、王姫將に嫁せんとして宜貴妃の薨せしをいふ。
- 【三】 喪淑。淑は善なり、善人を失ひしこと。
- 【四】 賈庇。賈は隕に同じ、失ふと。庇は庇護者なり、一本に庇に作る、王姫の家にて母を失ひしこと。
- 【五】 旂旒。旂旒なり、貴妃の功德を旂旒に書すること。
- 【六】 鐘萬。徳を鐘に銘し萬舞の中に傳ふること。

玄丘煙燼し、
瑤臺芬を降し、
高唐雨を溼し、
巫山雲を鬱め、
誕に
蘭儀を發し、
光に
玉度を

- 【一】 玄丘。契の母簡狄の居りし山、列女傳に見ゆ。煙燼。水氣の蒸升する貌。
- 【二】 瑤臺。美女の居りし處、楚辭に、瑤臺の偃蹇たるを望み、有娥の佚女を見る、とあり。
- 【三】 高唐。高唐賦に昔先王高唐に遊び、夢に一婦人を見る、曰く妾は巫山の陽、高丘の岨に在り、且には朝雲となり暮には行雨となるとあり。
- 【四】 蘭儀。美しき容儀。
- 【五】 玉度。美しき風度。
- 【六】 娥。月中の嫦娥。
- 【七】 嫫。星の名、既に嫁せる

- 【一】 女なり。
- 【二】 素里。素は舊なり、故郷なり。
- 【三】 宸軒。天子の宮殿。
- 【四】 綺紵。葛衣なり、綺紵を織るは婦人の職なり、詳に詩經周南葛覃篇に見ゆ。
- 【五】 蘋蘩。水草の名、之を探りて祭を助くるは婦人の職なり、詳に詩經召南采蘋篇に見ゆ。
- 【六】 嫫。列女傳に、禹塗山氏の女を娶りて妃となす、既に啓を生み、教訓を明にすとあり、嫫は禹の姓。
- 【七】 堯門。漢書に、孝武の鉤

- 【一】 弋趙婕妤は昭帝の母なり、妊身十四月にして乃ち生む、帝曰く、昔聞く堯十四月にして生ると、今鉤也亦然りと、乃ち其門を名づけて堯母門といふとあり。
- 【二】 網繆。逍遙といふが如し。
- 【三】 經闈。經書を講ずる處。
- 【四】 容與。從容に同じ。
- 【五】 風。詩經の國風。
- 【六】 黍。易經の象辭。
- 【七】 律。音律なり。機。微なり。
- 【八】 冬愛。冬の日をいふ、左傳注に、冬日は愛すべく、夏日は畏るべしとあり。

容與し、
風を陳べ藻を緝め、
家に臨み微を分ち、
藝に遊び數を殫し、
律を撫し機を窮め、
冬愛

に躊躇し、秋暉に悵悵。展に之の如き華、寔に邦の媛なり。顯陽に敬懃し、崇徳に肅恭し、榮を奉じて維れ約、慈を承けて以て遜ひ、下に違ぼして和を延き、朋に臨んで怨を違る。祥靈社を集め、慶謁祥を迎ふ。皇胤 璿式あり、帝女 金相あり。附を聯ね穎を齊うし、夢を接へ芳を均うし、以て藩とし以て牧とし、代を燭し梁を輝かす。視朔氣を書し、觀臺禮を告げ、八頌和を扇し、六祈滲を輟め、衡總容を滅し、翬翟衽を毀り、綵を瑤光に掩ひ、華を紫禁に收む。嗚呼哀しい哉。

【大意】 貴妃は古來神女之美を悉く一身に集め、容儀淑美にして嫦娥、婺女の如し。幼にして徳を養ひ、長じて禁中に入り、よく婦人の職

【四〇】 秋暉。秋月なり。悵悵。かなしむこと。
【四一】 媛。美女なり。
【四二】 顯陽。皇后をいふ、宋書に、文帝の路淑媛は顯陽殿に居り、崇憲皇后と號すとあり。
【四三】 祥靈。善き報い。
【四四】 慶謁。盛なる善行。
【四五】 璿式。玉の如き法度。宋書に宣貴妃は始平王子鸞、晉陵王子雲、及び第二皇女を生むとあり。
【四六】 金相。貴き質なり。
【四七】 附。夢なり。穎。穗なり。
【四八】 代。梁。國の名、漢書に文帝武を立てて代王となし、參を以て梁王となすとあり。
【四九】 視朔。雲氣を望みて吉凶を判する職。

【五〇】 觀臺。雲氣を望觀する臺。災なり。
【五一】 八頌。周禮に、占人は八筮を以て八氣を占ひ、以て吉凶を視るを掌るとあり。和は吉祥なり、凶兆既に生じ、卜筮吉ならざるをいふ。
【五二】 六祈。周禮に、太祝は六祈を掌るとあり。滲。福祉に喩ふ。
【五三】 衡總。王後の首服に衡あり、玉を以て作り副の兩旁に垂る。總は結束なり、後に垂れて飾となす、詳に周禮及び内則に見ゆ。此二句貴妃の薨をいふ。
【五四】 翬翟。王後の服飾。衽。襟なり。
【五五】 瑤光。貴妃の殿の名。
【五六】 紫禁。天子の宮殿。

を務め、詩書を修めて善言を見し、經史に精通し、文藻に長じ、易理に精しく、冬日を詠じ秋月を賦す。よく皇后に事へ、君寵を蒙りて傲らず。衆妾に接して惠あり。是を以て身慶福を享け、子女を生みて皆金玉の美あ、出でて藩王となれり。然も不幸にして凶兆既に生じ、卜筮吉ならず、祈禱效あらず。溘然して薨じぬ。哀しい哉。帷軒夕に改り、輶輅晨に遷る。離宮天邃く、別殿雲懸なり。靈衣虚しく襲り、組帳空しく煙り、巾に餘軸を見、匣に遺絃あり。嗚呼哀しい哉。氣朔を移して、羅紈を變じ、白露凝りて歲將に闌ならんとす。庭樹驚いて中帷響き、金釭暖くして玉座寒し。純孝 擗ちて其れ俱に毀れ、共氣摧けて其れ同じく 藥たり。昊天を仰ぐも報するなく、凱風を怨んで徒に攀つ。與善に茫味し、餘慶に寂寥たり。喪哀に過ぎ、棘なれば實に性を滅す。世

【五七】 帷軒。貴妃の居りし處。
【五八】 輶輅。婦人の乗る車。
【五九】 靈衣。靈筵の衣。
【六〇】 組帳。とばり。
【六一】 巾。箱なり。餘軸。軸は書籍なり。
【六二】 氣朔。氣節なり。
【六三】 羅紈。うすぎぬ。
【六四】 金釭。燈明なり。
【六五】 玉座。靈座なり。
【六六】 純孝。皇子をいふ。
【六七】 共氣。同氣に同じ、貴妃の兄弟をいふ。
【六八】 藥。瘞すること。
【六九】 昊天。天なり。
【七〇】 凱風。寛仁の父母に喩ふ、詩經に凱風篇あり。
【七一】 與善。老子に天道親なし、常に善人に與すとあり。茫味。幽暗なり。
【七二】 餘慶。易經に積善の家に必ず餘慶ありとあり。寂寥。虚無なり。
【七三】 冲華。至美なり。皇子をいふ。此二句は貴妃薨じて皇子子雲哀に勝へず、又薨ぜしをいふ。
【七四】 淵令。深善なり、亦皇子をいふ。

を虚うす。嗚呼哀しい哉。題湊既に肅み、龜筮既に辰あり。階には兩奠を撤し、庭には雙輜を引く。維れ慕ひ維れ愛む。日に子曰に身皇情を容物に慟ましめ、列辟を上旻に崩す。徽章を崇てて、哀甸を出で、殊策を照かして、城闈を去る。嗚呼哀しい哉。

【大意】 宮居忽ち趣を異にし、魂魄遠く去り、

帳帷空しく存し、ただ琴書を留むるのみ。氣節

に随つて綺羅變じ、貴妃は夏薨す、秋に至りて

衣物の變りしこと、歲漸く晚れんとす。悲風帳

帷を拂ひ、燈明暗くして靈座寒し。皇子相俱に

痛み、兄弟同じく傷み、天に呼ぶも答へず、徒

に母の死を怨む。天は善人に與し、積善なれば

餘慶ありといふも、今貴妃早世すること此の如

し。此言の茫昧にして驗なきを知る。且つ皇子子雲貴妃の薨を悲み、遂に亦薨す。今棺槨既に整ひ、

葬祭の日を擇び、柩車竝に帝京を發す。哀しい哉。

建春を経て右轉し、閶闔に循つて逕に渡る。旌は飛飛に委鬱として、龍は歩歩に透遲たり。

【七五】 題湊。棺なり。

【七六】 龜筮。占を以て葬を擇ぶこと。辰。時日なり。

【七七】 兩奠。兩妃と子雲との祭。兩人同時に葬るなり。

【七八】 雙輜。輜は柩車。子。子雲を指す。身。貴妃を指す。

【八〇】 容物。葬式の儀物品物。列辟。諸侯なり。上旻。天なり。

【八二】 徽章。葬式の旗。

【八三】 哀甸。帝畿なり。

【八四】 殊策。殊に策書を加へて其徳を誅すること。

【八五】 城闈。城曲の重門。

【八六】 建春。洛陽城の名。

【八七】 閶闔。前に同じ。

【八八】 委鬱。飄揚する貌。

【八九】 龍。馬なり。透遲。徐行の貌。

楚挽を槐風に響らし、邊簫を松霧に喝らし、姑絲を涉りて環迴し、樂池を望んで顧慕す。嗚呼哀しい哉。晨輻鳳を解き、曉蓋金を俄け、山庭日を寝め、隧路陰を抽んで、重局闕ちて燈已に黯く、中泉寂として此夜深げ、神躬を壤末に銷し、靈魄を天濤に散す。響氣に乗り蘭風に馭り、徳遠きあるも聲窮なし。嗚呼哀しい哉。

【大意】 乃ち建春門を経て右に轉じ、閶闔門に沿ひて逕に進む。銘旗風に翻り、馬徐行し、挽歌を奏し簫を吹く。葬既に終りて車は鳳飾を解き、蓋は金爪を傾く。墓門已に閉ちて墓中曉くる時なく、躬は永く地中に在り、魂は遠く天涯に在り。ただ貴妃の徳響蘭氣の如く、風に乗り遠く傳はりて窮なきのみ。

【九〇】 楚挽。悲しげなる挽歌。
【九一】 邊簫。邊地にて吹く簫。
【九二】 姑絲。穆天子傳に、盛姫亡す、天子乃ち樂池の南に葬る、姑絲の水を用ひて以て喪車を圍すとあり。
【九三】 晨輻。輻は喪車なり、葬既に終る、故に鳳の飾を解くなり。
【九四】 曉蓋。蓋は車蓋なり、金を以て爪となす。

【九五】 山庭。山陵の庭、日影を寢伏す。
【九六】 隧路。墓道陰氣を呈するなり。
【九七】 重局。墓門なり。
【九八】 神躬。貴妃の身をいふ。
【九九】 天濤。天涯なり。
【一〇〇】 響。貴妃の徳響。

哀

永逝を哀む文

潘安仁

啓夕宵興くるも、絶緒を悲んで承くるなし。
 龍輦を門側に俄け、嗟時を俟ちて將に升らんとす。嫂姪 悼惶し、慈姑垂矜す。鳴雞を聞いて朝を戒むれば、咸驚號して膺を撫つ。逝日長くして生年淺く、憂患衆くして歡樂尠し。彼遙に離居を思ひ、河の廣くして宋の遠きを歎ず。今奈何ぞ一舉し、邈として終天反らざる。余が哀を祖の晨に盡し、明燎を揚げて 靈輦を援く。房帷を撤して庭筵を席き、爵觴を擧げて永遷を告ぐ。悽切にして秋を増し、俯仰して涙を揮ふ。孤魂を想ひて舊宇を眷みれば、視ること倏忽にし

- 【一】 永逝。死なり、此れ妻の死を傷みし詞なり。
- 【二】 啓夕。將に殯を啓かんとする前夜なり。
- 【三】 絶緒。死なり。
- 【四】 龍輦。喪車なり。
- 【五】 悼惶。周章といふが如し。
- 【六】 慈姑。夫の母、即ち潘岳の母。垂矜。悲しむこと。
- 【七】 彼。古人を指す。
- 【八】 毛詩の序に、河廣は宋の襄公の母衛に歸り、思ひて止

- 【九】 終天。永久に。
- 【一〇】 祖。死者に別るる祭。
- 【一一】 明燎。かがり火。
- 【一二】 靈輦。殯車なり。
- 【一三】 爵觴。爵は酒を以て地に沃ぐこと。

て 髣髴たるが若し。徒に髣髴として 慮に在り、耳目の一たび遇はんことを靡ひ、駕を停めて淹留し、故處に徘徊す。周く求むるも何ぞ獲ん。身を引いて當に去るべし。華輦を去りて初めて邁く。馬首を廻らして旆を旋らす。風 泠冷として帷に入り、雲 霏霏として蓋を承く。鳥翼を俛れて林を忘れ、魚沫を仰いで瀬を失ふ。

【大意】 啓殯の夜興きて喪事を執るも、悲に満ちて事を執る能はず。喪車を門側に傾け置き、將に葬時を待ちて之を用ひんとす。嫂姪周章して喪事を助け、慈姑亦哀憐を垂る。雞鳴を聞いて曉に至り、皆胸を撫でて悲み號く。妻の我に嫁するや憂患常に多くして歡樂少かりき。昔は離居を悲み、河の廣くして宋の遠きを歎せし者あり。今何ぞ我を棄て一去して復た反らざる。祖祭を行ひて悲を盡し、燎を焚いて喪車を引く。舊室を願れば其人猶は在るが如し。因つて駕を留めて徘徊するも、其人復た見るべからず。喪車初めて往くや、風雲相俱に悲み、魚鳥も爲に感傷す。

悽悽として 遲遲たり。吉路に遵つて 凶歸す。其人を已に滅せるに思ひ、餘跡を未だ夷れざるに覽る。昔は塗を同うし今は世を異にす。舊歡を憶ひて新悲を増す。原隰を畔なしと謂ひ、川流を岸なし

- 【一四】 髣髴。平生の時に似たるをいふ。
- 【一五】 慮。心なり。
- 【一六】 華輦。喪車なり。
- 【一七】 泠冷。風の聲。帷。車帷なり。
- 【一八】 霏霏。雲の起る貌。蓋。車蓋なり。
- 【一九】 遲遲。ゆるゆると行く貌。
- 【二〇】 凶歸。平生の吉路、今凶を以て行くなり。
- 【二一】 原隰。下濕の地を隰といふ。

と謂ひ、山を望めば、(三) 寥廓たり、水に臨めば、(三) 浩汗たり。天日を視れば、(四) 蒼茫たり、邑里に面へば、(五) 蕭散たり。外物の或は改れるにあらず、固より歡哀情換ればなり。嗟、(三) 潜隧既に敝なり。將に形を長往に送らんとす。(六) 蘭房繁華を委て、窮泉朽壤に襲る。(七) 中慕叫して擗擗し、(八) 之子宅兆に降る。(九) 靈柩を撫して幽房に訣るれば、棺、(十) 冥冥として、(十一) 埏窆竊たり。戸闔ちて燈滅ゆ。夜何の時か復た曉けん。歸りて、(十二) 殯宮に反哭すれば、聲止むあれども哀終るなし。是か非か何ぞ違あらん。一たび目中に遇はんことを趣む。既に目に遇ふも、(十三) 兆なし。曾て寤寐にも夢みず。既に、(十四) 家道を顧瞻し、(十五) 長に心を爾の躬に寄す。重ねて曰く、已ぬる矣。此れ蓋し新哀の情然るのみ。渠之を懷ふこと其れ幾何ぞ、庶くは、(十六) 莊子に愧づるなからんことを。

【大意】乃ち遲遲として往く。生時の歡を憶ひて死後の悲を増し、道途の極めて長きを感じ。山川愁を帯び天日光なし。見る者の改れるにあ

- 【一】 寥廓。空虚なり。
- 【二】 浩汗。廣大の貌。
- 【三】 蒼茫。色なき貌。
- 【四】 蕭散。人なくして淋しき貌。
- 【五】 潜隧。墓穴なり。
- 【六】 形。妻の身なり。
- 【七】 蘭房繁華。妻の身に喻ふ。
- 【八】 襲。入るること。
- 【九】 中。心中なり。擗擗。胸を打つこと。
- 【十】 之子。妻をいふ。宅兆。墓なり。
- 【十一】 靈柩。棺なり。幽房。墓なり。
- 【十二】 冥冥。深く暗き貌。
- 【十三】 窆。墓道なり。窆窆。幽深の貌。
- 【十四】 殯宮。釋名に西壁の下に於て之を塗るを殯といふとあり、我が佛壇の如し。反哭。墓より歸りて佛壇に哭する也。
- 【十五】 兆。形なり。
- 【十六】 家道。夫婦の交、易經に「夫は夫たり婦は婦たり、而して家道正し」とあり。

惟れ、(一) 元嘉十七年七月二十六日、(二) 大行皇后顯陽殿に崩す。

宋の文皇帝の元皇后哀策文 竝序

顔 延 年

ならず、我が心の哀めばなり。墓穴既に開きて、茲に其身を瘞む。既に長夜の眠に就きて、又曉くるの期なし。反りて殯宮に哭すれば、聲止むも哀限なし。偏に其形貌を慕ひ其是非を分つに暇あらず、ただ一たび相見んことを冀ふ。目之に遇ふが如きも、絶えて其形を見ず。又曾て夢に入りて來らず。ただ舊歡を憶ひて妻を思ふのみ。然りと雖も我の妻を思ふは、此れ新哀の情然るのみ。必ず之を大道に斷ち、天命を悟りて悲を忘れ、莊子に愧づるなからんことを期す。

- 【一】 莊子。莊子に曰く、莊子の妻死す、恵子之を弔す、則ち方に箕踞して盆を鼓して歌ふ。恵子曰く、人と居て子を長じ身を老す、死して哭せずんば亦足らん、又盆を鼓して歌ふ、已に甚しからずやと。莊子曰く、然らず、是れ其の始めて死するや、我獨り何ぞ樂
- 然たるなからんや、其始を祭するに、本より生なし、ただに生なきのみにあらず、本より形なし、ただに形なきのみにあらず、本より氣なし、人且つ儼然として巨室に寝れ、我嗷嗷として隨つて之を哭せば、自ら以て命に通ぜずとなす、故に止むと、とあり。

【一】 元皇后。姓は袁氏、諱は齊嬀、陳郡の人、左光祿大夫敬公湛の庶女なり、文帝に適

【二】 元嘉。宋の文帝の年號。

【三】 大行皇后。崩じて未だ諡を定めざるを大行といふ。

粵に九月二十七日、將に長寧陵に遷座せんしとす。禮なり。龍軼、綰を纏け、容翟駟を結び、皇塗昭列し、神路幽嚴なり。皇帝親しく祖饋に臨み、躬から宵載を瞻る。遺儀を組旒に飾り、祖音を珩珮に淪む。黼筵の御を移せるを悲み、輦綸の重ねて晦きを痛み、輿を客位に降し、奠を殯階に撤す。乃ち史臣に命じ、徳を累ね、懷を述べしむ。其辭に曰く、

- 【四】龍軼。棺を支ふるもの、其形長牀の如く、椁の前後を穿ち著け、車の軸に關す。綰。棺を引くなは。
- 【五】容翟。飾れる車。駟。馬なり。
- 【六】皇塗。塗は途なり。昭列。一本に昭烈に作る、光明なり。
- 【七】祖饋。死者を送る祭。
- 【八】宵載。夜轎車に載するこ。
- 【九】組旒。旌旗なり。此二句皇后崩じて旌旗空しく残り、珩玉の音絶ゆるをいふ。
- 【一〇】祖音。歩行の音。珩珮。腰に佩ぶる玉。
- 【一一】黼筵。皇后の敷物。御座なり。
- 【一二】輦綸。雉及び鶴を畫ける皇后の衣。
- 【一三】輿。輿を載する車。客位。西なり、禮記に、周人ハ西階の上に殯す、則ち猶ほ之を賓とするが如しとあり。
- 【一四】奠。祭なり。殯階。西階の上なり。
- 【一五】徳。皇后の徳なり、周禮の注に、誅とは生時の徳行を積累し、之に命を賜ひて其辭を爲らしむるを謂ふとあり。
- 【一六】懷。文帝の心なり。
- 【一七】圓精。天をいふ。
- 【一八】方祇。地をいふ。
- 【一九】世族。名家なり。
- 【二〇】景胄。大族なり、世族に同じ。
- 【二一】玉繩。宮殿の名。
- 【二二】昌暉。盛光なり。陰。妻の位なり。
- 【二三】柔明。妻たるの道なり。

待年より、金聲夙に振ふ。亦既に、素章絢を増す。象服是れ加へ、言に觀るに維れ則あり。我が王風をして、始めて、熾徳を基せしむ。惠問川流し、芳猷淵塞す。江に方し漢を泳ぎ、謠を南國に載す。伊れ昔、造さざる、鴻化中ごろ微なり。用て、寶命を集め、仰いで、天機に陟る。位を公宮に釋て、曜を紫闈に登す。皇姑に欽若し、允に前徽を勉む。孝、寧親に達し、敬、宗祀を行ひ、才淑を進思し、圖史を傍綜す。發音詠に在り、動容紀を成す。壺政穆宣し、房樂韶理す。坤則

- 【一四】待年。父母の家に居りて嫁するを待つ間。
- 【一五】金聲。美言なり。
- 【一六】行。嫁すること。
- 【一七】素章。素は白なり。絢。文彩なり。
- 【一八】象服。法服なり。
- 【一九】熾徳。婦徳なり。
- 【二〇】惠問。美譽なり。川流。川の如く流る。
- 【二一】芳猷。美思なり。淵塞。廣深なり。
- 【二二】江漢。二川の名、詩經に、漢の廣き泳ぐべからず、江の永き、方すべからずとあり。
- 【二三】南國。南方の地方、毛詩

- 【二四】待年。父母の家に居りて嫁するを待つ間。
- 【二五】鴻化。鴻は大なり。治化をいふ。
- 【二六】寶命。天の大命。
- 【二七】天機。天子の位。
- 【二八】紫闈。天子の宮殿。
- 【二九】皇姑。皇太后。欽若。つしみ順ふ。
- 【三〇】前徽。皇太后の美行。
- 【三一】寧親。父母を歸寧す。
- 【三二】宗祀。祭祀なり、夫を助

- 【三三】才淑。賢才なり。毛詩の序に、關雎は淑女を得んことを樂み、賢才を進めんことを思ふとあり。
- 【三四】圖史。書史なり。
- 【三五】發音。詩を詠すること。
- 【三六】動容。起居なり。紀。條理なり。
- 【三七】壺政。宮中の政。穆宣。和らぎ明なること。
- 【三八】房樂。房中樂なり、婦人の諷誦して以て夫に事ふるもの。韶理。繼ぎ治むること。
- 【三九】坤則。婦道なり。

順成し、星軒潤飾す。徳の届る所、惟れ深くして必ず測る。下は震騰を節し、上は朧側を清くす。來ることありて斯に雍ぎ、思ふとして極らざるなし。道仁を輔くと謂ふも、司化晰なる莫し。象物方に臻り、(五) 祓を眠るに疹を告げ、(六) 太和既に融にして、(七) 華を收め世を委て、(八) 蘭殿長に陰く、(九) 椒塗衛を弛ぶ。嗚呼哀しい哉。

【大意】天地未だ分れざるの前、已に倫匹の義、伉儷の道あり。故に物あれば必ず憑應あり。是れ天地の對應する所以なり。皇后は生を名家に享け、長じて皇子(文帝)に配し、婦徳を修めて順從の道を行ひ、威儀の觀るべきあり、聲譽遠く施く。嘗て少帝(文帝の兄)立ちて國勢振はず。文帝宜都王より升りて天子となる。皇后則ち亦侯王の宮を釋て禁中に入り、よく皇太后に事へ、后妃の務に服す。是を以て地安靜にして月度に合ふ。ああ天道は仁を輔くといふ。何ぞ司化するの明ならざる。祥瑞方に臻り天下和平にして、皇后俄に光華を收めて崩御す。ああ哀しい哉。

- 【五】星軒。軒轅星なり、此星は女主の象なり。
- 【六】震騰。川の震ひ沸騰すること、后道宜しきを得て地安靜なるをいふ。
- 【七】朧側。晦日に月の西方に見ゆるを朧といひ、朔にして月の東方に見ゆるを側匿といふ、月ば陰にして后妃の象なり。
- 【八】象物。天に現るる靈祥。
- 【九】祓。祓氣なり。疹。祓氣相傷るなり。
- 【一〇】太和。太平なり。
- 【一一】華。光華なり。
- 【一二】蘭殿。皇后の宮。
- 【一三】椒塗。皇后の宮、温煖にして惡氣を除く爲に椒を塗るなり。

(五) 涼を戒めて殯に在り、(六) 杪秋夢に即く。霜夜(七) 唱を流し、曉月(八) 魄を升ぐ。(九) 八神引を警め、(一〇) 五輅跡を遷す。(一一) 嗷嗷たる儲嗣、哀哀たる列辟、(一二) 玉墀に灑零し、(一三) 丹掖に雨洒す。存を撫し亡を悼み、今を感じ昔を懷ふ。嗚呼哀しい哉。南國門に背き、北(一四) 山園に首ふ。僕人(一五) 節を按じ、(一六) 服馬轅を顧る。遙に(一七) 紫蓋を酸み、眇に(一八) 素軒に泣く。綵を(一九) 清都に滅し、體を(二〇) 壽原に夷る。(二一) 邑野淪藹し、(二二) 戎夏悲謹す。來芳述ぶべく、往駕援かず。嗚呼哀しい哉。

- 【五】涼を戒む。秋をいふ。國語に火見えて清風寒を戒むとあり。殯。瘞なり、儀禮に死して三日にして殯し、三月にして葬るとあり。
- 【六】杪秋。秋の末。夢。長夜なり、葬埋をいふ。
- 【七】唱を流す。挽歌の流轉すること。
- 【八】魄を升ぐ。神靈天に升るなり。
- 【九】八神。八方の神。引。喪車を引くこと。
- 【一〇】五輅。王后の車。跡を遷す。出發すること。
- 【一一】嗷嗷。哭聲なり。儲嗣。太子なり。
- 【一二】列辟。諸王なり。
- 【一三】玉墀。宮殿の敷石。灑零。涙を落すこと。
- 【一四】丹掖。宮殿なり。雨洒。涙を流すこと。
- 【一五】山園。陵墓なり。
- 【一六】節を按ず。徐行すること。
- 【一七】服馬。駕馬なり。
- 【一八】紫蓋。車蓋なり。
- 【一九】素軒。素車なり、喪車。
- 【二〇】清都。帝都なり、生時に居りし所。
- 【二一】壽原。漢の景帝生時に陵を作る、未だ崩ぜず、故に壽原と呼ぶ。
- 【二二】邑野。都邑郊野なり。淪藹。茂盛の色を失ふこと。
- 【二三】戎夏。夷狄及び諸夏。悲謹。號泣すること。
- 【二四】來芳。將來の美譽。

【大意】秋に入りて瘞し、晩秋之を埋葬す。太子諸王皆悲んで涙を流す。輻輳國門を後にし。北山陵に向ふ。都鄙蕭條として、華夷俱に悲む。將來の聲譽紀述するに足るあり、靈駕既に往いて攀援すべからず。ああ哀しい哉。

齊の敬皇后哀策文並序

謝玄暉

惟れ 永泰元年秋九月朔日、敬皇后の梓宮、先塋より啓し、將に某陵に祔せんとす。其日 至尊親ら奠を 某皇帝に奉じ、乃ち兼太尉某をして 祖を 行宮に設けしむ。禮なり。翠帟阜に舒べ、玄堂扉を啓き、俎三獻を徹し、筵六衣を卷く。哀子嗣皇帝 蜃衛を懐ひて首を延べ、驚輅を想ひて心を撫で、椒塗の先づ廓きを痛み、長信の臨むなきを哀む。身 兩赴を隔て、時 二展なし。旋ち 左言に詔し、光に 聖善を敷かしむ。其辭に曰く、

【一】 敬皇后。明帝の皇后劉氏、諱は惠端、彭城の人。光祿大夫道弘の女、武帝の永明七年卒す。江乘縣の張山に葬る、明帝位に即き、追尊して皇后となす。明帝崩じて後、改葬して興安陵に祔す。

【二】 永泰。明帝の年號。其年七月帝崩す。

【三】 梓宮。棺なり。先塋。張山の舊陵なり。

【四】 某陵。明帝の興安陵。祔合葬なり。

【五】 至尊。東昏侯なり。奠。饋を薦むること。

【六】 某皇帝。明帝崩じて未だ諡せず、故に某といふ。

【七】 祖。將に行かんとするの祭。

【八】 翠帟。翠幕なり。

【九】 玄堂。墓中をいふ。

【一〇】 三獻。供物なり。徹。取り卸すこと。

【一一】 六衣。王后の六服なり。

【一二】 蜃衛。輅車なり。

【一三】 驚輅。輅車なり。

【一四】 椒塗。后妃の居る所。

【一五】 長信。漢の太后の居りし所。

【一六】 兩赴。兩處の喪。

【一七】 二展。二所の墓を省視すること。

【一八】 左言。史官なり。

【一九】 聖善。皇后の徳。

帝唐の遠胄、御龍の遙緒、秦に在りて劉と作り、漢に在りて楚を開く。肇めて惟れ淑聖、克く柔に克く令なり。清漢靈を表し、曾沙慶に膺る。爰に厥祥を定め、徽音允に穆ぐ。沼沚を光華し、中谷に榮耀す。敬 紘縵に始まり、教 種桂に先だつ。睿問川流し、神襟蘭郁す。先徳光を韜み、君道方に被ぶ。佐に于て賢を求め、謁ふ所諛ふなし。史を顧みて式

【一〇】 帝唐。唐は堯の氏なり。遠胄。後裔なり。劉氏は堯の裔にして夏には御龍氏となる。

【一一】 遙緒。末孫なり。

【一二】 楚。漢書に、楚の元王交は高祖の少弟なりとあり。

【一三】 令。善なり。

【一四】 清漢。漢は川の名、韓詩に漢に遊女ありとあり、薛君曰く、遊女とは漢水の女神を謂ふなりと。

【一五】 曾沙。層沙なり、漢書元后傳に、元城建公曰く、昔春秋の時沙麓崩る、晉史之を卜して曰く、後六百四十五年宜しく聖女の興るあるべし、其れ齊田か、今王翁孫徙りて正に其地に當る、日月之に當る、元城の東に五鹿の墟あり、即ち沙麓の地なり、後八十年當に貴女の天下に興るあるべしと、とあり。

【一六】 徽音。清き音なり、美譽の義とす。

【一七】 沼沚。沚は渚なり、詩經采芣苢に、于に以て芣を采る、沼に沚にあり、夫人芣を採り、夫を佐け神を祭るに用ふるをいふ。

【一八】 中谷。詩經葛覃篇に、葛の覃びて中谷に施る云云とあり、后妃の葛を採りて締紘を織るをいふ。

【一九】 紘縵。紘は冠の紐、縵は冕の前後に垂れて覆ふもの、列女傳に、皇后親ら蠶して玄紘を織り、公侯の夫人は之に加ふるに紘縵を以てすとあり。

【二〇】 史。女史なり。

【二一】 種桂。先に植ゑて後に熟するを種といひ、後に植ゑて先に熟するを種といふ。周禮に、土春王后に詔し六宮の人を帥めて種桂の種を出して之を王に獻すとあり。

【二二】 睿問。美譽なり。川流。川の如く流れ傳はる。

【二三】 神襟。心なり。蘭郁。蘭の如く芳し。

【二四】 先徳。明帝をいふ。光を韜む。未だ天子とならずして西昌侯たりし時をいふ。

【二五】 佐。輔佐の臣、詩經卷耳篇の序に、卷耳は后妃の志なり、内に賢を進むるの志あり、而して險説私謁の心なしとあり。

を弘め、詩を陳べて義を展ぶ。下に厚きを仁といふ。往を藏むるは伊れ智なり。十亂斯れ俟ち、四教忒ふ罔し。思に諸姑を媚し、我が嬪則を貽す。化公宮よりし、遠く南國に被る。軒曜光を懷き、素舒徳を佇つ。閔いかな我が不祐なる、慈訓早く違ひ、方に年冲藐にして、懷袖依る靡し。家寶業に臻り、身昌暉を嗣ぐ。壽宮寂遠にして、清廟虛歸す。嗚呼哀しい哉。帝明命に遷り、民神胥悦ぶ。乾景外に臨み、陰儀内に缺け、空しく故劔を悲み、徒に金穴を嗟く。璋瓚奚ぞ獻せん。禕諭設くる

【三六】十亂。亂は治なり、十人の治臣、周の武王亂臣十人あり、文母其一に居る、今も亦皇后を待ちて其數を成すをいふ。
【三七】四教。婦徳婦容婦功婦言なり。
【三八】諸姑。先后なり。
【三九】嬪則。婦道なり。
【四〇】軒曜。軒輶星なり、后妃に比す。
【四一】素舒。月なり、亦后妃に比す。
【四二】我。東昏侯自ら謂ふ。不祐。不幸といふが如し。
【四三】慈訓。母をいふ。皇后を指す。
【四四】冲藐。幼弱なり。
【四五】寶業。天子の位。明帝の天子となりしをいふ。
【四六】昌暉。盛明の位。
【四七】壽宮。神に供する所。
【四八】清廟。神靈を祭る處。
【四九】帝。明帝なり。明命。天命なり。
【五〇】乾景。明帝をいふ。
【五一】陰儀。皇后をいふ。
【五二】故劔。漢書に、宣帝の許皇后は元帝の母なり、字は平君、曾孫立ちて帝となり、平君婕妤となる、この時公卿議して更に皇后を立てんとす、帝乃ち詔して微なりし時の故劔を求む、大臣旨を知りて曰く、許婕妤を立てて皇后となさんと、とあり。
【五三】金穴。後漢書に、光武帝の郭皇后の弟況大鴻臚となり、數々賞せられて金錢を賜ふ、京師況を號して金穴となすとあり。
【五四】璋瓚。圭を以て柄となせる酒器にして宗廟の祭に用ふ、周禮注に、后璋瓚を以て酌んで亞祿すとあり。
【五五】禕諭。皇后の祭服。

罔し。嗚呼哀しい哉。【大意】劉氏は陶唐氏、御龍氏の裔にして、秦に至りて始めて劉氏となり、漢の高祖升りて天子となるに及び、其弟交を以て楚王となす。皇后は則ち其後なり。皇后は善柔の徳あり。靈は漢水の神女の如く、福は沙麓の祥の如し。よく后妃の職を務め、敬教を以て天下の先となる。明帝の西昌侯たりし時、帝を佐けて賢才を進め、私調の行なし。女史に就きて道を弘め、詩を學びて義を述べ、亦仁智の徳に富み、先太后に事へて婦道を守る。予(東昏侯)不幸にして早く母(劉皇后)を喪ひ、幼少にして懷抱の依るべきなし。明帝(東昏侯の父)帝位に即ぐや、皇后既に崩じて、璋瓚の獻を缺き、禕諭の設なし。哀しい哉。馮相祲を告げ、宸駕長往す。厥遠圖を貽し、末命是れ獎し、豐沛の綢繆を懷ひ、神京の弘敞なるに背く。蒼梧の從はざるを陋とし、鮒隅に違つて以て壤を同うす。嗚呼哀しい哉。象設を

【五六】馮相。周禮に、馮相氏は高臺に登りて、天文を視て、祲を告ぐとあり。祲。妖氣なり。
【五七】宸駕。天子の駕なり。長往。明帝の崩をいふ。
【五八】末命。臨終の命なり。
【五九】豐沛。漢の高祖の郷、以て帝郷に喩ふ。綢繆。纏綿なり。
【六〇】神京。齊都なり。
【六一】蒼梧。禮記に、舜蒼梧の野に葬る、二妃從はずとあり。
【六二】鮒隅。山海經に、鮒隅の山に、帝顓頊と九嬪と葬らるとあり。
【六三】象設。生時の像を陳列すること。園寢。陵廟なり。

園寢に陳ね、輿鏝を松楸に映す。承明を臨んで入らず、清洛を度りて南に遊び、池綰を通軌に繼ぎ、龍帷を造舟に接す。廻塘寂として其れ已に暮れ、東川澹として流れず。嗚呼哀しい哉。闕宮の遠烈を籍け、竇女の遐慶を聞く。初は徳を、蘋蘩に協へ、終は、祀に配して命を表す。慕は方に、賜衣に纏り、哀は日に、撫鏡より隆なり。寒泉の極り罔きを思ひ、彤管を遺詠に託す。嗚呼哀しい哉。

【大意】今明帝亦崩す。崩するに臨み遺命して予を勵まし、乃ち國都を去りて帝郷に升りぬ。予帝舜蒼梧の野に葬りて二妃の従はざるを恨み、顯頊と九嬪と共に鮒隅の山に合葬するを嘉す。乃ち皇后を明帝に耐葬せんとす。是に於て靈駕承明門外を過ぎて洛水を渡り、廣路浮橋の間を行けば

- 【六四】輿鏝。車及び馬の飾。松楸。陵上に植ふし木。
- 【六五】承明。陸機の洛陽記に、承明門は後宮出入の門とあり。
- 【六六】池綰。池は棺の飾。綰は柩を引くツナ。通軌。廣路なり。
- 【六七】龍帷。棺の飾。造舟。浮橋なり。
- 【六八】闕宮。詩經闕宮篇に、赫赫たる姜嫄、其徳回ならず、是れ后稷を生み、之に百福を降すとあり。遠烈。遠大なる事業。
- 【六九】竇女。汝に繼ぐなり。遐慶。遠き慶福。
- 【七〇】蘋蘩。詩經序に采蘋は大夫人職を失はざるなり。
- 【七一】撫鏡。漢の宣帝其母史良姉の寶鏡を帶ぶ。
- 【七二】寒泉。詩經凱風篇に、爰に寒泉あり、浚の下に在り、子又之が徳に報いんと欲するも、昊天極りなしとあり、子の母を慕ふ詩なり。
- 【七三】彤管。古は后夫人必ず女史彤管の法あり、詳に詩經邶風靜女篇に見ゆ。
- 【七四】祀云云。漢書に、天地合祭し、先祖は天に配し、先妣は地に配し、爵號を命するなりとあり。
- 【七五】賜衣。後漢の光武帝、其子東平王蒼に其母の衣物を賜ふ。

山川風物其哀を助く。ああ皇后は夫人として明帝に事へ、終に皇后となりて尊諡を加ふ。予遺愛の舊物を觀て追慕の情に堪へず。ああ哀しい哉。

碑文上

郭有道の碑文並序

先生諱は泰、字は林宗、太原界休の人なり。其先は、有周より出づ。王季の穆に虢叔といふ者あり。寔に懿徳あり。文王、咨へり。國を建て氏を命じ、或は之を郭と謂ふ。即ち其後なり。先生誕に、天衷に應じ、聰叡明哲、孝友溫恭、仁篤慈惠なり。夫れ其器量弘深にして、姿度廣大、浩浩焉たり、汪汪焉たり。奥乎として測るべからざるのみ。若し乃ち節を砥

- 【一】蔡伯喈。名は邕、字は伯喈、後漢の陳留の人、董卓辟して尙書となす、卓の誅せらるるに及び王允邕を収めて廷尉に付す、遂に獄中に死す。
- 【二】太原。郡名。界休。縣名。
- 【三】有周。周なり。
- 【四】王季。周の文王の父なり。穆。子なり。左傳僖公五年に虢仲、虢叔は王季の穆なりとあり。
- 【五】懿徳。美德なり。
- 【六】咨。事を謀るなり、國語に、文王即位して二虢に咨ふとあり。
- 【七】郭。高誘戰國策注に、郭は古文の虢の字なりとあり。
- 【八】其後。郭泰は虢叔の後裔なりとの意。
- 【九】天衷。衷は善なり。
- 【一〇】奥乎。深き貌。

ぎ行を礪き、道を直くし辭を正うし、真固にして以て事を幹するに足り、(三)隠括して以て時を矯むるに足る。遂に六經を考覽し、(二)圖緯を採綜し、(四)華夏に周流し、(五)帝學に隨集し、(六)文武の將に墜ちんとするを收め、(七)微言の未だ絶えざるを拯ふ。時に(八)纓綬の徒、(九)紳珮の士、形表を望んで(一〇)影附し、(一一)嘉聲を聆いて響和する者、猶ほ百川の巨海に歸し、鱗介の龜龍を(一二)宗とするがごとし。爾して乃ち(一三)衡門に潛隱し、朋を收め誨を勤め、(一四)童蒙頼りて用て其蔽を祛く。州郡徳を聞き、己を虚うし禮を備ふるも、之を能く致すなし。羣公之を休し、遂に(一五)司徒の掾に辟し、又(一六)有道に擧ぐ、皆疾を以て辭す。將に(一七)鴻涯の遐跡を蹈み、(一八)巢許の絶軌を紹ぎ、(一九)區外に翔りて以て翼を舒べ、(二〇)天衢を超えて以て高く峙たんとせり。命を稟くること融から

- 【一】幹。處理すること。
- 【二】隱括。木の曲れるを直くする具。
- 【三】宗。長なり。
- 【四】圖緯。讖緯の書。
- 【五】童蒙。義理に暗き人。
- 【六】華夏。中國なり。周流。遊行すること。
- 【七】帝學。國學即ち大學。
- 【八】微言。孔子の微妙なる言。
- 【九】紳珮。衣冠の飾、因りて高貴の人をいふ。
- 【一〇】影附。形に影の附くが如くに附くこと。
- 【一一】嘉聲。善言なり。
- 【一二】宗。長なり。
- 【一三】衡門。木を横へて門となす。
- 【一四】童蒙。義理に暗き人。
- 【一五】司徒。官名、三公の一人。掾。其屬官なり、司徒黃瓊泰を太常に辟す、泰應ぜず。
- 【一六】有道。官吏登庸の科目の名。趙典泰を有道に擧ぐ、泰應ぜず。
- 【一七】鴻涯。仙人の名、神仙傳に見ゆ。
- 【一八】巢許。巢父及び許由、皆隱者なり。
- 【一九】區外。世外といふが如し。
- 【二〇】天衢。天路なり。

す、年を享くること四十有二。(三)建寧二年正月乙亥を以て卒す。凡そ我が四方同好の人、永懷哀悼し、念を寘く所なし。乃ち相與に先生の徳を惟ひ、以て(四)不朽の事を謀る。僉以爲らく、(五)先民既に没して德音猶ほ存する者、亦之を述べらるるに頼る。今其れ如何ぞ(六)斯禮を闕かんやと。是に於て碑を樹て墓に表し、(七)昭に(八)景行を銘し、芳烈をして百世に奮ひ、(九)令聞をして無窮に顯れしむ。其辭に曰く、

- 【一】建寧。後漢の靈帝の年號。
- 【二】不朽の事。碑を樹てて後世に傳ふること。
- 【三】先民。古人なり。
- 【四】斯禮。碑を建てて其徳を述ぶること。
- 【五】景行。大なる行。
- 【六】休。善美なり。
- 【七】玄。道なり。
- 【八】宮牆。論語に、子貢叔孫武叔に謂つて曰く、夫子の牆は數仞なり、其門を得て入らざれば、宗廟の美、百官の富を見ず、其門を得る者或は寡しとあり。
- 【九】指紳。高貴の人。
- 【一〇】泌丘。泌は川の名、詩經に、泌の洋洋たる、以て飢を療すべしとあり。棲遲。隱居すること。
- 【一一】三事。三公なり。
- 【一二】召貢。登庸なり。委辭。辭退すること。
- 【一三】勒。刻なり。
- 【一四】來世。後世の人。

於(一)休なる先生、徳を明にし、(二)玄に通じ、純懿淑靈、之を天より受く。崇壯幽浚、山の如く淵の如し。禮樂を是れ悦び、詩書を是れ敦し。惟華を撫ふのみにあらず、乃ち其根を尋ぬ。(三)宮牆重仞、允に其門を得たり。懿乎たる其純、確乎たる其操、洋洋たる(四)指紳、言に其の高きを觀る。(五)泌丘に棲遲し、善く誘き能く教ふ。赫赫たる(六)三事、幾たびか其招を行ふ。(七)召貢を委辭し、此清妙を保つ。年を降すこと永からず、(八)民斯に悲悼す。爰に茲銘を(九)勒し、其光曜を擣く。嗟爾(一〇)來世、是れ則り是

れ効へ。

【大意】郭先生は徳を明にし道に通じ、其深遂高壯なること山の如く淵の如し。禮樂を悦び詩書を治め、ただ其英華を摘むのみにあらず、亦能く其根本を尋ね、優に聖門に入る。乃ち百官儒生其高德を仰ぐ。先生衡門の下に隱居して之を教導す。三公屢之を辟せども皆應せず。能く隱逸の妙理を全うせり。不幸にして年を稟くること長からず。人皆之を悼む。因つて碑を樹て銘を刻し、其光輝を述ぶ。將來の人宜しく範を先生に取るべし。

陳太丘の碑文 竝序

蔡伯喈

先生諱は寔、字は仲弓、
三 穎川許の人なり。
三 元精の和を含み、
四 期運の數に應じ、
九 徳を兼資し、
百行を摠脩す。郷黨に於ては則ち

- 【一】陳太丘。太丘は縣名、陳寔、太丘令となる。
- 【二】穎川。郡名。許。縣名。
- 【三】元精。天の精氣。
- 【四】期運。大人物の出づべき時機、孟子に、五百年必ず玉

者の興るあり、其間必ず名世の者あり云云とあり。

- 【五】九德。書經に、阜陶曰く、都亦行に九德あり、寛にして栗、柔にして立、愿にして恭、亂にして敬、擾にして
- 【六】恂恂焉。和樂の貌。
- 【七】彬彬焉。文質相雜る貌。

恂恂焉たり、善く誘ひ善く導き、仁にして人を

愛し、夫の少長をして威之に安懷せしむ。其の道たるや、用ひらるれば行ひ捨てらるれば藏れ、進退度とすべし。微訶して以て時に干めず、怒を遷して以て下に臨まず。四たび郡の功曹となり、五たび豫州に辟され、六たび三府に辟され、再び大將軍に辟され、聞喜に宰たること半歳、太丘に一年。徳中庸を務め、教肅まざるに敦し。政禮を以て成り、化行はれて謚なるあり。

會黨事に遭ひ、禁錮せらるること二十年。天を樂み命を知り、澹然として自ら逸んず。交上に諂はず。愛下に瀆れず。機を見て作ち、日を終るを俟たず。文書赦宥するに及び、時に年已に七十。遂に丘山に隱れ、車を懸けて老を告ぐ。四門禮を備ふるも、閑心靜居す。大將軍何公、司徒袁公、前後招辟し、人をして曉諭せしめて云く、特に表せんと欲す。便ち入りて常伯を踐み、三事に超補し、金紫を紆佩し、國を光し勳を垂るべしと。先生

- 【一】陳太丘。太丘は縣名、陳寔、太丘令となる。
- 【二】穎川。郡名。許。縣名。
- 【三】元精。天の精氣。
- 【四】期運。大人物の出づべき時機、孟子に、五百年必ず玉
- 【五】九德。書經に、阜陶曰く、都亦行に九德あり、寛にして栗、柔にして立、愿にして恭、亂にして敬、擾にして
- 【六】恂恂焉。和樂の貌。
- 【七】彬彬焉。文質相雜る貌。
- 【八】少長。論語に、老者は之を安んじ、少者は之を懷けん
- 【九】論語に、之を用ふれば則ち行ひ、之を捨つれば則ち藏るとあり。
- 【一〇】微訶、論語に、微めて以て智となす者を惡み、計いて以て直となす者を惡むとあり。
- 【一一】聞喜。縣名。宰、令なり、縣の長官。
- 【一二】黨事。所謂黨錮の變。
- 【一三】易經繫辭傳の語なり。
- 【一四】文書云云。天子詔して罪

- 【一五】人を赦すなり。
- 【一六】四門。當時賢才を四方に徴すをいふ。
- 【一七】何公。何進なり。
- 【一八】袁公。袁陳なり。
- 【一九】特別待遇を與ふる意。
- 【二〇】常伯。侍中なり。
- 【二一】三事。三公なり。太尉、司徒、司空をいふ。
- 【二二】金紫。三公は金印紫綬なり。

曰く、(三)望を絶つこと已に久し、巾を飾り(四)期を待つのみと。皆遂に至らず。弘農の(五)楊公、東海の(六)陳公、(七)衰職に在り、(八)羣寮之を賀する毎に、(九)大位未だ躋らず。(一〇)文仲が位を竊めるの負を慙(一一)ぶと。故に時人其徳を高しとし、公相の位よりも重んず。年八十有三、(一二)中平三年八月丙午、疾に遭ひて終る。没するに臨みて(一三)顧命し、卒する所に留葬せしむ。時服素棺、(一四)槨財に櫛に周し。喪事唯(一五)約にし、用儉に過ぐ。羣公百僚嗟せざるはなし。巖藪の知名聲を失し涕を揮ふ。(一六)大將軍弔祠し、錫ふに嘉諡を以てして曰く、(一七)徵士陳君、(一八)岳瀆の精を稟け、(一九)靈曜の純を苞ぬ。天(二〇)怒に老を遺し我が王に(二一)屏たらしめず。(二二)梁崩れ哲萎む。時に(二三)憲なしと(二四)摺紳儒林、徳を論じ跡を謀り、(二五)諡して文範先生といふ。(二六)傳に曰く、(二七)郁郁乎として文なる哉と。書に曰

- 【三】 望。仕宦の望。
- 【四】 期。死期なり。
- 【五】 楊公。太尉楊賜なり。
- 【六】 陳公。司徒陳耽なり。
- 【七】 衰職。三公をいふ。
- 【八】 羣寮。百官なり。
- 【九】 文仲。臧文仲大夫となり、柳下惠の賢なるを知りて之を舉げず、孔子以て位を窃むとなす。
- 【一〇】 中平。後漢の靈帝の年號。
- 【一一】 顧命。遺言なり。
- 【一二】 槨。外棺なり。櫛。棺なり。
- 【一三】 約。儉約なり。
- 【一四】 大將軍。何進なり。
- 【一五】 徵士。徵召に應ぜざる士をいふ。
- 【一六】 岳瀆。山川なり。
- 【一七】 靈曜。天をいふ。
- 【一八】 怒。強ひて。老。老臣なり。
- 【一九】 屏。蔽ひ輔くること。
- 【二〇】 偉人の死すること。
- 【二一】 憲。法度なり、法度とすべき人を失ひしをいふ。
- 【二二】 傳。論語をいふ。
- 【二三】 郁郁乎。美盛の貌。

く、(一)洪範九疇は彝倫の斂づる攸なりと。文は徳の表たり、範は士の則たり。存して誨あり没して號ある、亦宜ならずやと。三公、令史を遣し、祭るに(二)中牟を以てし、(三)刺史敬弔す。太守南陽の(四)曹府君、官に命じて誄を作らしむ。曰く赫たる矣陳君、(五)命世是れ生。光を含み徳を醇うし、士の爲に程と作る。資り始むること既に正しく、終を守ること又令し。禮を奉じて終没す。休矣清聲と。官屬掾吏を遣し前後赴會せしめ、石に(六)刊し銘を作る。府丞と比縣と會葬す。(七)荀慈明、(八)韓元長等五百餘人、(九)總麻して位を設け、哀んで以て之を送る。遠近の會葬千人已上なり。河南の尹(一〇)种府君郡に臨み、功徳を追歎し、高行を述録して以爲らく、遠近能く之に及ぶこと鮮しと。部の大掾に重ねて以て時銘を成さしむ。斯れ存榮沒哀、死して朽ちざる者と謂ふべきのみ。乃ち銘を作りて曰く、

(一) 袁袁たる崇嶽、(二) 符を吐き神を降す。於皇なる先生、(三) 寶を抱き珍を懐く。如何ぞ(四) 吳穹、既に斯文

- 【一】 洪範。大なる軌範。其類九あり、故に九疇といふ。詳に書經洪範篇に見ゆ。
- 【二】 中牟。羊を供へて祭ること。
- 【三】 刺史。州の長なり。
- 【四】 曹府君。太守を府君といふ、曹は其姓。
- 【五】 命世。生れながら命世の才ありとの意。
- 【六】 刊。刻なり。
- 【七】 荀慈明。荀爽、字は慈明。
- 【八】 韓元長。韓融、字は元長。
- 【九】 總麻。喪服を著ること。
- 【一〇】 种府君。种拂なり。
- 【一一】 袁袁。高き貌。崇嶽。高き五嶽。
- 【一二】 符。瑞應なり。
- 【一三】 吳穹。天なり。

を喪せる。微言 坳絶し、來者曷ぞ聞かん。交交たる黃鳥、爰に 棘に

【大意】五嶽の精、符を吐きて偉人を降せり。先生即ち是れなり。ああ先生道徳を抱けり。天何ぞ此人を喪せる。先生死して道義壞れ、後人復た則

褚淵の碑文並序

仲 寶

仲 寶

夫れ 太上は徳を立つるあり。其次は功を立つるあり。此を之れ不朽と謂ふ。子産云に亡して 宣尼其遺愛に泣き、隨武既に没して趙

- 【一】 王仲寶。名は儉、字は仲寶、齊の琅邪の人。
【二】 太上。人品の上等なる人、左傳襄公二十四年に、太上は徳を立つるあり、其次は功を立つるあり、其次は言を立つるあり、此を之れ不朽といふとあり。
【三】 子産。鄭の大政治家なり、

左傳昭公二十二年に、子産卒す、仲尼之を聞き涕を出して曰く、古の遺愛なりとあり、古人仁愛の遺風あるをいふ。
【四】 宣尼。孔子なり、字は仲尼、文宣王を追贈せらる。
【五】 隨武。晉の大夫士會なり、隨武子卒し九原の上に葬る、趙文子、叔譽と九原に遊ぶ文

子曰く、死者起すべくんば吾誰にか歸せんと。叔譽曰く、陽處父かと、文子曰く、我は則ち隨武子に與せん、武子は君を利して其身を忘れず、其身を謀りて其友を遺れずと、是れ趙文子其餘風を懷ふなり、事禮記に詳なり。

文其餘風を懷ふ所以、文簡公に於て之を見る。公諱は淵、字は彦回、河南陽翟の人なり。微子至仁を以て基を開き、宋段功高きを以て氏を命せらる。爰に 兩漢に逮び、儒雅繼ぎ及び、魏晉以降、奕世暉を重ぬ。乃祖太傅元穆公、徳當時に合ひ、行州壤を 比し、深く 臧否を識り、毀譽を以て言に形さず。采を王室に亮にし、毎に 冲虚の道を懷けり。婉にして章を成し、志して晦き者と謂ふべし。茲より厥後、前規を替ふるなく、官を建てて 惟れ賢、軒冕相襲ぐ。公、川嶽の靈暉を禀け、珪璋を含んで曜を挺んで、和順内に凝り、英華外に發れ、神初學に茂に、業弱冠に隆なり。是を以て仁經義緯、閨庭に敦穆に、金聲玉

- 【六】 文簡公。褚淵の諡。
【七】 微子。殷の紂王の兄なり、武王既に紂を滅し、成王に至り、微子を宋に封す。
【八】 宋段。宋の共公の子子行なり、褚師となり功高きを以て、官に因りて氏を命す。
【九】 兩漢。前漢後漢。
【一〇】 儒雅。學者なり、褚大五經に通じて博士となり、褚禧また儒官となる。
【一一】 奕世。代代なり。
【一二】 乃祖。褚淵の祖父、名は哀、字は季野、晉に仕へ、太傅元穆侯を追贈せらる。
【一三】 比。和なり。
【一四】 臧否。善惡なり。
【一五】 采。事なり、書經に、采を亮にし嚚に惠ふとあり。
【一六】 冲虚。冲も虚なり、虚懷

にして人に接すること。
【一七】 婉にして章を成す。忌み避くる所あれば婉曲にして篇章を成すなり、左傳成公十四年に出づ。
【一八】 志して晦し。約言して事を記すなり、左傳成公十四年に出づ。
【一九】 前規。祖先の法度。
【二〇】 軒冕。高官なり。
【二一】 川嶽。山川なり。靈暉。精氣なり。
【二二】 珪璋。美玉なり。
【二三】 神。精神なり。
【二四】 閨庭。家庭なり。敦穆。親睦なり。
【二五】 金聲玉振。名譽の高きに喩ふ。區宇。天下なり。參亮。聲の高き貌。

振、區宇に寥亮たり、孝敬淳深にして、率由斯れ至り、歡を朝夕に盡し、人
に逍遙し、禮樂の場に翺翔し、風儀秋月と明を齊
うし、音徽春雲と潤を等うし、韻宇弘深に
して、喜愠其際を見るなし。心明通亮にして、人
言を用ふると必ず猶ほ己よりするがごとし。
汪汪焉たり、洋洋焉たり。之を澄ませども清
まず、之を撓せども濁らずと謂ふべし。袁陽
源は才氣高奇にして、精裁を綜覈す。宋の文
帝は端明にして朝に臨み、鹽賈味きなし。袁既に
譽を、遐邇に延き、文も亦婚を皇家に定め、
選んで、餘姚公主に尙し、駙馬都尉に拜す。
漢の叔高に結び、晉の武帝に姻せる、斯
に方ぶれば、蔑如たり。褐を著作佐郎に釋
き、太子舍人に轉ず。纓を濯ひ朝に登り、當世に冠冕たり。兩宮に升降し、實に惟れ時實なり。

- 【二六】率由。したがひ由る。
- 【二七】間言。非議の言なり、論語に孝なるかな閔子騫、人其父母兄弟の言を問せずとあり。
- 【二八】音徽。徽音に同じ、美言なり。
- 【二九】韻宇。器量なり。
- 【三〇】汪汪。水の深く大なる貌。
- 【三一】洋洋。前に同じ。
- 【三二】袁陽源。袁淑、字は陽源、時に尙書吏部郎たり。
- 【三三】精裁云云。人の精神體裁を考察すること。
- 【三四】遐邇。遠近なり。
- 【三五】文。文帝なり。
- 【三六】餘姚公主。天子の女を公主といふ。尙。天子の女を娶るを尙といふ。
- 【三七】拜。任命すること。
- 【三八】叔高。漢の竇玄、字は叔高、經術を以て稱せらる、天子之を愛し、公主を以て之に妻す。
- 【三九】武帝。晉の王武子、俊才あり、武帝の姊常山公主に尙す。
- 【四〇】蔑如。劣ること。
- 【四一】纓。冠の紐。
- 【四二】兩宮。天子と太子との宮。

具瞻の範既に著れ、白衡の望斯に集る。出でて太宰軍事に參し、入りて太子洗馬となり、俄に祕書丞に遷り、道を、槐庭に贊し、文を天閣に司り、諸侯に光昭し、風流籍甚なり。父の憂を以て職を去り、喪哀に過ぎ、幾んど將に毀滅せんとす。有識感を留め、行路情を傷ましむ。服闋りて中書侍郎に除せらる。言絲の如く、其の出づる綸の如し。格めて次に居り、智效惟れ穆。時に新安王、寵列藩に冠たり。越に邦教を敷き、毗佐の選、國華を妙盡す。出でて司徒右長史となり、尙書吏部郎に轉ず。銓を執るに平を以てし、煩を御するに簡を以てす。裴楷の清通、王戎の簡要、復た茲に存す。泰始の初、入りて侍中となる。會朔を移さずして、吏部尙書に遷る。是時天歩初めて夷ぎ、王途尙ほ阻に、元戎行を啓き、衣冠未だ緝まらず。内には謀謨を贊け、

- 【四四】具瞻。宰相なり。
- 【四五】白衡。宰相なり。
- 【四六】槐庭。三公なり。
- 【四七】天閣。天祿閣なり、祕書を藏する處。
- 【四八】風流。名聲なり。
- 【四九】喪。喪なり。
- 【五〇】服闋。父の喪の終ること。
- 【五一】除。任なり。
- 【五二】禮記の語なり。
- 【五三】官次。官位なり。
- 【五四】列藩。諸王なり。
- 【五五】毗佐。輔佐なり。
- 【五六】國華。英賢をいふ、國の光華たる人。
- 【五七】銓。秤の錘。
- 【五八】裴楷。晉の吏部郎たり、當時清通の稱あり。
- 【五九】王戎。晉の吏部郎たり、當時簡要の名あり。
- 【六〇】泰始。宋の明帝の年號。
- 【六一】朔を移さず。一月を経ざるをいふ。
- 【六二】天歩云云。前廢帝を弑し、明帝の立ちしこと。
- 【六三】阻。險なり。
- 【六四】元戎。建安王休仁の南のかた賊を討ちしこと。
- 【六五】衣冠。朝士をいふ。

外には (三) 流品を康んじ、(四) 制勝既に遠く、(五) 帝心に簡ばれ、聲、物聴に敷く。(六) 事寧くして太子右衛率を領す。固く譲りて拜せず。尋で驍騎將軍を領す。帷幄の功を以て、庸祇の秩に膺り、零都縣開國伯に封せらる。食邑五百戸。既に、(七) 梁を辭するの分を乗り、又、(八) 寢丘の志を懐き、受くる所の田邑、百井に盈たず。久うして重ねて侍中となり、右衛將軍を領す。規を盡して、(九) 獻替すること、(十) 山甫の庸に均しく、(十一) 王旅を緝熙すること、(十二) 方叔の望を兼ぬ。(十三) 丹陽は京輔、遠近の則る攸。(十四) 吳興は衿帶、實に惟れ股肱なり。頻に、(十五) 二守と作り、竝に、(十六) 蟬冕を加ふ。政、禮を以て成る。民是を以て息ふ。(十七) 明皇不豫にして、(十八) 儲后幼冲なり。

- 【六】 流品。百姓百官なり。
- 【七】 制勝。勝を制すること。
- 【八】 事寧。勳功の厚薄を分別すること。
- 【九】 物聴。物ば人なり。
- 【十】 庸祇。庸は用、祇は敬なり、書經に、庸ふべきを庸ひ祇むべきを祇むとあり。
- 【十一】 梁を辭す。國語に、惠王梁を以て魯陽文子に與ふ、辭す、乃ち魯陽を與ふとあり。
- 【十二】 寢丘。列子に、孫叔敖疾んで將に死せんとす、其子を戒めて曰く、我死せば王必ず汝を封ぜん、汝必ず利地を受くるなかれ、楚越の間に寢丘あり、ただ此れのみ云とあり。
- 【十三】 百井。一井は方百里。
- 【十四】 獻替。可を進め否を廢すること。
- 【十五】 山甫。仲山甫、周の賢臣なり。庸。功なり。
- 【十六】 王旅。天子の軍。緝熙。和らぐること。
- 【十七】 方叔。周の武臣なり。望。美望なり。
- 【十八】 丹陽。郡名。京輔。帝都に近き地。
- 【十九】 吳興。郡名。衿帶。要害の地なりとの意。
- 【二十】 二守。丹陽、吳興二郡の太守となりしこと。
- 【二十一】 蟬冕。侍中の冠。
- 【二十二】 明皇。宋の明帝。不豫。疾あるをいふ。
- 【二十三】 儲后。太子なり。幼冲。幼少なり。

(一) 貽厥の寄、允に時望を屬す。徵されて吏部尚書となり、衛尉を領す。固く譲りて拜せず。改めて尚書右僕射を授けられ、流を端し、衡を平にし、外寛に内直く、(二) 二八の高譽を弘め、(三) 由庚を宣べて詠を垂る。(四) 太宗世に即き、遺命して公を以て散騎常侍、中書令、護軍將軍となす。(五) 往を送り居に事へ、忠貞允亮なり。國の均を乗り、四方是れ、(六) 維し、百官物に象りて動き、軍政戒めずして備る。公の、(七) 太階に登りて天下に尹たる、君子以て美談となす。亦猶ほ、(八) 孟軻欣を樂正に致し、(九) 羊職、賞を士伯に悦ぶ者の如し。所生の母の憂に丁りて職を謝す。(十) 毀疾の重き、心に因りて則ち至る。朝議以らく、(十一) 爲にするありて之を爲すは魯侯式を垂れ、(十二) 公を存し私を忘るるは方進准を明にすと。爰に詔書を降し、(十三) 敦還

- 【一】 貽厥。後嗣なり、詩經に、厥孫謀を貽し、以て翼子を燕んすとあり。寄。委託なり。
- 【二】 二八。舜の臣八元八凱十六人。高譽。高尚なる謀議。
- 【三】 由庚。詩經の篇の名。
- 【四】 太宗。明帝なり。世に即く。崩すること。
- 【五】 往。明帝を指す。居。太子を指す、此語左傳僖公九年に見ゆ。
- 【六】 均。政事なり。
- 【七】 維。持なり。
- 【八】 太階。泰階に同じ、三公の位。
- 【九】 孟軻。孟子なり、魯樂正子春をして政をなさしむ、孟子喜んで寐れられず、善を好んで賢を進むるを以てなり。
- 【十】 敦還。勸め還す。
- 【十一】 羊職。人名、羊舌職なり、晉侯士伯に瓜衍縣を賞す、羊舌職之を悦び以て當れりとなす。
- 【十二】 毀疾。悲傷なり。
- 【十三】 禮記に、子夏問うて曰く、三年の喪卒哭し、金革の事避くるなきは禮かと、孔子曰く、昔魯侯伯禽爲にするありて之を爲せり、今三年の喪を以て利に従ふ者は吾知らざるなりとあり。
- 【十四】 漢書に、翟方進、丞相となり、母を葬り三十六日にして、服を除き、起ちて事を視る、以爲らく身漢相に備はる、敢て國家の制を踰えずと、とあり。

して任を攝せしむ。固く請ひて歳を移し（一九）表奏相望む。事我と與ならず、己を屈して（二〇）化を弘む。
（一〇）三季辰に在り、（一〇）戚蕃内に侮り、（一〇）桂陽圖を失ひ、（一〇）神器を窺窺するに値ふに屬す。（一〇）棹
を鼓すれば則ち滄波振蕩し、旗を建つれば則ち
日月蔽虧す。江派を出でて（一〇）風翔し、京師に
入りて（一〇）雷動す。（一〇）控絃を宗稷に鳴らし、鋒
鏃を（一〇）象魏に流す。（一〇）英宰戎に臨み、（一〇）元
渠時に殄ぶと雖も、而も餘黨寔に繁く、宮廟憂
逼す。公乃ち（一〇）熊羆の士を摠べ、貳心ならざる
の臣を率ゐ、力を戮せ規を盡し、禍亂を克寧し、
國祚を（一〇）綴旒に康んじ、（一〇）王維を已墜に拯
ふ。誠（一〇）太祖の威風に由るも、抑亦（一〇）仁
公の翼佐なり。（一〇）徳刑詳に禮義信なるは戰
の器なりと謂ふべし。難を靜むるの功を以て爵
を進めて侯となり、兼ねて尙書令中軍將軍を授けられ、（一〇）班劍二十人を給ふ。功成りて有せず、

- 【一九】表奏。天子に上る文書。
- 【二〇】化。王化なり。
- 【二一】三季。夏殷周の末世なり。
- 【二二】時なり。廢帝の世、禍亂三季の時の如きなり。
- 【二三】戚蕃。諸王をいふ。
- 【二四】桂陽。文帝の子休範、桂陽王に封ぜらる、兵を擧げて叛す。
- 【二五】神器。皇位なり。窺窺。篡逆の心あること。
- 【二六】舟行して桂陽王を征するをいふ。
- 【二七】風翔。風の如く飛ぶ。
- 【二八】雷動。威の猛きをいふ。
- 【二九】控絃。弓なり。宗稷。宗廟に侍る者。
- 【三〇】象魏。天子の宮闕。
- 【三一】英宰。緒淵を指す。戎。軍なり。
- 【三二】元渠。賊の首領、桂陽王なり。
- 【三三】熊羆。猛卒なり。
- 【三四】綴旒。冠上の垂珠、以て危きに喻ふ。
- 【三五】王維。王綱といふが如し。
- 【三六】太祖。宋の文帝。
- 【三七】仁公。緒淵をいふ。
- 【三八】班劍。劍を執りて従行する者。

固（二五）に 搆抱を乗る。改めて侍中、中書監を授けられ、護軍たること故の如し。又（三〇）母艱に居るを以て官を去る。事（三三）義感に縁ると雖も、而も情（三三）天屬に均し。（三三）顔丁の禮に合ひ、（二四）二連の喪に善きも、亦曷を以てか踰えん。天宋徳を厭ひ、（三五）水運謝を告げ、（三六）嗣主天位に荒怠し、（三七）彊臣荆楚に憑陵す。（三八）昏を廢し統を繼ぐの功、亂に龕ち民を寧んずるの徳、公實に宏規を仰賛し、神算を參聞す。（三九）賑を受け車を出すの庸なしと雖も、亦（四〇）甘寢して羽を乗るの績あり。乃ち（四一）司空と作り、山川序づる攸あり。兼ねて衛軍を授けられ、（四二）戎政輯睦す。既にして（四三）齊徳龍興し、（四四）順皇高禪す。深く（四五）先天の運に達し、奉時の業を匡贊す。弼諧允に正しく、（四六）徽猷弘遠なり。之か風聲を樹て、

- 【二九】搆抱。謙抑なり。
- 【三〇】母艱。母の喪。
- 【三一】義感。所生の母にあらざるをいふ。
- 【三二】天屬。血縁なり。
- 【三三】顔丁。魯人なり、喪に居りて禮を盡せり。
- 【三四】二連。禮記に、孔子曰く、少連大連、善く喪に居るとあり。
- 【三五】水運。宋は水徳を以て王たり。謝。盡くること、去ること。
- 【三六】嗣主。後廢帝也なり。
- 【三七】彊臣。強き臣。憑陵。勇暴の貌。荆州刺史沈攸之兵を擧げて叛せしこと。
- 【三八】昏。暗愚なり、後廢帝を廢して順帝を立てしこと。
- 【三九】賑。祭肉なり、天子將を遣す時は必ず賑を賜ふ。
- 【四〇】甘寢。安寝なり。羽。舞羽なり、莊子に孫叔敖甘寢して羽を乗り、而して野人兵を投すとあり。
- 【四一】司空。水土を掌る官。
- 【四二】戎政。軍政なり。
- 【四三】齊徳。齊の太祖蕭道成、宋の禪を受け、天子となる。
- 【四四】順皇。宋の順帝。高禪。位を齊に讓ること。
- 【四五】先天。易經に、大人は天地と其徳を合す、天に先ちて天違はず、天に後れて天時を奉すとあり。
- 【四六】徽猷。美道なり。

之が (一三七) 話言を著す。亦猶ほ稷契の虞夏に臣とし、(一三八) 荀裴の魏晉に奉するがごとし。坦懷至公、永く
 (一三九) 崇替を監するにあらざるよりは、孰か能く (一四〇) 五君を光輔し、(一四一) 二代に資亮なる者ならんや。大に
 (一四二) 南康を啓き、爰に (一四三) 中鉉に登る。時に (一四四) 土宇を膺けて、固く (一四五) 邦教を辭す。今の尙書令
 は古の (一四六) 冢宰なり。秩 (一四七) 衰司より輕しと雖も、任 (一四八) 百辟より隆なり。暨く (一四九) 冲旨を遂
 げ、改めて (一五〇) 朝端を授けらる。邇きに異言な
 く、遠きに異望なし。帝 (一五一) 茂庸を嘉し、重ね
 て (一五二) 前冊を申ぬ。五禮を執りて以て民を正し、
 八刑を簡んで用ふる罕なり。故に能く績を (一五三)
 康衢に騁せ、慈を (一五四) 哲后に延き、義は (一五五) 資
 敬に在り、情は布衣に同じ。出でては (一五六) 變躅
 に陪し、入りては帷殿に奉す。 (一五七) 南風の高詠を
 仰ぎ、(一五八) 東野の祕寶を登し、議を聽政の晨に雅

- 【一三七】 話言、善言なり。
- 【一三八】 荀裴、魏臣荀攸尙書令となり、晉臣裴秀左光祿大夫となり、竝に國に大功あり。
- 【一三九】 崇替、興廢なり。
- 【一四〇】 五君、宋の文帝明帝順帝、齊の高帝武帝。
- 【一四一】 二代、宋齊なり。資亮、敬信なり。
- 【一四二】 南康、齊の建元元年、南康郡公に封ぜらる。
- 【一四三】 中鉉、司徒をいふ。
- 【一四四】 土宇、土地なり、南康郡公を受けしこと。
- 【一四五】 邦教、司徒は教育を掌る、司徒の職を辭したること。
- 【一四六】 冢宰、宰相なり。
- 【一四七】 衰司、三公なり。
- 【一四八】 百辟、百官なり。
- 【一四九】 冲旨、天子の深意。
- 【一五〇】 朝端、朝臣の首。
- 【一五一】 茂庸、大功なり。
- 【一五二】 前冊、前の冊命、即ち司徒となししこと。
- 【一五三】 康衢、道路なり。
- 【一五四】 哲后、明君なり。
- 【一五五】 資敬、孝經に、父に事ふるに資りて以て君に事へ、而して敬同じとあり。
- 【一五六】 變躅、天子の車。
- 【一五七】 南風の詩を歌ふ。
- 【一五八】 東野、野は序の誤、書經顧命に、天球河圖東序に在りとあり。

し、文を (一五九) 宴私の夕に披き、參ふるに酒徳を
 以てし、問ふるに琴心を以てす。 (一六〇) 暖として餘
 暉あり、遙然として想を留む。君は冬日の温を
 垂れ、臣は秋霜の戒を盡し、(一六一) 肅肅焉たり、
 (一六二) 穆穆焉たり。是に於て君親の致を同うするを
 見、(一六三) 三に在るの一の如きを知る。(一六四) 太祖升
 遐し、(一六五) 綢繆遺寄し、侍中、司徒を以て何書の
 事を録せしむ。(一六六) 玉几の願を稟け、(一六七) 綴衣の
 禮を奉じ、皇齊の令典を擇び、聲化を (一六八) 雍
 熙に致す。内平に外成り、實に舊職を昭に
 す。班劍三十人を増給せらる。物其容あり、徽章斯に允ふ。位尊くして禮卑く、居高くして思降る。
 夏より秋に徂き、疾を以て退かんことを陳ぶ。朝廷謙光の旨に違ふを重り、用て超世の (一六九) 尙を申べ
 しむ。改めて司空を授け、驃騎大將軍を領せしむ。侍中、錄尙書故の如し。(一七〇) 景命永からず、(一七一) 大
 漸彌留し、建元四年八月二十一日、私第に薨す。(一七二) 春秋四十有八、昔柳莊疾棘なり。衛君祭に當

- 【一五九】 宴私、君臣の宴樂。
- 【一六〇】 暖、光る貌。
- 【一六一】 肅肅焉、秋霜を受けていふ。
- 【一六二】 穆穆焉、冬日の温を受けていふ。
- 【一六三】 國語に、人生れて三に於て之に事ふること一の如し、父之を生み、師之を教へ、君之に食ましむ、故に之に一事すとあり。
- 【一六四】 太祖、齊の太祖高帝。升遐、崩御なり。
- 【一六五】 綢繆、密意なり。遺寄、
- 【一六六】 玉几、居高きこと。
- 【一六七】 綴衣、輕帳なり、詳に書經顧命に見ゆ。
- 【一六八】 雍熙、和平なり。
- 【一六九】 尙、高尚なる行。
- 【一七〇】 景命、大命なり、生命をいふ。
- 【一七一】 大漸、病の大に進むこと。彌留、久しきにわたる。
- 【一七二】 春秋、年齢なり。
- 【一七三】 後事を委託すること。
- 【一七四】 玉几、周の成王將に崩ぜんとし、召公畢公に命じ顧みて後事を託す、王玉几に憑り以て命を告ぐ。
- 【一七五】 綴衣、輕帳なり、詳に書經顧命に見ゆ。
- 【一七六】 雍熙、和平なり。
- 【一七七】 尙、高尚なる行。
- 【一七八】 景命、大命なり、生命をいふ。
- 【一七九】 大漸、病の大に進むこと。彌留、久しきにわたる。
- 【一八〇】 春秋、年齢なり。

りて禮を較む。晏嬰既に 往き、齊君車を趨らして行き哭す。公の云に亡する、**【七五】** 聖朝上に震悼し、**【七六】** 羣后下に慍慍す。豈惟哀一國に纏り、痛一主に深きのみならんや。太宰を追贈し、侍中、録尚書故の如し。**【七七】** 節羽葆鼓吹を給ひ、班劍六十人と爲す。諡して文簡といふ。禮なり。夫れ徳に乗じて處れば、萬物其貞を害する能はず。己を虚うして游べば、當世其度を擾す能はず。貴賤を 條風に均うし、榮辱を彼我に忘れ、然る後天下を兼善し聊か以て歳を卒ふべし。始を經め終を圖り、式て 祗悔を免るるは、誰か云に克く備らん。公實にあり。是を以て義君子に結び、惠庶類を活し、言象の未だ形れざる所、述詠の盡さざる所なり。故吏某甲等、**【七九】** 逝川の拾むなきに感じ、**【八〇】** 清暉の眇黙を哀み、**【八一】** 輿誦を丘里に餐き、雅詠を京國に瞻、**【八二】** 衛鼎の垂文を思ひ、**【八三】** 晉鐘の遺則を想ひ、高山に方べて 仰止し、**【八四】** 玄石に刊して以て徳を表す。其辭に曰く、

- 【七五】 往。死すること。
- 【七六】 聖朝。天子なり。
- 【七七】 羣后。百官諸侯なり。慍。悲傷すること。
- 【七八】 節。信なり、儀飾なり。
- 【七九】 羽葆。鳥毛を以て幢となす、椽の飾。
- 【八〇】 條風。東北風なり、淮南子に、貴賤の身に於けるや猶ほ條風の時に過ぐるがごとしとあり。
- 【八一】 祗悔。大悔なり。
- 【八二】 逝川。人命一たび盡きて復た返らざるをいふ。
- 【八三】 清暉。公の儀形なり。眇。死滅なり。
- 【八四】 輿誦。衆人の歌。丘里。田里の間。左傳に、子産政を爲す、與人之を誦して曰く、子産若し死せば其れ誰か之を嗣がんととあり。
- 【八五】 衛鼎。衛の大夫孔惲大功あり。之を鼎に銘す。
- 【八六】 晉鐘。晉の大夫魏顆死す、功を鐘に銘す。
- 【八七】 仰止。仰ぐも、止は助辭。
- 【八八】 玄石。黒石なり。刊。刻なり。

【八八】 辰精運に感じ、**【八九】** 昂靈祥を發す。**【九〇】** 元首惟れ明、**【九一】** 股肱惟れ良。天 璿曜を鑑み、**【九二】** 前王に踵がしむ。**【九三】** 欽若せる元輔、**【九四】** 微を體し 章を知る。永く言に必ず孝、心に因りて則ち 友。仁兼濟に洽く、愛善誘に深し。海を觀て量を齊うし、嶽に登りて厚を均うす。**【九五】** 五臣茲に六、**【九六】** 八元斯に九。内帷幄に暮り、外 台階を曜す。遠きは肅まざるものなく、邇きは懷かざるものなし。**【九七】** 風の偃すが如く、**【九八】** 樂の諧げるが如し。我が帝典を光にし、彼の 民黎を緝む。禮に率ひ謙を蹈み、諒に 身幹を實にす。跡 朱軒に届し、志 衡館に隆なり。

- 【八八】 辰精。即ち房星なり、水を主る、齊は水徳の王なれば、かくいふなり。
- 【八九】 昂靈。星の名、漢の蕭何は昂星の精を稟けて生る、齊帝は蕭何の後なり。
- 【九〇】 元首。君主なり。
- 【九一】 股肱。臣なり。
- 【九二】 璿曜。璿は璿璣玉衡なり、天體の運行を觀測する器械。曜は七政、即ち日月及び五星なり。書經舜典に、璿璣玉衡に在て以て七政を齊ふとあり。
- 【九三】 前王。先代の明王。
- 【九四】 欽若。つつしんで天に順ふこと。元輔。大臣即ち楮公。
- 【九五】 章。明なり。
- 【九六】 友。兄弟に善きこと。
- 【九七】 五臣。周の武王に賢臣五人あり、之に楮公を加へて六人となる。
- 【九八】 八元。堯に八元あり、皆賢臣なり、楮公を加へて九人となる。
- 【九九】 台階。星の名、三公の位をいふ。
- 【一〇〇】 風云云。論語に、草は之に風を加ふれば必ず偃すとあり。
- 【一〇一】 民黎。衆民なり。
- 【一〇二】 身幹。左傳に、禮は身の幹なりとあり。
- 【一〇三】 朱軒。貴官の車なり。
- 【一〇四】 衡館。衡門なり。
- 【一〇五】 眇眇。深遠の貌。玄宗。道なり。
- 【一〇六】 萋萋。草の盛なる貌。辭翰。文章なり。
- 【一〇七】 川流。川の如く流る。

し、文も亦 (106) 霧散す。 (107) 嵩構云に積れ、 (108) 梁陰載ち缺く。 (109) 德猷嗣ぐなく、 (110) 儀形長く遞きぬ。

【大意】 齊の君臣俱に睿明にして賢良なり。天乃ち其徳を鑑み、立てて天子となす。大臣褚公亦能く天意に順應し、機微に通じ以て其明を見る。人となり孝友仁愛にして、天下を兼濟し、衆民を善導し、器量厚徳、山海と其大を齊うす。遂に三公の位に登り、帷幄に侍して天子を輔く。遠近來服せざるはなし。晩年勇退して衡門の下に吟哦し、道義川の如く流れ、文章霧の如く散す。建元四年、疾を以て逝く。高山の頽れ、梁木の摧けしが如し。人皆美德遺業を追慕し、悲嘆の情久しうして愈新なるを覺ゆ。

- 【一〇六】 霧散。霧の如く飛散す、文章に盛なるをいふ。
- 【一〇七】 嵩構。高山なり。
- 【一〇八】 梁陰。梁木なり。
- 【一〇九】 德猷。徳風といふが如し。
- 【一一〇】 儀形。容儀なり。遞。一本に逝に作る。
- 【一一一】 餘微。微は美なり、遺美なり。招悵。悲むこと。
- 【一一二】 遺烈。遺業なり。鏘洋。逍遙といふが如し、追慕の意。

卷の第三十

碑文下

頭陀寺碑文

王

簡 栖

蓋し聞く、朝夕の池を挹む者は以て其淺深を測るなく、蒼蒼の色を仰ぐ者は其遠近を知るに足らずと。況んや視聽の外存するが若く亡するが若く、心行

頭陀寺碑文

の表生せず滅せざる者をや。是を以て室を摩竭に掩ひ、用て息言の津を啓き、口を毗邪に

- 【一】 頭陀寺。寺の名、鄂州に在り。
- 【二】 王簡栖。王巾、字は簡栖、齊の琅邪臨沂の人。
- 【三】 朝夕の池。海なり。
- 【四】 蒼蒼。天なり、莊子逍遙遊に、天の蒼蒼たるは其正色か、其の遠くして至極する所なきかとなり。
- 【五】 表。外なり。
- 【六】 摩竭。佛摩竭陀國因沙舊室に坐夏九旬、一切の人天をして室に入らしめざりしをいふ。(諸佛要集經上)
- 【七】 息言。無言なり、無言の道を開けるをいふ。至理は幽微にして言説の及ぶ所にあらずればなり。
- 【八】 毗邪。維摩經に佛毗邪離菴羅樹園に在り、佛文殊師利に告ぐ、汝維摩詰に詣りて疾を問へと、乃ち行きて問ふ何等か是れ菩薩入不二法門ぞと、維摩嘿然として言なし、文殊師利嘆じて曰く、善いかな文字語言あるなき、是れ眞の入不二法門なりとあり。

杜ぢ、以て得意の路を通ず。然れども彝倫を語る者は必ず宗を九疇に求め、陰陽を談する者は亦幾を六位に研く。是故に三才既に辨じて妙物の功を識り、萬象已に陳りて太極の致を悟る。言の

以て已むべからざる、其れ茲に在るか。然れども

交繫の筈にする所此域に窮まる。則ち稱謂

の絶ゆる所彼岸に形る。彼岸とは之を有に引けば

則ち高く、四流を謝り、之を無に推せば則ち俯し

て六度を弘む。名言すれども其性相を得ず、

隨迎するも其終始を見ず、學地を以て知る

べからず、意生を以て及ぶべからざるは、其れ

涅槃の蘊なり。

夫れ幽谷は私なし。至るあれば斯に響く。洪鐘は

虚受す。來るとして應せざるはなし。況んや法身

圓對し、規矩冥立し、一音物に稱ひて

商潛運するをや。是を以て如來迦維を見るに利しく、生を王室に託し、

五衍の軾に憑りて溺を逝川

精進、禪定、智慧なり。

【一七】名言、名づけ言ふ。

【一八】隨迎、求め望むこと。

【一九】學地、一本に謙智に作る。

【二〇】涅槃、寂滅なり。蘊、蘊

奥なり。

【二一】圓對、滯悶なきをいふ。

【二二】一音、維摩經に、佛一音を

以て法を演說すれば、衆生類

に隨つて各解するを得と。

【二三】宮商、音調なり。

【二四】迦維、天竺迦維羅衛國な

り。

【二五】五衍、五乘なり、人、

天、聲聞、辟支佛、菩薩是れ

なり。軾、車上の横木。

に拯ひ、八正の門を開いて大に交喪を庇ふ。

是に於て玄關幽鍵、感じて遂に通じ、遙源濬波

酌めども竭きず。不捨の檀を行ひて施、羣有

に洽く、無縁の慈を唱へて澤萬物に周く、勿照

の明を演べて鑒沙界を窮め、亡機の權を導いて

功、塵劫を濟ふ。時義遠し、能事畢れり。然る

後衣を雙樹に拂ひ、屣を金沙に脱す。惟れ

祝惟れ惚、噉ならず味からず。去來に繫るな

く、物なきに復歸す。斯に因りて談すれば、則ち

大千に棲違して無爲の寂擣れず、堅林を焚

燎するも不盡の靈歇むことなし。大なるかな。

正法既に没し、象教陵夷す。異端を穿鑿す

る者は、方に違ふを以て一を得たりとなし、非

に順ひ偽を辯する者は、微言を目論に比す。是に於て

【一六】八正、正見、正思惟、正

語、正業、正命、正精進、正

念、正定なり。

【一七】交喪、人のこもこも道を

喪失せること。

【一八】玄關幽鍵、道の深邃なる

をいふ。

【一九】不捨、不止也。檀、布施也。

【二〇】羣有、萬物なり。

【二一】勿照、大聖は私なし、萬

物盡く照さざるなきなり。

【二二】亡機、機心なきなり。

【二三】塵劫、微塵數の劫。

【二四】雙樹、娑羅雙樹。

【二五】金沙、河の名。

【二六】惚、惚、不明の貌。

【二七】大千、三千大千世界。棲

燎、優游なり。

【二八】寂、寂滅常靜の道。

【二九】正法、釋迦佛の正法、世

に住すること五百年、像法千

年、末法一萬年といふ。

【四〇】象教、即ち像法なり。陵

夷、衰ふること。

【四一】一、道なり。

【四二】微言、微妙の言。目論、

淺薄なる論、史記に、吾其の

智を用ふるの目の毫毛を見て

其睫を見ざるが如きを責げざ

るなり、今王晉の失計を知り

て自ら越の過を知らず、是れ

目論なりとあり。

【四三】馬鳴、僧の名、よく法を

説き一切の諸外道を降伏せん

ことを務む。幽讚、遠く佛化

を助くること。

【四四】龍樹、僧の名。虛求、虛

心に道を求むること。

馬鳴幽讚し、龍樹虛求し、竝に頽綱を振ひ、

俱に絶紐を維く。法雲を眞際に蔭へば、則ち火宅晨に涼しく、慧日を康衢に曜せば、則ち重昏夜曉く。故に能く三十七品をして樽俎の師あり、九十六種をして藩籬の固なからしむ。既にして方廣東被し、教肄南移す。周魯の二莊親しく夜景の鑿を昭にし、漢晉の兩明竝に丹青の飾を勒す。然る後遺文間出し、列利相望み、澄什轍を山西に結び、林遠江左に肩隨せり。

頭陀寺は沙門釋慧宗の立つる所なり。南は則ち大川浩汗として、雲霞の沃蕩する所、北は則ち層峰削成して、日月の廻薄する所なり。西城邑を眺むれば、百雉紆餘たり。東平阜を望めば千里超忽たり。信に楚都の勝地なり。

【四二】以下此二僧の正法を説きて、衆生を濟ひしことをいふ。
【四三】三十七品。佛法の要なり。樽俎の師。樽俎の間を出でずして敵を千里の外に破るごとく、外道を伏するをいふ。
【四七】九十六種。外道なり。藩籬。垣なり。障屏の隔なく、密然として通するをいふ。
【四八】方廣。佛教をいふ。東被。東方支那に及ぶこと。
【四九】教肄。教習なり。
【五〇】二莊。周の莊王、魯の莊公の時、夜恆星見え、夜明なり、乃ち佛生るるの日なり。瑞應經に、四月八日の夜に至り、明星出づる時、佛右胸より地に墮ち、即ち行くこと七歩とあり。

【五一】兩明。漢の明帝、晉の明帝、皆佛像を圖畫し以て其法を崇ぶ。
【五二】遺文。經文なり。間出。往往に出づること。
【五三】列利。佛寺なり。
【五四】澄什。佛圖澄、鳩摩羅什、共に高僧なり。
【五五】林遠。道林、及び惠遠、竝に高僧なり、江左。江東なり。
【五七】沙門。僧をいふ。
【五八】浩汗。廣くして際涯なきこと。
【五九】沃蕩。流動なり。
【六〇】百雉。都城をいふ。紆餘。曲折する貌。
【六一】超忽。遠き貌。

宗法師、行珪壁より繋く、錫を擁して來游す。以爲らく生に宅る者は縁、業空しければ則ち縁廢す。軀を存する者は惑、理勝てば則ち惑亡ぶと。遂に百齡を中身に捨て、肌膚を猛鷲に殉へんと欲す。荆を班き松に蔭する者久し。宋の大明五年、始めて方丈を立て、茅茨以て經象を庇ふ。後軍長史、江夏内史、會稽の孔府君、諱は覲、之が爲に草を薙ぎ林を開き、經行の室を置き、安西將軍郢州刺史、江安伯、濟陽の蔡使君、諱は興宗、復た爲に基を崇うし、刹を表し、禪誦の堂を立つ。法師の大迦葉を景行するを以て、故に頭陀を以て稱首となす。後に僧勤法師あり、貞節にして心を苦め、仁を求め志を養ひ、堂宇を纂修し、未だ就らずして没す。高軌追ひ難く、藏舟遠かり易し。僧徒闕として其れ人なく、

【六二】珪壁。美玉なり。
【六三】錫。錫杖なり。
【六四】中身。中年なり。
【六五】猛鷲。鷹なり。
【六六】山野に居るをいふ。
【六七】大明。宋の孝武帝の年號。
【六八】茅茨。茅葺屋根。
【六九】孔府君。府君は郡守の尊稱。
【七〇】經行。勤行なり。
【七一】蔡使君。使君は刺史の尊稱。
【七二】刹。塔なり。
【七三】大迦葉。釋迦の大弟子なり。

【七四】景行。仰慕すること。
【七五】頭陀。大迦葉頭陀第一。
【七六】稱首。名稱なり。
【七七】纂修。繕ぎ修むること。
【七八】高軌。高尚なる行。
【七九】藏舟。莊子に、舟を壑に藏すれば、人以て固しとなす、有力者の之を負ひて趨るを知らずとあり、人の生命は造化の運ぶ所にして忽焉として終るに喩ふ。
【八〇】闕。寂なり。
【八一】椽椽。むね、たるき。
【八二】長太息。嘆息なり。

椽椽毀れて構ふるなし。長太息をなすべ

惟れ齊五帝の洪名を繼ぎ、三王の絶業を紐ぎ、武を祖とし文を宗とするの徳、昭に嚴配に升り、天に格り表に光るの功、弘く興復を啓く。是を以て舊物を惟新し、多難を康濟し、歩は雅頌に中り、驟は韶護に合ひ、

【八二】 洪名。大名なり。
【八三】 武文。周の武王文王。
【八四】 嚴配。天に配して祭ること。
【八五】 惟新。一新すること。
【八六】 步驟。事の進行の次第。
【八七】 韶護。韶は舜の樂、護は湯の樂。
【八八】 炎區。南方の蠻國。九譯。九たび譯語を重ねて來朝すること。
【八九】 沙場。邊方なり。一候。候は非常を伺ふこと。一候とは邊患少きをいふ。
【九〇】 建武。齊の明帝の年號。
【九一】 江夏王。蕭寶玄、明帝の第三子なり、江夏郡王に封ぜらる。
【九二】 藩維。一方の藩王となること。
【九三】 江漢。二川の名、郢州地方をいふ。
【九四】 方城。楚をいふ、楚の蕩救辛となり、楚國の令典を擇べり、事左傳に見ゆ。
【九五】 龜蒙。魯なり、魯侯事を賦し刑を行ふに、必ず遺訓を問ひ故實を咨る、事國語に見ゆ。
【九六】 行。王年幼にして内史之に代り、以て州府の事を行ふ、故に行事といふ。
【九七】 智刃。莊子に、庖丁曰く、恢恢乎として其の刃を遊ばすに於て必ず餘地ありとあり、明智斷割刃の利なるが如きをいふ。
【九八】 篋。もつこ、論語に、譬へば山を爲るが如し、一篋を覆すと雖も、進むば吾が往くなりとあり。

と是に於てか任り。寧遠將軍長史、江夏内史、行事、彭城の劉府君、諱は誼、智刃の遊ぶ所、日に新に月に故なり。道勝の韻、虛往き實歸る。此寺業已に安きに廢し、功幾んど立つに墜つるを以て、慨篋を覆すむ。政肅にして刑清む。

より深く、悲井を棄つるに同じ。百姓の餘あるに因り、天下の事なきを問ひ、徒を庖へ日を揆り、各有司存す。是に於て民以て悦び來り、工以て心競ふ。丘を互り陵に被り、高きに因り遠きに就き、層軒延袤上雲霓に出で、飛閣透迤下無地に臨む。夕露珠網をなし、朝霞丹雘をなし、九衢の草千計、四照の花萬品。崖谷共に清み、風泉相渙く、金姿寶相永く、閑安に藉る。心を息め義を了り、終に焉に遊集す。法師釋曇珍、業行淳脩し、理懷淵遠なり。今知寺の任に屈し、永く神居に奉ず。

夫れ民勞し事功あり。既に文を鐘鼎に鏤む。時を言ひ代を稱し、亦碑を宗廟に樹つ。世彌積んで功宣び、身逾遠くして名紹ぐ。敢て言を彫篆に寓せ、庶くは衆妙を髣髴せんことを。其辭に曰く、質玄黄を判ち、氣清濁を分つ。器に千名に涉り、靈を萬族に含む。淳源上に派れ、澆風下に躓れ、愛流海を成し、情塵岳をなす。皇なる能仁、期を撫し世に命ず。乃ち中土を瞻み、聿に

- 【九〇】 孟子に、井を掘ること九初にして泉に及ばざれば、猶ほ井を棄つるが如しとあり。
- 【九一】 有司。役人なり。
- 【九二】 飛閣。高閣なり。透迤。相連る貌。
- 【九三】 無地。下を見れども地なきが如きなり。
- 【九四】 丹雘。朱塗なり。
- 【九五】 千計。千を以て算ふ。
- 【九六】 金姿寶相。佛の靈像。
- 【九七】 閑安。安靜なる地。
- 【九八】 彫篆。文字なり。
- 【九九】 玄黄。天地なり。
- 【一〇〇】 器。物なり、易經に、形而下なる者之を器といふとあり。
- 【一〇一】 淳源。淳和の源。
- 【一〇二】 能仁。釋迦をいふ。
- 【一〇三】 瑞應經に、期運の至る當に下りて佛となるべしとあり。

迦衛に來り、大千
を奄有し、遂に三
界を荒む。四門に
殷鑒し、幽求すること
六歳。亦既に徳を成し、
無爲を妙盡す。帝
方石を獻じ、天
池を開き、祥河水
を輟め、寶樹枝を
低れ、九折を通莊
し、三危を安歩す。
川靜に波澄み、龍翔
雲起す。耆山廣運
し、給園多士、金粟來儀し、
文殊戻り止る。乾に應じて動寂し、
民に順つて終始す。

【二三】迦衛。天竺の迦維羅衛國。
【二四】三界。欲界、色界、無色
界なり。
【二五】四門。瑞應經に、太子十
四に至り、王に啓して出遊す、
始め城の東を出づ、天帝化し
て病人となる、即ち車を廻ら
して悲念す、人生俱に此患あ
りと、城の南門を出づ、天帝化
して老人となる、車を廻らし
て悲念す、人生丁壯久しから
ずと、西門を出づ、天帝化し
て死人となる、車を廻らして
悲念す、天下に此三苦ありと、
北門を出づ、天帝化して沙門
となる、太子曰く、善いかな
唯是れ快となすと、既に深山
を歴て幽閑の處に到り、端坐
すること六年とあり。

【二六】方石。瑞應經に、佛敝衣
を見、取りて之を洗はんと欲
す、天帝佛意を知り、即ち四
方成治の石を取りて池邊に置
き、佛に白して言ふ、以て衣
を洗ふべしとあり。
【二七】淨池。瑞應經に、佛食ひ
訖り澡漱せんと欲す、天帝手
を以て地を指す、水出でて池
を成す、佛をして用ふるを得
しむとあり。
【二八】祥河。瑞應經に、時に尼
連河水流甚だ疾し、佛自然の
神通を以て水を斷つ、涌起し
て高く人頭を出で、底をして
塵を揚げしむとあり。
【二九】寶樹。瑞應經に、佛澡浴
し垂り出でんと欲す、池上に
樹あり、其樹自然に枝を曲げ

下りて佛に就く、佛牽きて出
づとあり。
【一〇】九折。坂の名。通莊。莊
は六達道なり、通行といふが
如し。
【一一】三危。山の名。
【一二】耆山。法華經に、佛王舍城
の耆闍崛山中に住し、大比丘
衆萬二千人と俱にすとあり。
【一三】給園。金剛般若經に、佛
舍衛國祇樹給孤獨園に在り、
大比丘衆千二百五十人と俱に
すとあり。多士。衆比丘を謂
ふ。
【一四】金粟。佛の名。來儀。世
に現るること。
【一五】文殊。菩薩の名。
【一六】乾。天なり。動寂。動靜
なり。

【大意】 清輕なる者は上りて天となり、重濁なる者は下りて地となり、天地初めて分れ、百物ここに
生ず。淳朴の徳上に別れ、澆薄の風下に驢れ、愛欲極めて多く、流水の海を成すが如く、情想漸く積り、
塵埃の山を爲すに似たり。時に大聖釋迦期運に
應じて世に降り、三界の火宅に於て衆生を拔濟
し、老病死苦を見て之を救ふの道を求むること
六年、徳成り道通じ、神通力を以て流を止め枝
を垂れ險阻を安歩す。乃ち衆弟子の之に従遊す
る者雲の如く龍の如し。皆よく天人に順つて動
靜終始す。
法は本より 不然、今は則ち無滅。象正
闡なりと雖も、希夷未だ缺けず。於昭な
る 有齊、式て 洪烈を揚げ、釋網更に維ぎ、玄津重ねて樁す。惟れ此名區、禪慧の託
する攸、崇巖に倚據し、通壑に臨眺し、湘漢を溝池にし、衡霍を堆阜にし、臙膺たる亭
阜、幽幽たる 林薄あり。茲 邦后を媚み、法流を是れ抱み、氣 三明に茂に、情 六入を超

【二七】不然。猶ほ無形といふが
如し。
【二八】象正。正法像法をいふ。
闡。微なり。
【二九】希夷。聲色なきをいふ。
【三〇】有齊。齊をいふ、有字意
義なし。
【三一】洪烈。大業なり。
【三二】釋網。佛法をいふ。
【三三】玄津。佛法をいふ。
【三四】禪慧。禪定智慧。
【三五】崇巖。高き巖石。
【三六】湘漢。二川の名。

【三七】衡霍。二山の名。堆阜。
小丘なり。
【三八】臙膺。草の茂る貌。亭阜。
平野なり。
【三九】林薄。草木の叢生する所
を薄といふ。
【四〇】邦后。后は君なり、江夏
王を指す。
【四一】三明。天眼明、宿命明、
漏盡明なり。
【四二】六入。眼入色、耳入聲、
鼻入香、舌入味、身入觸、意
入法なり。

ゆ。靈宇を眷言し、載ち興昔せんことを懷ふ。丹刻、(四)翬飛し、(五)輪奐離立し、(六)象設既に開け、(七)醉容已に安し。桂深くして冬煥に、松疎にして夏寒し。(八)神足游息し、(九)靈心往還す。(一〇)勝幡西に振ひ、(一一)貞石南に刊す。

【大意】佛法もと無形なるも、今に至るまで滅びず、正法やや微なりと雖も尙ほ未だ缺廢せず。齊の大業を成すや、乃ち佛法を維持し其の將に壞れんとするを救ふ。頭陀寺を立てしは禪定智慧の士をして託居せしめんが爲なり。此寺は高巖に倚り廣壑に臨み、遙に湘漢衡霍を望むべく、萋萋たる平野を瞰すべし。江夏王夙に佛法を抱み、造詣既に深し。此寺の敗壞せるを見て之を修理し、輪奐の美を成せり。佛像既に設けて潤澤の顔容あり、佛足靈心ここに往還す。佛嘗て幡を西方に樹つ。今南國に此碑を建つ。

【一】靈宇。寺なり。眷言。顧ること、言は助辭。
【二】翬飛。翬は雉なり、雉は羽毛極めて美し、雉の飛ぶが如きなり。
【三】輪奐。高大にして美麗なること。離立。離は風なり。

【四】象設。佛像なり。
【五】醉容。潤澤ある容貌。
【六】神足。佛の足。
【七】勝幡。旗の名。
【八】貞石。堅石なり。刊。刻なり。

齊の故の安陸昭王之碑文 沈休文

齊の故の安陸昭王之碑文

沈休文

【一】安陸昭王。安陸は郡名、昭は諡。

齊の故の安陸昭王之碑文

公諱は緬、字は景業、南蘭陵の人なり。稷契身、唐虞を佐け、天地に大功あり。商武姬文の圖に膺り籙を受くる所以なり。蕭曹漢祖を扶翼し、秦項を滅して以て亂を寧んず。魏氏時に前に乗じ、(二)皇齊符を後に握り、(三)靈源積石と流を争ひ、神基極天と峻を比ぶ。祖宣皇帝雄材盛烈にして、名當時を蓋ひ、(四)考景皇帝道を含み貞に居り、(五)前代を卷懷す。公辰象の秀徳を含み、(六)河岳の上靈を體し、氣風雲を蘊め、身日月を負ひ、(七)立行模すべく、(八)置言範を成し、英華外に發し、(九)清明内に昭なり。(一〇)天經地義の徳、心に因つて必ず盡し、簡久遠大方、(一一)率由斯に至る。其源を抱む者、(一二)游泳して測るなく、其道を懷く者、日に用ひて知ら

【一】南蘭陵。郡名なり。
【二】稷契。稷は后稷、周の始祖なり、堯を佐けて大功あり。契は殷の始祖なり、舜を佐けて功あり。
【三】唐虞。堯舜なり。
【四】商武。殷の湯王。姬文。周の文王。
【五】圖籙。天子將に興らんとするの符瑞。
【六】蕭曹。蕭何、曹參、竝に漢の高祖を佐く。
【七】秦項。秦の皇帝及び項羽。
【八】魏氏。魏は曹參の後裔也。
【九】皇齊。齊なり、齊は蕭何の後裔なり。
【一〇】積石。山の名、黄河其下を流る。
【一一】宣皇帝。齊の太祖高帝の父承之、高帝即位の後追尊し

て宣皇帝と諡す。
【一二】考。亡父をいふ。景皇帝。明帝の時、太祖の兄道生を追尊して景皇帝と諡す、安陸王の父なり。
【一】辰象。日月星なり。
【二】河岳。四瀆五岳なり。其精靈を受けて生れしをいふ。
【三】立行。行狀なり。
【四】置言。立言といふが如し。
【五】心中なり。
【六】天經地義。孝經に、夫れ孝は天の經、地の義、民の行なりとあり。よく孝道を行ふをいふ。
【七】方。道なり。
【八】率由。道に循ひ由ること。
【九】游泳。深く道に詣ること。

ず。昭昭たること 三辰の天に麗くが若く、滔滔たること猶ほ 四瀆の地に紀たるがごとし。六幽允に洽く、一德爽ふなし。萬物之を仰げば彌高く、千里言はずして斯に應ず。若し夫れ冠を彈き出で仕ふるの日、登庸せられて事に洩むの年、軍靡命服の序、監督 方部の數、斯れ固より國史の詳にする所、今得て略すべきなり。

水徳方に衰へ、天命未だ改まらず。太祖龍躍し、時を俟ちて 淮泗に鎮と作る。如仁夕惕の 志中夜に九廻し、龕世 拯亂の情獨用懷抱し、深圖密慮衆能く窺ふなし。公朝夕に陪奉し、左右に従容す。蓋し 王子洛濱の歳に同じく、實に惟れ 辟彊内侍の年、予を聖懷に起し、發

- 【一】 三辰。日月星なり。
- 【二】 四瀆。江河淮濟なり。紀。條理なり。
- 【三】 六幽。天地四方なり。
- 【四】 萬物。萬民なり。
- 【五】 冠を彈き、以て出仕すること。
- 【六】 軍靡。州將となること。
- 【七】 命服。爵命の服。序。次第なり。
- 【八】 方部。四方州部なり。數。術なり。
- 【九】 水徳。宋をいふ。
- 【一〇】 宋の未だ滅びざるをいふ。
- 【一一】 太祖。齊の太祖。龍躍。龍の如く躍りあがる。
- 【一二】 天命の降るを待つなり。

- 【一三】 淮泗。宋の明帝太祖を以て冠軍將軍となし淮陰を鎮せしめしこと。
- 【一四】 如仁。論語に桓公諸侯を九合し兵車を以てせざるは管仲の力なり、其仁に如かんや、其仁に如かんやとあり。夕惕。惕は驚懼なり、易經に君子夕まで惕若すとあり。
- 【一五】 龕世。龕は載なり、世亂を載定すること。拯亂。亂をすくふこと。
- 【一六】 王子。周の王子晉初め洛濱に遊ぶ、時に年十五。
- 【一七】 辟彊。張良の子辟彊年十五にして侍中となる。
- 【一八】 予。安陸昭王を指して言ふ。安陸王年十五にして太祖の委任を受けしをいふ。

言旨に中る。始め文學を以て 梁に遊び、俄にして入りて 綸誥を掌る。遠し。帝震より出で、日 青光を衣る。軌を 茅社に方べ、安陸に侯たらしめ、 瑞を受け珪を析き、遂に 雲野を荒む。式て 儲命を掌る。帝其人を難んず。公宗室の 羽儀を以て、允に嘉選に膺る。隆を 三善に協せ、仰いで 四徳を敷く。 博望の苑載ち暉き、 龍樓の門以て峻し。 帷辰に獻替し、實に 待漏の書を奉じ、 如絲の旨を銜み、 前暉後光、止 恆授のみにあらず。 公密戚の上賢を以て、俄

- 【一〇】 旨。太祖の意。
- 【一一】 梁。漢の司馬相如、梁の孝王に客遊せり。因つて安陸王の宋の劭陵王の文學中書郎となりしことをいふ。
- 【一二】 綸誥。天子の詔勅。
- 【一三】 帝。齊の太祖。震。東方の木なり、齊木徳を以て帝位に登りしこと。
- 【一四】 青光。木の青き色。齊の天子となりしをいふ。
- 【一五】 茅社。古天子の諸侯を封するや、各方土を取り葺くに自茅を以てし、以て社を爲らしむ、諸侯となすをいふ。
- 【一六】 瑞珪。諸侯の執る所の符

- 【一七】 信なり。
- 【一八】 雲野。雲夢の野、安陸に屬す。
- 【一九】 儲命。儲は太子なり、安陸王の太子中庶子に任ぜられしこと。
- 【二〇】 適任者を得るを難しとせること。
- 【二一】 羽儀。易經に、鴻陸に漸む、其羽用ひて儀となすべしとあり。
- 【二二】 三善。君に事へ父に事へ長に事ふるをいふ、禮記に詳なり。
- 【二三】 四徳。元亨利貞なり。
- 【二四】 博望の苑。漢の武帝辰太子の爲に博望苑を置き、賓客を通じて其の好む所に從はしむ。
- 【二五】 龍樓の門。太子の宮門。
- 【二六】 帷辰。帝座なり。獻替。可を薦め否を廢すること。
- 【二七】 喉脣。言辭を出納すること。
- 【二八】 待漏。上書するとき晨に起き車を駐めて漏刻を待つなり。
- 【二九】 如絲。禮記に王言は絲の如く、其の出づる綸の如しとあり。
- 【三〇】 恆授。通常の任官。

にして職を奉じ、出納惟れ允に、劔璽華を増す。伊れ昔、帝唐、九官威事あり、熊豹臨戴納言を是れ
司る。此より今に迄るまで、其任爽ふなし。
爰に近侍せしより、式て權衡を賛く。而して皇
情眷眷、慮、瘼を求むるに深し。(六〇) 姑蘇の
奥壤、任、關河より切なり。都會、殷負、(六一) 提
封百萬、全趙の、叢臺に袷服するも、此に方ぶ
れば劣れりとなす。(六二) 臨淄の汗を揮ひて雨を成す
も、會ち何ぞ稱するに足らん。乃ち舊吳に、(六三) 鴻
騫し、(六四) 東楚に守と作る。義讓を弘めて以て君子
を勗め、平惠を振ひて以て小人を字ひ、撫上徳に
同じく、(六五) 綏中典を用ふ。疑獄情を得て、(六六) 喜ば
ず、(六七) 宿訟兩ながら譲りて同じく歸る。(六八) 春
申の大に封疆を啓き、(六九) 鄧攸の氓庶を、(七〇) 緝熙す
と雖も、尙ふる能はざるなり。

【六〇】 帝唐。堯なり。九官。唐の時九官を設けて庶政を掌らしむ。
【六一】 熊豹臨戴。四人の名。納言。官名。
【六二】 權衡。政事なり。
【六三】 瘼。民の病苦なり。
【六四】 姑蘇。地名。奥壤。邊僻の地をいふ。
【六五】 關河。中原の地をいふ。
【六六】 殷負。一本に阜に作る、富盛なり。
【六七】 提封。境内なり。
【六八】 叢臺。趙王の臺の名。袷服。美服なり。
【六九】 臨淄。齊都なり。人衆多

にして汗を揮へば雨をなすといふ。
【七〇】 鴻騫。鴻の如く飛ぶ、安陸王の吳郡太守となりしこと。
【七一】 東楚。吳なり。
【七二】 綏。安んずること。中典。中庸の法。
【七三】 其の有罪を哀むなり。
【七四】 宿訟。久しく決せざる訴。
【七五】 春申。楚の黃歇封せられ、て春申君となり、吳の故墟に城きて都となす。
【七六】 鄧攸。晉の人、吳郡太守となり、大に民を賑救す。氓庶。衆民なり。
【七〇】 緝熙。和らげ養ふ。

(七六) 夏首は藩要にして任、推轂より重く、中流に
衿帶し、地江漢より殷なり。南、衡巫に接し、風
雲の路千里、西、鄧鄧に通じ、水陸の塗、三七。
是れ惟形勝、(七八) 關外先なし。塵を建て牧と作る、明
徳の在る攸、乃ち暴すに、(七九) 秋陽を以てし、威すに
(八〇) 夏日を以てし、澤漸らざるはなく、(八一) 螻蟻の穴も
遺すなし。明察せざるはなく、(八二) 容光の微も必ず
照す。近きよりして遠きに被り、已よりして、(八三) 物
に及ぼし、惠、八風と俱に翔り、徳、五材と竝び
運り、遠きも懐かざるなく、(八四) 邇も肅まざるなし。
邑居夜吠ゆるの犬を聞かず、(八五) 牧人晨に飲ふの羊
を觀ず。譽、(八六) 六條に表し、功萬里に最たり。
還りて、(八七) 近侍に居り、兼ねて、(八八) 戎秩に饗り、(八九)
候府隆を寄せ、(九〇) 儲端顯に任す。東西の兩晉、茲

【七六】 夏首。楚辭に、夏首を過ぎて西に浮ぶとあり、王逸注に夏首は水口なりとあり。
【七八】 推轂。將軍なり、古天子の將を遣るや、親ら其車轂を推して之を送る。
【八〇】 衡巫。二山の名。
【八一】 鄧鄧。二邑の名。
【八二】 三七。二千一百里。
【八三】 關外。關は門限なり、邦畿の外をいふ。
【八四】 秋陽。秋の日なり、孟子に江漢以て之を濯ひ、秋陽以て之を暴すとあり、潔白にするをいふ。
【八五】 夏日。威嚴に喩ふ、左傳に趙盾は夏の日なりとあり、杜預注に夏日は畏るべしとあり。
【八六】 容光。小隙なり。

【八七】 物。人なり。
【八八】 八風。八方の風。
【八九】 五材。水火木金土なり。
【九〇】 牧人。孔子家語に、孔子大司寇となる、初め魯の羊を販ぐ者沈猶氏、常に晨に其羊に飲ひ以て市人を詐る、孔子の政をなすに及び、沈猶氏敢て朝に其羊に飲ばすとあり。
【九一】 六條。刺史の察する所六條あり、民の疾苦、官の政狀、盜賊、禁を犯す者、民の善惡、賦税、是なり。
【九二】 近侍。侍中となりしこと。
【九三】 戎秩。武職なり、驍騎將軍となりしこと。
【九四】 候府云云。宿衛の官となりしこと。
【九五】 儲端云云。太子詹事たりしこと。

選特に難し。(九六)羊琇は願言すれども獲ず、謝琰は功高うして後至る。(九七)二宮に升降し、令績斯に俟つ。(一〇〇)禁旅尊嚴にして、(一〇一)距海を遷にす。東(一〇二)南(一〇三)秦稽を渚にし、(一〇四)淵藪胥萃を望み、(一〇五)藿蒲の在る攸り、(一〇六)雲屋萬家あり。刑政繁舛にして、舊(一〇七)詳一にし難し。(一〇八)南山の羣盜も未だ多しと云ふに足らず。(一〇九)渤海の亂細も、斯に方ぶれば理め易し。公車を下りて化を敷き、(一一〇)風動神行す。誠恕既に(一一一)孚し、

【九六】羊琇。晉の人太子詹事たらんことを願へども得ず。願言。言は助辭なり。
【九七】謝琰。晉の人、羌を征するの功により、太子詹事となる。
【九八】二宮。天子と太子と。
【九九】令績。令は善なり。
【一〇〇】禁旅。旅は兵なり。
【一〇一】主器。太子をいふ。
【一〇二】禹穴。會稽山に在り。神。神靈の地なりとの意。
【一〇三】分陝。昔周の時陝より以東は、周公之を主り、陝より以西は、召公之を主れり、今

安陸王會稽太守となる、亦周召分陝と、其美を等うすとしたり。
【一〇四】江左云云。天子江東に都してより、遷に此任を求むとなり。
【一〇五】距海。大海なり。
【一〇六】秦稽。會稽山をいふ。
【一〇七】淵藪。逋逃の人をいふ。書經に、今商王受天下逋逃の主となり、淵藪に萃るとあり。
【一〇八】藿蒲。草なり、盜賊をいふ。左傳に、鄭國盜多、人を藿蒲の澤に聚むとあり。

【一〇九】郭壘。郭邑なり。
【一一〇】雲屋。高樓なり。
【一一一】詳一。靜一といふが如し。統治すること。
【一一二】南山。地名、この地盜多し、漢の王遷之を除く。
【一一三】渤海。郡名、漢の宣帝の時盜賊並び起る、帝冀遂に問ふ、遂曰く、亂人を理むるは亂繩を理むるが如し、急にすべからずと。
【一一四】風動神行。治化の能く行はれしこと。
【一一五】孚。信の通すること。

子威誅せらる。被らしむるに哀矜を以てし、孚するに信順を以てし、南陽の(一一三)葦杖も未だ其仁を比するに足らず、(一一四)潁川の時雨も以て其澤を豊にするなり。公轡を攬り車に升り、州に牧とし郡を典り、感(一一五)民祇に達し、(一一六)期月を待つにあら

【一一三】葦杖。漢書に、趙廣漢よく鉤距をなし以て事の情を得とあり、晉灼云く、鉤は致なり距は閉なり、もし馬の價を知らんと欲せば先づ狗を問ひ、又羊を問ひ、然る後馬に及び、問はずして自ら知り以て其術を閉つとあり。
【一一四】潁汗。漢書に、張敞京兆尹となり、諸盜の長數人を召し、其罪を合し諸盜を捕へて以て自ら贖はしむ、盜長吏とならんことを請ふ、即ち之を許す、小盜悉く來り賀す、飲みて醉ふ、盜長緒を以て其衣

を汗す、吏里門に坐し出づる者を問し、緒あれば輒ち之を收縛すとあり。權。詐術なり。
【一一五】奸吏。奸惡の長。
【一一六】里端の籍。法令を以て里閭に著すなり。
【一一七】惡子。賊なり。
【一一八】葦杖。蒲鞭なり、後漢書に、劉寬南陽太守に遷る、吏民過あれば唯蒲鞭を用ひて之を罰し、辱を示すのみとあり。
【一一九】潁川。郭伋潁川郡守となり、德時雨の下るが如し。
【一二〇】民祇。人と神と。
【一二一】期月。一周年なり、論語

に、子曰く苟も我を用ふる者あらば期月のみにして可なり、三年成るあらんとあり。
【一二二】塵席云云。任滿ちて還る時をいふ。
【一二三】去思。漢書に、何武兗州刺史となり、京兆尹に徙る、其の居る所亦異名なし、去りて後常に思はるとあり。一借。東觀漢記に、寇恂河南太守となる、徵されて入りて金吾となる、百姓道を遮りて曰く、願くは寇君を借ること一年せんと、上乃ち恂を留むとあり。

【一二四】鉤距。漢書に、趙廣漢よく鉤距をなし以て事の情を得とあり、晉灼云く、鉤は致なり距は閉なり、もし馬の價を知らんと欲せば先づ狗を問ひ、又羊を問ひ、然る後馬に及び、問はずして自ら知り以て其術を閉つとあり。
【一二五】潁汗。漢書に、張敞京兆尹となり、諸盜の長數人を召し、其罪を合し諸盜を捕へて以て自ら贖はしむ、盜長吏とならんことを請ふ、即ち之を許す、小盜悉く來り賀す、飲みて醉ふ、盜長緒を以て其衣

愈久うして彌結ばる。

(三三) 方城漢池、南顧 千里を重ぬるなく、北 峭瀾を指せば、平塗七百に過ぎず。西 嶢武に接すれば、關路會ち千に盈たす。

(三四) 蠻陬夷徼、重山萬里。小なれば則ち民を俘にし畜を 略し、大なれば

則ち城を攻め邑を剽し、晉宋より今に迄るまで、民

患に切なるあり、烽鼓相望み、歳時息まず。

(三五) 埋穿掘の黨、阡陌に羣を成し、傲法侮吏の人、

會て禁禦するなし。累藩咸其弊を受け、歴政の

裁する能はざる所なり。加ふるに 戎羯窺窬し

我が邊隙を伺ふを以てす。北風未だ起らざるに、馬

首便ち以て南向し、塞草未だ衰へざるに、嚴城焉に

早く閉づ。永明八載、疆場大に駭く。天子乃ち

心に北眷し、朝を聽いて怡はず。旃を 漢南に揚ぐる、公にあらざれば可なるなし。是に於て馬を

隰に驅り、甲を卷いて遄く征く。威令塗に首ひ、仁風路に載ち、軌躅清晏にして車徒擾れず。牛酒日

(三七) 方城、漢池。左傳僖公四年に、楚の屈完曰く、方城以て城となし、漢水以て池となすとあり。

(三八) 千里。一本に此二字なし、重を過に作る。

(三九) 峭瀾。嶠は山の名、瀾は川の名。平塗。平坦なる道。

(四〇) 嶢武。二關の名。

(四一) 蠻陬夷徼。蠻夷の界。

(四二) 略。掠むること。

(四三) 推埋。人を推殺して埋むること。穿掘。塚を發きて物を取ること。

(四四) 阡陌。道路なり。

(四五) 裁。制なり。

(四六) 戎羯。夷狄なり、後魏を指す。窺窬。隙を伺ふこと。

(四七) 永明。武帝の年號。八載。八年なり。永明八年匈奴胸山に寇す。

(四八) 漢南。漢水の南。

(四九) 原隰。原野なり。

(五〇) 安陸王征伐して人皆悅服するをいふ。

に至り、壺漿陌に塞る。義を 犬羊に失ふこと、其來る久し。徵賦嚴切、唯利を是れ求む。疆界に

(四一) 首鼠し、災蠹彌 廣し。公扇ぐに廉風を

以てし、孚するに誠徳

を以てし、(四二) 任棠が

水を置くの情を盡し、

(四三) 郭伋が期を待つ

信を弘め、(四四) 金粟の

如くなるも觀ず、馬羊

の如くなるも入るるな

し。(四五) 雖雉必ず懷き、

(四六) 豚魚爽はず。是に

由りて (四七) 巢を傾け落

を擧げ、徳を望むこと歸するが如し。(四八) 椎髻鬢首、田に門闕に拜す。(四九) 卉服塗に滿ち、夷歌韻を成し。

(四一) 犬羊。夷狄をいふ。

(四二) 徵賦。收斂なり。

(四三) 首鼠。一進一退態度の決せざること。

(四四) 任棠。東觀漢記に、龐參漢陽太守となる、任棠に過る、棠薤一本水一杯を以て戸屏の前に置き、自ら兒孫を抱いて戸下に伏す、棠曰く是れ太守を曉さんとするなり、水は其清まんことを欲す、大本薤を抜くは強定を撃たんことを欲す、兒を抱いて戸に當るは門を開き孤を恤まんことを欲するなりと、參職に在り、果して能く豪を抑へ弱を助け惠政を以て民を得とあり。

(四五) 郭伋。并州の牧に任ぜられ、部を行きて美稷に到る、數百の小兒を之を迎ふ、問ふ使君何の日か還るべきと、偪日を計りて之を告ぐ、部を行きて還りて美稷に入るとき、期に先だつこと一日なり、偪乃ち諸兒に負くを念ひ、即ち野亭に止り、期を待ちて乃ち往く、信義を重んずればなり。

(四六) 金粟。後漢書に、張奐の帥奐の恩に感じ、馬二十匹を獻す、先零の酋長又金鏹八枚を遺る、奐竝に之を受け、主簿を召して曰く、馬をして羊の如くならしむるも、以て廐に入らず、金をして粟の如くならしむるも以て懷に入るべからずと、悉く金馬を以て之を還すとあり。

(四七) 雖雉。東觀漢記に、魯恭中卒の令となる、仁恕の豫肥親と俱に桑下に坐す、雉あり其傍に止る、傍に童兒あり、親曰く何ぞ捕へざると、兒言ふ雉方に雛を將ゆと、親恭に謂つて曰く、豎子仁心あるは君の化なりと、とあり。

(四八) 豚魚。易經に、信豚魚に及ぶとあり。

(四九) 巢。夷狄の居をいふ。落。部落なり。

禮義既に敷き、威刑具に擧り、疆民（二五）獷俗、志を反し情を遷し、風塵起らず、（二五）囹圄寂寞たり。富

商野に次り、（二五）宿秉苗に停り、（二五）蝮蝗起らず、（二五）豺虎跡を遠ざけ、北狄威に懼れ、關塞謐靜なり。

偵諜敢て東に窺はず、駝馬敢て南に牧せず。（二五）方に策を燕趙に振ひ、（二五）秦代を席巻し、（二五）龍駕

に伊洛に陪し、（二五）紫蓋に咸陽に侍せんと欲す。而して疾の（二五）彌留するに邁ひ、（二五）歎焉として大に

漸む。耕夫は耒を釋て、桑婦は機を下り、門衛に（二六）參請し、竝に（二六）羣望に走る。維れ永明九年夏

五月三十日辛酉薨す。（二六）春秋三十有七。城府（二六）颯然として、（二六）庶僚震つるが如く、男女老幼街衢

に（二六）大臨し、響を接し聲を傳へ、時を踰えずして四境に達す。夷羣（二七）戎落、幽遠必ず至り、坡を望

んで膺を拊ち、（二六）郢邑を震動し、竝に入りて（二六）靈輓に奉せんことを求む。藩司抑へて許さず。（二七）鄧訓

面を劈くの哀を致し、（二七）羊公市を罷むるの慕を深うすと雖も、對して言を爲すに、遠く（二七）慙徳あり。

（二七）神駕東に還るや、號送して境を踰え、（二七）觴奠を奉じて以て靈を望み、蒼天を仰いで自ら訴へ、震響

雷を成し、塗に盈ち水に咽ぶ。（二七）羊公。晉の羊祜荊州に都督たり、其の薨するや、市を

公危きに臨んで正を審（二七）にし、載ち（二七）話言を貽す。（二七）楚囊の請幾しと雖も、彌固

く、（二七）衛魚の心身亡して意結ぼる。（二七）宮軫慟し、遐邇哀を同うす。侍中領衛將

軍を追贈し、鼓吹一部を給ひ、諡して昭侯といふ。時に（二七）皇上納麓辰に在り、（二八）登庸伊れ始まる。

允に（二八）朝端に副たり、兼ねて（二八）屯衛を掌る。凶を聞いて哀震し、感絶時を移す。因つて沈痾に邁ひ、

【二五】獷俗。好惡の俗。【二五】囹圄。獄なり。寂寞。空虚なり。

【二五】宿秉。秉は禾束なり。舊き稻なり。當。田なり。

【二五】蝮蝗。稻を食ふ蟲。【二五】秦代。二國の名。

【二五】龍駕。天子の車。伊洛。二水の名。洛陽に在り、天子に陪從して後魏を伐たんとするをいふ。

【二五】紫蓋。天子の車蓋。咸陽。後魏の都する所。

【二五】彌留。久しきに亘ること。【二六】歎焉。忽然なり。大に漸む。病重くして將に死せんとすること。

【二六】羣望。天子の車蓋。咸陽。後魏の都する所。

【二六】觴奠。酒肉を供へて祭ること。

【二六】神駕。喪車なり。

【二六】楚囊。左傳に楚の子囊吳を伐ちて還り、將に死せんとして遺言し、子庚に謂ふ必ず郢に城けと、君子曰く、子囊は君に忠なり、將に死せんと

【二七】善言なり。

【二七】楚囊。左傳に楚の子囊吳を伐ちて還り、將に死せんとして遺言し、子庚に謂ふ必ず郢に城けと、君子曰く、子囊は君に忠なり、將に死せんと

【二七】善言なり。

【二七】楚囊。左傳に楚の子囊吳を伐ちて還り、將に死せんとして遺言し、子庚に謂ふ必ず郢に城けと、君子曰く、子囊は君に忠なり、將に死せんと

【二七】善言なり。

【二七】楚囊。左傳に楚の子囊吳を伐ちて還り、將に死せんとして遺言し、子庚に謂ふ必ず郢に城けと、君子曰く、子囊は君に忠なり、將に死せんと

【二七】善言なり。

【二七】楚囊。左傳に楚の子囊吳を伐ちて還り、將に死せんとして遺言し、子庚に謂ふ必ず郢に城けと、君子曰く、子囊は君に忠なり、將に死せんと

【二七】善言なり。

【一八三】氣序を縣留す。世祖日夜憂懷し、【一八四】寬譬を備盡す。膳を勉め哭を禁じ、【一八五】中使相望む。【一八六】上外は皇旨に順ふと雖も、内は私痛を殷にし、獨居して酒食を御せず、坐臥に泣涕して衣を濡す。此の若くにして年を移し、【一八七】癯瘠貌を改む。【一八八】天倫の愛、振古儔なし。俯して【一八九】天眷に膺り、入りて絶業を纂ぐに及び、命を【一九〇】懿親に分ち、【一九一】台牧竝び建つ。【一九二】繁弱に對して流涕し、【一九三】曲阜を望んで悲を含み、改めて司徒を贈り、因つて諡して郡王となす。禮なり。

【一九四】惟れ公少うして英明、長じて弘潤なり。風標秀舉し清暉世に映ず。【一九五】學、書部に徧く、特に【一九六】玄言を善くす。【一九七】鞏悅の麗、【一九八】篆籀の則、【一九九】六義を懷抱に窮め、【二〇〇】八體を毫端に究む。【二〇一】奕思の

【一八三】氣序云云。時を経ること久しきなり。
 【一八四】世祖。武帝なり。
 【一八五】寬譬。其心を寬うし悲を去らしむること。
 【一八六】中使。天子の私使。
 【一八七】上。明帝をいふ。
 【一八八】御。飲食すること。
 【一八九】癯瘠。瘦すること。
 【一九〇】天倫。兄弟なり、安陸王は明帝と兄弟なり。
 【一九一】振古。振は自なり、古昔より以來。
 【一九二】明帝の天子となりしこと。
 【一九三】懿親。親族なり。
 【一九四】台牧。台は三公、牧は州那の長をいふ。
 【一九五】繁弱。弓の名、左傳に、周公王室を相け以て天下を尹

す、周に於て睦たり、魯公に分つに封父の繁弱を以てすとあり。
 【一九六】曲阜。書經に、魯公伯禽（周公の子）曲阜に宅るとあり。
 【一九七】書部。書法なり。
 【一九八】玄言。老莊の道。
 【一九九】鞏悅。帶と巾となり、書法の修飾、衣冠の美麗なるが如きに喩ふ。
 【二〇〇】篆籀。古代の字體の名なり。
 【二〇一】六義。詩に六義あり、風雅頌賦比興なり。
 【二〇二】八體。書體なり、大篆、小篆、刻符、蟲書、篆印、署書、父書、隸書なり。
 【二〇三】奕思。博奕の思考。

【二〇四】秋儲も以て巧を競ふなく、【二〇五】取睨の妙、【二〇六】鳴謙以て下に接す。僚庶を撫して盛徳の容を盡し、士林に交りて公侯の貴を忘れ、虚懷博納、幽關洞開し、宴語談笑、情瀾竭きず。譽天下に滿ち、徳生民に冠たり。蓋し百代の儀表、千年の領袖なり。曾ち【二〇八】慙に留まらず、【二〇九】梁摧奄及す。豈唯【二一〇】僑終り【二一一】蹇謝るとき、謠を興し相を輟むるのみならんや。凡そ我が僚舊、哀を均うし【二一二】戚を共にし、天徳の厚きなきを怨み、【二一三】棠陰の留まらざるを痛み、克く【二一四】遺塵を播き之を【二一五】穹壤に敵する所以を思ひ、乃ち石に【二一六】刊し徽を圖し、情を銘頌に寄す。其辭に曰く、

天【二一七】玄鳥に命じ、降りて【二一八】商を生ましむ。是

【二〇四】秋儲。秋は人名。孟子に突秋は通國の突を善くする者なりとあり、儲は精思を蓄ふること。
 【二〇五】取睨。射をいふ。易に曰く、弧矢の利、以て天下を威す、蓋しこれを睨に取ると。
 【二〇六】鳴謙。謙抑なり、易經に、鳴謙す貞吉とあり。
 【二〇七】幽關。強ひて。
 【二〇八】慙。強ひて。
 【二〇九】梁摧。偉人の死すること、禮記に、孔子手を負ひ杖を曳き、門に逍遙して歌つて曰く、泰山其傾れんか、梁木其傾れんか、とあり。奄及。忽ち及ぶなり。
 【二一〇】僑。子産なり。終。死す

ること、子産の死するや、鄭人諺つて之を慕ふ、事左傳に見ゆ。
 【二一一】蹇。蹇叔なり。謝。死なり、蹇叔の死するや、春く者杵を相せず。
 【二一二】戚。憂なり。
 【二一三】棠陰。山の名。日の入る所なり、以て落日の意に用ふ。
 【二一四】遺塵。遺風といふが如し。
 【二一五】穹壤。天地なり、天地と同じく敵ること。
 【二一六】刊。刻なり。徽。美なり。
 【二一七】玄鳥。燕なり、有野氏の女燕卵を呑みて契を生む、契は殷の先祖にして、齊は殷の後裔なり。
 【二一八】商。殷なり、契を生みしこと。

に金運を開き、祚玉筐に始まる。(三三) 三仁國を去り、五曜房に入る。亦其馬を白くし、

周王に侯服す。本枝派別し、菜に因りて氏を命ず。(三三) 徐を涉りて東す。義梁の徙れるに均し。茲より以降、青を懷き紫を拖き、崇基巖巖として、長瀾瀾瀾たり。惟れ聖物を造し、龍飛天歩す。載ち鼎載ち革、除あり布あり。

高皇赫矣たり、仰いで乾顧に膺る。(三三) 景皇蒸たる哉。實に洪祚を啓く。(三三) 喬嶽峻く峙ち、

命世賢を興し、期に應じ徳を誕にし、後を絶ち前を光す。(二四) 幾以て務を成し、(二四) 覺民先に在り。

【大意】昔天帝燕をして卵を遺さしむ。有娥氏の女之を呑んで契を生む。是を殷の祖となす。殷の滅ぶるや、微子宋に封せられて周の諸侯となる。其族別れて蕭邑に封せらる。因つて蕭氏と稱す。是を齊室の祖となす。後徐州を涉りて蘭陵に徙り、世世顯榮なり。蕭道成大徳を以て萬物を利し、遂に登りて天子となる。能く舊を改めて新を布く。嶽神賢才安陸王を降し、高德前後に照映す。民の先覺となりて物を開き務を成し、其天爵を全うせり。

爰に始めて櫻を濯ぎ、清猷濬發す。(二四) 文盛を爲し、上に在りて哀矜し、下に臨んで莊敬す。草木天

文碑の王昭陸安の故の齊

せず、昆蟲性を得たり。我に 芳蘭あり、民膏詠する攸なり。羣夷 蠢蠢として、巖別嶂分し、山を傾け落を盡し、其の従ふこと雲の如く、妻を挈げ子を荷ひ、負戴して羣を成す。首を廻らし吏を請ふは、曾て何ぞ云ふに足らん。

【大意】 王乃ち殿陛に侍して天子に仕へ、又出でて吳越の太守となり、轉じて荊州、襄陽に徙る。皆治績の觀るべきあり。是を以て禽獸草木

皆其性を遂げ、庶民の詠歌する所となる。蠻夷亦邑居を棄てて王に従ひ、居る所羣を成す。之を漢の時蠻民の歸服せるに比すれば、遙に其右に出づ。

昔天道を聞く、仁遂げざるは罔しと。彼蒼如何ぞ、山を興して 簣に止まる。四牡方に馳せ、六龍轡を頓む。斯民曷をか仰がん、邦國 殄瘁す。齊 晏平を隕し、行哭して禮を致し、趙 昌國を徂し、列邦涕を揮ふ。況んや我が 君斯、(六) 皇

【五】 芳蘭。安陸王の盛徳に喩ふ。
【五】 蠢蠢。動く貌。
【三】 巖別嶂分。分れて山に居ること。
【三】 漢の時、南夷及び邛笮の君長、皆首を廻らし、吏を置かんことを請ふ。
【五】 彼蒼。天をいふ。
【五】 簣、もっこ、土を運ぶ具なり、論語に譬へば山をつくるが如し、一簣を覆すと雖も進むは吾が往くなりとあり、安陸王功業未だ遂げずして死す、亦山を築きて一簣に止まるが如し。

【五】 四牡。駟馬なり。六龍。日輪の御者なり。王方に駟馬に乗り國家を安靜せんとす、然も忽ちに死す、猶ほ日御の轡を止むるが如し。
【五】 殄瘁。哀傷なり。
【五】 晏平。名は嬰、齊の景公の臣。
【六】 昌國。樂毅なり、昌國君に封ぜらる。徂。死なり。
【六】 君斯。斯は助辭。
【六】 皇。明帝なり。介弟。介は大なり。

の介弟なるをや。哀 徒庶を感せしめ、慟雲陛に興る。階には 留攢を毀り、川には 歸軸を況べ、競つて 野奠を羞め、争つて去轂を攀ち、渚に遵つて號追し、渡に臨んで望哭す。終古に絶ゆるなきは、惟れ蘭と菊と 塗 帝渚に由り、朱軒駕するなし。東 瑩園に首ひ、宮に長夜に即く。逝川待るなく、 黄金化し難し。鐘石徒に刊し、芳猷永く謝す。

【大意】 天道は仁愛遂げざるなしと聞く。天何ぞ功業未だ就らざるに王を奪へる。王薨じて萬人亦誰をか仰がん。皆相俱に悲傷するのみ。階に攢を留め船に柩を載せて歸葬するや、庶民野に祭り、號哭して之を慕ふ。ああ王の徳終古に滅びざること、蘭菊と其芳を同うすと謂ふべし。中に入る。逝く者亦停むべからず、長生亦得難し。斯人永く去り、徒に金石に銘するのみ。

【六】 徒庶。庶民なり。
【三】 留攢。攢は棺のオホヒなり、殯を發し其餘を留めて國に歸葬せんとす、故に留攢といふ。
【六】 歸軸。軸は輓なり、棺を支ふるもの。
【三】 野奠。酒肉を供へて野に祭ること。羞。饜なり。
【三】 終古。永久なり、楚辭に、春蘭秋菊長へに絶ゆるなくして終古せんとあり。

【六】 帝渚。楚辭に帝子北渚に降るとあり、湘江をいふ。
【三】 朱軒。朱塗の車、平生朱軒に乗る、今死して此駕なきなり。
【七】 瑩園。墓なり。
【七】 長夜。墓穴の中。
【三】 黄金。史記に、少君武帝に言つて曰く、竈を祠れば黄金を化して神丹となし、以て神仙長生を致すべしと、とあり。

墓誌

劉先生が夫人の墓誌

既に 萊婦と稱し、亦 鴻妻といふ。復た令徳あり、一に之と齊し。實に 君子を佐け、蒿を簪にし、藜を杖にし、欣欣として負戴し、冀の畦に在り。居室有行、亟義讓を聞く。訓を 丹陽に稟け、風を 丞相に弘む。籍甚なる二門、風流遠く尙し。肇め允に才淑、閻德斯に諒なり。鄭郷に蕪没し、楊家に寂寥たり。參差たる孔樹、毫末 拱を成す。暫く 荒塹を啓き、長に幽隴を局す。夫貴く妻尊く、爵にあらずして重んぜらる。

任彦升

- 【一】 劉先生。齊の劉肅王法施の女を娶り、道義相得て、終身志を改めず。
- 【二】 萊婦。老萊子の妻、賢婦と稱せらる。
- 【三】 鴻妻。梁鴻の妻、亦賢婦なり。
- 【四】 君子。夫をいふ。
- 【五】 冀。地名なり。畦。田圃なり。左傳に白季冀を過ぎ、冀缺の耨るを見る、其妻之に饋し、敬んで相待つこと賓の如しとあり。
- 【六】 居室。未だ嫁せざる時。有行。既に嫁して後。
- 【七】 丹陽。晉の丹陽の尹劉恢は肅の六代の祖なり。
- 【八】 丞相。肅の妻王氏は晉の丞相王邈の後なり。
- 【九】 籍甚。名聲の高きこと。二門。劉王二氏。
- 【一〇】 閻徳。婦人の徳。
- 【一一】 鄭郷。墓をいふ、後漢の孔融鄭玄の爲に特に一郷を立て、號して鄭公郷といふ。
- 【一二】 楊家。墓をいふ、後漢の楊雄卒す、門人之が爲に家を起す。
- 【一三】 參差。長短齊しからざる貌。孔樹。墓上の木をいふ。

【大意】 劉先生の夫人王氏美徳あり。老萊子の妻、梁鴻の妻と、實に其徳を齊うす。よく先生を佐け、身を奉ずること質素に、亦よく欣欣として勞役に服す。夙に名家の遺訓を稟け、才徳並び高し。先生徳鄭楊に等しく、早く没して其樹既に拱を成せり。夫人亦没し、永く先生の墓中に眠る。夫妻俱に貴きは、爵祿に由るにあらず。實に道徳の然らしむる所なり。

行狀

齊の竟陵文宣王の行狀

任彦升

祖は太祖高皇帝
父は世祖武皇帝

南徐州、南蘭陵郡、縣都郷、中都里の蕭公、年三十五の行狀

公は道 生知に亞ぎ、照すこと 幾庶に隣く、孝人倫に始まり、忠令徳となる。公實に之を體す。毀譽

- 【一】 竟陵。齊の竟陵王子良、諡して文宣といふ。
- 【二】 生知。生れながらにして道を知ること。
- 【三】 幾庶。庶幾に同じ、聖人に近きこと。